
Black Book for Busters **絶望と希望の少女**

雑月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black Book for Busters 絶望と希望の少女

【Nコード】

N1653Q

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

ある日、荒谷鈴花あらたにすずかが通う学校に突如現れた巨大な物体。それは世界の終焉の始まりを告げた。終焉へ向う世界で為す術も無く逃げ惑う人々。

またある時、世界の終りを知った研究者たちは対抗すべく黒い本を創り上げる。

黒い本を託されたのは別の世界の荒谷鈴花。希望を託され、終焉へ向う世界に降り立つ鈴花。

彼女は降り立った世界に戸惑いながらも黒い本、本の番人ハルとも世界を破壊する敵に立ち向かう。

それが、大切なものを破壊する行為だとしても。

同作者作「Black Book for Busters」の拡張版。

第一話 流れ星の行方

第一話 流れ星の行方

授業の終了を知らせるチャイムの音。黒板の前に居る教師は手短に次回予告をして去っていった。先生が退室すると途端に空気が緩くなる。各自思い思いに友達と会話する。

「あー終わった。」

あらたにすすつか

荒谷鈴花は背伸びをした。午前四つに午後三つの七時間授業は体力を削ぎ落とされる。特に最後の方の授業になれば先生方も理解して難しい内容にはあまりもっていかない。

「おつかれ。もう外暗いし早く帰ろうよ。」

こはやしきちんこ

話しかけてきたのは鈴花の友達である小林京子。彼女は速やかにカバンに教科書類をつめ込むと背負い込んだ。

「はいはい、ちょっと待って。」

鈴花はいいや立ちながらカバンに教科書類を入れ始めた。動きたくないが座ったままではずっと椅子に座ったままなので動く。何時も行う作業。慣れると行動が最適化されて無駄がない。無意識のうち済ませてしまうことも良くあることだ。しかし、作業手順からこぼれたものは意外と見付けづらい。

「あ、荒谷さん。ちょっといいかな。」

まなへそつた

クラスメイトの真部宗太が話しかけてきた。彼とは京子以外では良く話す間柄だ。しかし、現状の鈴花には対応できない。

「ああ、ごめん。今日は疲れているからまた今度ね。明日の放課後にでも聞いわ。」

鈴花はカバンを持つと京子と共に歩き出した。少し頭がふらふらする。早く帰って休みたい。覚束ない足取りで階段を降りると校庭へ出た。隣の京子も心配そうに話しかけてくるが鈴花は大丈夫だと言っ。

校庭では野球部や陸上部が練習をしている。そういえばもうすぐ彼らにとって重要な試合がある。確か中学校総合体育大会だったと思う。それと毎年大会前に全校生徒の前で各部が抱負を語る行事がある。

「じゃあ、また明日ね。」

気がつけば京子と別れる場所まで来ていた。鈴花はどうか対応するとそのまま家に向かって歩き出した。そういえば、今日は前から楽しみにしていた番組がある。さっさと勉強を終わらせて見よう。

鈴花が自宅の庭に入ろうとしたとき、視界の端で何かが見えた。彼女は素早く何かが見えた方向を向く。月も隠れ隠れに地上を照らしているために辺りは暗く人々の光だけしか見えない。彼女はじつと目を凝らす。すると、小さな光が空から落ちてきた。ひとつ、またひとつと落ちてくる。

鈴花は首を傾げた。これはもしかや流れ星だろうか。この際お願い事をしようと思ったら見えなくなってしまった。

再度家に入ろうとしたときまた流れ星が見えた。これはよく知らないが流星群というものだろうか。最近ニュースを見ていないので分からないが、近々流星群があるとニュースで流れていたかもしれない。

鈴花はずっと庭に居るのも嫌なので家の中に入った。

「ただいま。ねえ、外で流れ星を見たよ。いや、流星群かもしれないけど。」

「流星群って深夜に見えるんじゃない。それよりも早く勉強しなきゃいなさいよ。」

台所に居た母親に言ってみればなんとも冷めた反応だ。

鈴花は詳しくは知らないので反論できない。この話はやめて二階の自分の部屋に入った。室内には色々置かれている。壁にはアイドルのポスター。アイドルと言っても男性では無く女性である。

室内には他にベッドと机があり、机の上には写真立てがある。写真立てには先日家族三人で撮った写真が入っている。父親が仕事で

なかなか帰ってこないの、この写真が父親の居ない寂しさを紛らわせている。というのは嘘で母親から写真立てを貰ったので飾っているのだ。父親が帰ってきててもあまり会話していない。相手から話が振られれば対応するといった形で、彼女自身からは話題を出さない。冷めた関係と言われればそういうものだろう。

鈴花はベッドにダイブすると目を閉じて深呼吸した。そして、すぐに机に向かう。

鈴花はさっさと勉強を済ませて食事をしながら楽しみにしていた番組を見た。内容は地球上の色々な場所にリポーターが行ってクイズを出す内容だ。知らない事実がたくさんあって面白い。

番組後に他のテレビ局で放送されてるニュース番組を見たが、流星群だとかといった話は出てこなかった。

ならば、あの幾つもの流れ星は何だったのだろうか。

鈴花は首をかしげたが、それで答えが出てくるわけではない。

第二話 奇襲

第二話 奇襲

流れ星を見た次の日。鈴花は学校で昨日の流れ星についてを京子に伝えた。

「それだけの数なら流星群って言えばそうだけど。私は見なかったわ。他に見た人は居ないのかな。」

休み時間を使って他のクラスメイトに聞いても良い返答は得られなかった。鈴花が見たのはなんだったのだろうか。確かに流れ星を見た。

「おーい。授業を始めるぞ。」

数学の先生が教室に入ってくる。休み時間のざわめきは徐々に消えていった。

何時もと変わらない授業。沢山の英数字が数式の中に散りばめられている。

鈴花はため息をついた。彼女は数学が嫌いだ。問題は解き方さえ分かれば解ける、分からなければ解けない。解き方を知っているかどうかで決まってしまうのだ。また、解き方を知っていても計算をしなければならぬ。その計算がまた面倒である。簡単に答えが出るわけでもなく幾つもの数字を四則演算して真の解答を導き出す。解き方が分かっても計算間違いで正しい答えに導けるとは限らない。

その点他の教科は別である。理科や社会ならほとんどが暗記中心。英語や国語はルールはあるものの答えが必ず一つに決まっているとは限らない。

数学は最初から決まっているのだ。問題と解き方を与えれば必ず決まった答えが返ってくる。決められた答えを求めて四苦八苦するだけだ。

「荒谷。黒板の式を解いてくれないか。」

鈴花は気がつけば先生に指されていた。仕方なく黒板の前に立つ。式を確認して計算を始めた。嫌いでも出来ないとまずいので勉強している。それに受験も近づいているのだ。

鈴花は問題の最後の答えをチョークで黒板に書き込んだ。

「はい、出来ま……。」

先生を見たとき、その歪んだ顔に言葉を失った。彼は何かを見ていた。なにを見ている。

「何あれ、なんなの。」

突然発せられる複数の声。彼女は彼らの視線の先を見る。彼女はその光景に持つていたチョークを床に落としてしまった。

青空と地上の間に見える異様な大きさの丸い円盤。緑色のその物体はコインを立てた姿のまま周りの建物を破壊しながら学校に向かってくる。

他のクラスから悲鳴が聞こえてくる。先生もクラスメイトも突然の事で悲鳴は聞こえるも動き出すものは居ない。鈴花も同様に動けなかった。

緑色の円盤は学校の敷地手前で動きを止める。

「なんか危ないよ。逃げようよ。」

鈴花は京子に思い切り揺さぶられていた。クラスメイトの多くが今だ動けないでいる。

突如廊下に響き渡る非常ベルの音。ベルの音に押されるように鈴花の身体はゆっくりと動き出しその場から後退し始めた。同時に緑色の円盤もゆっくりと動き出す。

次の瞬間。校舎が大きく揺れた。今まで感じたことのない激しい揺れと窓ガラスが割れる音、人々の悲鳴が同時にその場を満たした。鈴花はその場に倒れながらもなんとか外を見た。そこには校舎に激突した円盤の姿があった。円盤からは無数の黒い手が伸びている。鈴花の脳が必死に身体を動かそうと叫ぶ。ここから早く逃げろ、なんとしても逃げろと。

鈴花はそばに倒れた京子を立てせると教室の出入口に向かって走

った。背後から聞こえる悲鳴。

鈴花が出入口付近で振り返れば緑色の円盤から伸びた黒い手がクラスメイトを絡めとっていた。巻きついたクラスメイトは跡形もなく消えていく。これは悪夢だ。冗談なら早く終わって欲しい。

一本の手が鈴花たちに向かってくる。鈴花は京子に引つ張られながらその場を離れた。

急いで階段を降りた。他のクラスの生徒たちが雪崩のように昇降口に向かっていく。

校庭に出ると走りながら校舎を見た。緑色の円盤は未だ校舎に向かって手を這わせている。ふと、屋上を見れば何人かの生徒の姿が。その姿も黒い手によって消えてしまった。

「何よ。なんなのよ。」

鈴花はおもいきり叫びながら京子と一緒に逃げた。町中に響き渡るサイレンの音からこの世の終わりを予感した。簡単には理解できないほど恐ろしい事が起きているんだ。

鈴花と京子は学校から程近い自分の家に向かって走った。サイレンの音に驚いて多くの人々が通りに出ている。

「逃げる準備をしましょう。」

二人は途中で別れてそれぞれの家に帰った。鈴花は自分の家に入るとすぐに靴箱から運動用の靴を出した。それとともに母親を呼び寄せる。半分叫び声に近かった。出てきた母親は事態が呑み込めていないらしい。すぐに母親を強引に引つ張り出した。そこから学校の方角を指差す。そこには緑色の円盤が居るはず。しかし、そこには何も見えなかった。変形した校舎がそこにあるだけである。もう、円盤は見えなかった。そこへ京子とその母親が現れる。京子のほうも母親に理解させるために連れだしたらしい。

鈴花と京子は先程までの事を二人の母親に言った。母親たちは、校舎の状態と響き渡るサイレンの音から彼女たちの発言を否定できず、心配そうに学校のほうを見ている。

しばらくしてサイレンは止んだ。鈴花と京子は母親たちと一緒に

学校に戻る。

学校の校庭はまるで避難所のような状態だった。そこには逃げ延びた先生と他の生徒や親たち。また、警察の人間が沢山居た。明らかに全校生徒の数より少ない。わが子を必死に探す親の姿、泣き叫ぶ声がそこかしこから聞こえてきた。中にはけが人も居るようだ。そして、この事件を伝えようとする報道記者たち。生徒や保護者たちにコメントを求めている。

鈴花や京子にも何人かクラスメイトの親が話を聞いてきたが、上手く答えられなかった。そういえば、真部宗太は見えない。話があると言っていたけど結局聞けていない。彼も消えてしまったのだろうか。

鈴花が校舎を見上げれば、今にも崩れてきそうなほど歪んでいた。朝礼台を見れば警察の偉そうな人が登壇していた。

「生徒、保護者のみなさん。どうか、落ち着いて聞いてください。」警察の話が簡単にまとめればこうだ。

今回の件は本当に原因不明の出来事らしい。逃げ延びた生徒や先生の話では、はじめに校舎に突然巨大な緑色の円盤が激突。次に、円盤から手が伸びて生徒や先生たちを捕まえ始めたというのだ。最後に、生徒や先生たちが逃げ惑う中で円盤は跡形もなく消えてしまったということらしい。残ったのは歪んだ校舎と逃げ延びた生徒と先生だけ。相手は跡形もなく消えてしまったために警察側は探そうにも見当がつかないらしい。

「それではみなさん。この事件が解決するまで自宅で待機するようにしてください。」

生徒及び先生たちはしばらく自宅待機となった。生き延びた者たちはそれぞれの家に戻り始める。鈴花と京子も母親たちと一緒に学校を離れた。校庭から離れない人たちも多い。その姿を出来るだけ見ないようにして学校を出た。

帰宅すると鈴花の母親はすぐに電話をかけた。相手は父親だろう。こんな時でも仕事をしているのだ。仕事といっても研究で新しい技

術を創りだすことらしい。あまりよくわからないが、毎月もらえるお小遣いは悪くない。

「なんなのよ。こんな状況なんだから早く帰ってきてよ。」

母親の口調が荒くなっていく。終いには叩きつけるように受話器を置いてしまった。彼女は拳を握ってなんども振り上げている。

「娘が危ない目にあつたつていうのにあの人は研究々つて。もう知らないわあんな人。」

母親は吐き捨てるように言つて居間に向かった。鈴花もこれ以上怒らせないように黙つて付いていく。怒つた母親はこの世で一番たちが悪い。

鈴花たちは居間に座つて大きく息を吐いた。

「とにかく落ち着きましょう。落ち着かないとやっていられないわ。」

鈴花は何度か深呼吸をすると、今回の事について少し話した。しかし、話し始めるとあの時の事を思い出して息が荒くなる。今回の件はこれまで生きてきた中で一番怖かつた事件となつた。

「鈴花。部屋に戻つて好きにきなさい。夕食になったら呼ぶわ。」

それぞれが普段通りの行動パターンに戻ろうとしていた。違うのは鈴花がいつもより早く家に居ることだ。

情報通信技術研究所。ここは情報系、通信系に特化した研究を行っている施設。この研究所に鈴花の父親は勤めている。

荒谷は受話器を置いた。心配そうに大塚が聞いてくる。彼は大丈夫ですと言つて作業に戻つた。

電話は妻からだつた。話は先にニュースで知っていた。娘の鈴花が通つている学校に得体のしれない巨大物体が現れたそうだ。娘が無事なのか心配であつたが、無事は確認出来た。大塚にすぐにも帰れと言われたが気になる事があつた。それは研究所に送られてきた意味不明の電子メール。ただのいたずらにも思えたが、メールの

受信日時は娘の事件が起きる少し前だった。送られてきたタイミン
グから、意味不明のメールと娘の事件は無関係とは思えないのだ。
このメールは何かを表している。

荒谷は再び送られてきたメールを見た。差出人は不明。よくこう
いうメールは海外を経由して偽装していることがあるが、今回はそ
んな単純なことではない。メールのヘッダを調べてもドメインが存
在しないのだ。ならば、このメールはどこから来たのだろうか。

メールの本文は意味不明な文字列。文字化けではないかと複数の
文字コードに変換してみたがどれも意味を成さない。このメールは
暗号化されているのだろうか。暗号化されているのならばこの研究
所の誰に当てたものなのだろうか。

「なんなんだこのメールは。誰が何のために送ってきたんだ。」

荒谷は頭を抱えた。その頭に突き抜ける非常ベル音。彼はすぐに
通路に面したドアから通路を見た。出入口から何かを破壊する激し
い音と他の研究者たちの悲鳴がこだまする。

「どうした。何が起きたんだ。」

荒谷は出入口に向かった。そこには土煙を上げる丸い岩があった。
その場に不似合いな丸い岩に彼は一瞬思考が停止する。丸い岩が動
き出すとともに辺りが振動した。金縛りが解けるように荒谷は動き
だす。

「荒谷さん。早くここから逃げてください。」

岩の背後に後輩研究者が居た。後輩研究者が微笑んだ瞬間、別の
丸い岩に押しつぶされた。轢かれた研究者は跡形もなく消えてしま
った。どこに消えた、どこに行ったのだ。

心臓の鼓動が早まる中、荒谷は今日の娘の事件を思い出した。被
害者の証言から捕まった人間は跡形もなく消えてしまうのだ。今眼
の前起きていることも同じではないか。ここから離れなければなら
ない。彼は丸い岩を避けてそのまま敷地外へ出た。

「誰か、誰か助けてくれ。」

荒谷は力いっぱい叫んだ。しかし、何も反応が無い。門を出たと

ところで辺りを見た。近くの商店街に向かって走る。人も犬も猫も居ない。無音の中、彼の鼓動はさらに早くなる。もう、泣きそうだった。誰か、誰か居ないのか。

「荒谷のおじさん。」

交差点で少年を見つける。確か、彼は娘の友達のこと……。

荒谷は背後から強い衝撃をうけてその場に倒れた。足に激痛が走る。振り返れば岩が足を押しつぶしていた。彼は激痛に叫びながら目の前にいる少年を見た。助けてくれと手を伸ばす。

少年は不気味な笑みを浮かべた。

「さようなら、荒谷のおじさん。」

断末魔の叫びが空に広がる。

第三話 狂った一日

第三話 狂った一日

鈴花はあくびを噛み殺した。今は朝の電車内。朝とは言っても通勤ラッシュは避けている。隣には母親が神妙な顔で窓から外を見ていた。

「大丈夫だって。お父さんなら大丈夫だよ。」

鈴花は自分に言い聞かせるように言った。本当に何が起きているのだろうか。

鈴花が朝のニュースを見てみると昨日の出来事について語られていた。だが、敵の映像は無い。未だ相手がなんなのか分からないようだ。

そこで速報が入ってきた。今度は別の地域の人間が朝方何十人も消えていなくなっているのが確認されらしい。その地域には鈴花の父親が勤めている研究所がある。アナウンサーが小刻みに震えながらなんとか原稿を読もうとしていたのを良く覚えている。

それからすぐに母親と一緒に家を出た。その時、京子に出会った。昨日の出来事が怖いので自分だけしばらく母方の実家に帰るそうだと鈴花も実家に帰りたいなと思ったが、父親を見つけてから考えることにした。それに今母親を一人にするのは危ない。

鈴花は車内アナウンスを聴いて反射的に外を見た。もうすぐ目的の駅に着く。車内から見えてきたのは駅前に居る人々の姿。中には警察官も混じっている。

鈴花たちは駅を出て広場を歩く。何時もは沢山の人が駅前に居るが、今日は人が極端に少ない。その中で警察官が周囲に目を配っている。悪いことはしていないつもりだが、こんなところに居て職務質問を受けても良くない。

「早く行きましょう。こっちよ。」

駅前通りから素早く細い裏道に入る。母親を先頭に緩やかな坂を登っていった。両側にある店はほとんどが閉まっている。道は徐々に平坦になり、大きな通りに出た。この通りを真っ直ぐ行くと父の勤めている研究所に着く。前に居る母親が徐々に歩みを速める。道路はひび割れ、危うくつまずきそうになる。なぜひび割れているのだろうか。

父親が勤めている研究所前に近づく。見えてきた研究所は所々破壊され無残な姿をしていた。研究所の門には進入禁止のテープが貼られている。研究所の敷地内と外に警察官が何人が居た。

「夫がこの研究所の関係者なんですが。」

母親は父親について警察官に聴いている。鈴花はふと門前を通っている道路を見た。先程からずつと道路表面がひび割れている。彼女はひび割れにそって歩いた。背後からの母親の声が聞こえたが身体が反応しない。それ以上に目の前のことが気になるのだ。

ひび割れを追い続けて交差点まで来てしまった。さらにひび割れは続いているが一部ひび割れが少ない部分があった。なぜここだけひび割れが少ないのか。

「ちよつと鈴花。待ちなさいってば。」

背後から母親の声がある。その時初めて母親の制止に気がついた。鈴花が振り返ろうとしたとき、交差点に母親の叫び声が響いた。

鈴花はすぐさま目の前の道路を見る。そこには、血だらけの父親が横たわっていた。しかし、すぐに消えてなくなってしまった。

母親の声で近隣の住民が出てくるかと思われたが誰も出てこなかった。いや、出てこれる人間が居ないのか。

母親は顔が青白くなっている。

「さつき、警察の人に聞いたんだけど。研究所の職員を含め、この辺りのほとんどの人が行方不明らしいわ。」

母親の話では先程の警察の人とのやりとりで交通機関も生きていないので家に帰っているのではないかと言われたそうだ。しかし、今日の前の状態を見ると父親は死んでいるのではないかと思ってしまう

う。鈴花は母親の腕を掴んだ。

「家に帰ってみようよ。」

鈴花はもうこれ以上ここに居ても何も起きないと思った。彼女は母親を駅まで引つ張って電車に乗せた。車内は来たときよりも少なくなっていた。駅までの道で見える風景すべてがこの世の終わりだった。人は居ない、居てもどこか店を襲撃している。従業員や警察の人たちがそれを阻止しようと奮闘していた。映画の中の出来事が今日の前に広がっていた。まるで人類滅亡の……。

そこで鈴花は首を横に振る。まだ、大丈夫だ。大丈夫だと思わなければ駄目だ。駄目だと思ったらそこで終わりだから。

鈴花たちは何事も無く自宅の最寄駅に着いた。正午を過ぎ、彼女はお腹が空いてきた。母親の話では家に材料があるので帰って食べようということになった。

鈴花たちは改札を出て南口から家に向かってペDESTリアンデッキを歩いた。空は灰色の雲で覆われていて、太陽の光は届かない。駅前を通る人は沢山居たが、みんな見えない影に怯えているように見えた。

鈴花が階段を降りようとしたとき、どこかで叫び声が聞こえた。

鈴花はすぐさま辺りを見回す。今度はなんなのだ。すると、別のところからも叫び声が聞こえた。また別の所から。叫び声は広がり、まるで叫び声が何かの音楽を奏で始める。

気がつけば母親に揺さぶられていた。

「鈴花、あれ。」

母親が指さした先、地上にはマンホールから水が溢れ出していた。上下水道どちらかはわからない。いや、そこは重要ではない。問題は、水に触れた人々が叫び声を上げて消えていくことだ。何が何だかわからない。今も水かさを増している。鈴花は後退しながら目の前の光景を否定しようとした。

「なんなのよ。なんだっていうのよ。」

鈴花は頭を抱え空に叫ぶ。夢なら覚めて欲しい。早く覚めて。

「ここまで水が来るかもしれないわ。とにかく、もつと高いところに。」

母親に引つ張られながら鈴花はゆっくりと走りだした。

ペDESTリアンデッキを通って、駅の北口に出る。目の前には大型の専門店があり、二階部分が駅前広がるデッキと繋がっている。叫びの連鎖。北口は南口よりも人が多いためか、水に触れて消えていく人は多い。

専門店に入る頃には、二階と一階の中間まで水が溜まっていた。

「どうしてこんなに水かさが増すの。何があつたつて言うのよ。」

鈴花たちは店内に入ってからもさらに上を目指した。店内に逃げ込んだ他の人も同様に上の階へ向かっていく。ここは確か十階まであつたはずだ。

鈴花は疲れて歩みが遅くなった母親を引つ張りながら同じ風景ばかりの階段を上る。すると、十階で階段に人が詰まっていた。上のほうから何か低い叫び声が何度も聞こえてくる。これ以上は行けないのだろうか。鈴花たちは十階の空いたスペースに移動した。後から何人も十階に来たが、十階のスペースを埋め尽くすほどの人数は来なかった。

鈴花は母親をその場に座らせると近くの窓から地上を見下ろした。その様に愕然とする。見渡すかぎり水浸しなのだ。先ほどいた駅も水に浸っている。

昔テレビ番組で南極の氷が溶けたらなんとかかんとかと言っていたが、既にその時の水位を軽く超えているだろう。それに今いる地域は海に近いとはいえ海岸から三キロ以上も離れた丘にある。この水も、触れると消えてなくなる理由も何もかもわからない。誰の作業なのだ。

「どけよ。俺が先だ。」

階段のほうを見れば若い男性数人が争っている。すぐに殴り合いが始まった。周りの男たちが止めに入る。屋上には行けない、下から水が来ている。どうしろというのだ。

ある小さな男の子は泣きながら鈴花の近くにうずくまった。

「お母さん。どこに居るのお母さん、えっく。」

少年の大粒の涙が頬を伝って床に落ちる。

鈴花は男の子に近づいて慰める。慰めると言っても自分出来ることなんてたかが知れている。気がつけば鈴花の母親もそばに来ていた。男の子はなんとか落ち着きその場に座り込んだ。彼の名は優というらしい。名前だけは聞くことが出来た。

彼女は持っている携帯電話を開いた。アンテナは立たず圏外になっている。唇を噛みしめた。どうしろというのだ。

その時、階段のほうに居た人々が動き始めた。屋上の扉が開いたようだ。吸い込まれるように十階から人が消えて行く。

「一緒に行きましょう。ここに居ると危ないわ。」

鈴花は優を立たせると母親と一緒に階段を登って屋上に出た。

太陽の光が眩しい。どういふことか、先程まで雲に隠れた太陽が顔を出している。

鈴花は優を母親に預けるとビルの手すりから周りを見た。他のビルの屋上にも逃げ延びた人々が沢山居た。

「ねえ、水が引いてきているわ。」

鈴花は誰かの声でビルの真下を見た。六階ぐらいまで水が溜まっていたが、みるみる水が引いていく。二階のペDESTリアンデッキを越えて地上にある水まで消えてしまった。

鈴花は母親の声で振り返った。母親と優も他の人達の話し声で現状を把握したいようだ。二人は不思議そうにビルの真下を見る。

「水が全部なくなってるじゃないの。」

「水が無くなってる。なんで。」

二人とも驚きを隠せないようだ。鈴花自身もそうなのだから仕方がない。すぐにその場で優の家族を探した。店員の手伝いもあつて屋上に上がった人の中に母親を見つけた。

「優。良かった。本当によかった。」

優の母親の話では九階までは一緒に居たものの背後から来た人た

ちに押されて優の手を離してしまったそうだと。彼女自身は十階から屋上に向う階段の中に閉じ込められて動けなかったらしい。

鈴花たちは優の母親が見つかってほっとした。こんな状況だから見つからないのではと少し思ってしまったのである。

こうなれば後は地上に戻るだけ。鈴花たちは優とその母親に別れを告げると他のお客と共に十階から一階まで降りた。もちろんこんな状態だから店への襲撃や万引きが発生してもおかしくない。実際に何度か起きた。各階で数少なくなった店員と一緒に居たお客が対応している。これは子供に見せられない姿だ。

「早く家に帰りましょう。ここに居るべきじゃないわ。」

鈴花は母親に引つ張られながら店をでてそのまま家に向かって歩いた。彼女は何度か掴まれた腕を振ってようやく母親の手から逃れた。

鈴花と母親の口論が始まる。「痛い、歩くのが早い」といった鈴花側の発言から始まり、「あんなの自分の子供に見せられるわけ無いでしょ」という母親の反論に続く。

二人は帰り道を言い合いながら歩いた。お互い言いたいことが無くなるのは早いもので、言い終わると家までお互い黙りこんだ。黙りこむと今度は静寂に耐えきれなくなりお互い謝って話は終了した。鈴花は母親との話の中で、言い争いの後に何が得られればそれはそれで言い争った意味があると思った。しかし、何も得られないまま終わるのは何かもつたない気がした。これは争い損ということだろうか。

「ただいま。」

誰もいない家の中に響く声。鈴花の母親は彼女を残して近所の子を見に行った。この辺り周りの地域よりも少し窪んだ場所で雨の時に水がたまりやすい。

しばらくして母親が帰ってきた。顔が暗い。どこかで生気を吸い取られたのではないかと思ってしまうほどだ。

「誰も居なかった。朝は居たのに。隣の斉藤さんも、向かい側の高

崎さんも。今は誰も、誰ひとり……。」

鈴花の母親はその場に崩れた。彼女は母親に肩を貸してリビングのソファに座らせた。部屋の隅にあるスイッチを押すと明かりが点いた。電気が生きているのはこの現状では奇跡的である。

鈴花は母親を落着かせると、家の中を確認した。この家も先程の水に浸ったはずだ。だが、水に浸ったにはおかしい。床も壁も物も水に濡れた形跡はない。急いでいたから忘れていたが、専門店の屋上から一階に降りるときに水がはねたということはない。そもそも濡れていれば転ぶ人が現れるが周りに居た誰ひとりとして転んでいなかった。水はすぐに引いたのは見えたが、床に少量の水が残っていてもおかしくない。なぜ、乾いているのだろうか。それとも、彼女たちが見た水は水じゃなかったのだろうか。

鈴花はここで思考を停止して母親そばに座った。何気なくテレビの電源を入れる。どの局もニュース番組。時間帯はお昼のドラマをやっている頃だが、それらを中止して行っているようだ。それだけおかしいことが続いている。各テレビ局も被害が出ているようだ。男性ニュースキャスターの振りで、先程見た水らしき何かについても映像が出てきた。映像にはテレビ局員が水に触れることで絶叫しながら消えていく様が映し出されている。ちよつとこの映像は昼に出しているのかと考えた。モザイクが掛かっているとはいえ、見る者に強烈な印象を与える。身を削って報道するとはこういうことだろうか。

ニュースキャスター他にも政府の対応についてや類似の事件について報道していた。ふと、何かニュースキャスターたちの声とは異なる音がスピーカーから微かに聞こえてきた。鈴花は音量を上げる。その時、突然隣に居た女性アナウンサーがカメラからは見えない位置を見て叫んだ。鈴花は突然の事に飛び上がった。直接テレビのスピーカーから出た声は、生々しく部屋に響く。カメラはすぐさまアナウンサーの視線の先を追う。カメラの映像にまた鈴花は飛び上がった。画面に映ったのはスタジオの出入口。そこには首なしの人間

が横たわっていた。カメラはすぐさま別の方向に向けられた。スタジオの慌てている声や低い叫び声が次々とマイクに拾われる。すぐに画面が切り替り「しばらくお待ちください」の表示が出た。母親を見れば何も言わないがじっとテレビ画面を見ている。先程見えたのは確かに首のない人間の死体だった。しかし、なぜそんな死体がテレビ局のスタジオに現れたのだろうか。

鈴花はリモコンを操作して順にチャンネルを変えてみた。どの局もニュース番組をやっていたが、最初の局と同様何かに怯えるスタッフを映した後に「しばらくお待ちください」の画面になった。しばらく回しているとすべての局の画面が「しばらくお待ちください」の画面になってしまった。各テレビ局ともに何か問題が起きたのだ。それは最初に見た首なし人間が他の局にも発生したのだろうか。鈴花は「しばらくお待ちください」の画面をじっと見つめながら考えた。

すると、次に真っ黒い画面になった。

「どうして、何が起こったの。」

「電波が届かなくなったのよ。」

鈴花はすぐさまチャンネルを変える。一つ、またひとつとテレビ局の放送が終わっていく。終にはすべてのテレビ局の電波が届かなくなった。

鈴花はテレビを消した。そのままソファに寝転がる。画面が切り替わる前までの事を考えれば、各テレビ局で正常に放送できないほどの事故が起きたのかもしれない。だが、実際の所は分からない。想像するだけで本当のことは何一つ分かっていないのだ。

「鈴花、ご飯作ってあげるからね。それまで何かしてなさい。」

鈴花は母親を見上げる。彼女は母親に笑顔で見返された。母親はそれ以上何も言わずダイニングに向かった。その姿を彼女は目で追う。

あの笑顔は母親なりの励ましなのかもしれない。鈴花と自分への。

第四話 少女の現実

第四話 少女の現実

蛍光灯の光が降り注ぐリビングルーム。鈴花は両親と共に笑いあいながら話をしていた。

「なんか暑いね。冷房の設定温度下げようか。」

室内が暖かく感じる。鈴花は冷房の設定温度を下げた。彼女は両親との会話を再開する。しかし、まだ部屋は暖かいままだ。

「なんなのよ。なんで下がらないの。」

鈴花はさらに設定温度を下げた。一度下げることによりはさらに暖かくなっていく。暖房になっているのではと思ったが、表示はしっかりと冷房になっている。彼女はリモコンをテーブルに置くとエアコンの側まで行く。

「なんなのよ。ちゃんと動いてよね。」

エアコンの周囲も暖かい。不思議に思いつつエアコンから出る風に手を当てた。その風は熱風のように熱く、彼女はすぐに手を引っ込めた。室内の急激に気温が上昇していく。熱い、なんでこんなに熱いのだ。

鈴花が窓を開けようとしたとき、ふっと視界が暗転した。

鈴花は暑さに目を覚ました。真っ暗な部屋の中、すぐに周りを見て悟った。暑いのは無く熱いのだ。家具や壁が燃えている。そう、家が燃えているのだ。

「火事なの。はっ、早く逃げないと。」

鈴花はパジャマのまま部屋を出て階段を降りた。母親の寝ている部屋に行つて起こそうとする。周りには既に火がまわっていた。母親は周りの状態を見て事態が飲み込めたようだ。

「鈴花、早く逃げましょう。」

鈴花は母親の手を引っ張って玄関に向かった。熱い、早くここから出なければ。

彼女が玄関のドアを開けて家を出ようとする。その時、背後で大きな音がするとともに母親の手を掴んでいる彼女の手が引っ張られた。あまりの強さに母親の手を離してしまふ。

鈴花が振り向いたときには既に玄関口に居た母親の上に大きくて分厚い木の板が載っかっていた。燃え盛る炎の中、掴んでいた母親の手だけが外へ飛び出している。その手が母親のうめき声と共に動く。

「お母さん。おかあさん。」

鈴花は絶叫しながら母親の上にある板をどかさうとした。けれども、重く炎に包まれているために動かすことができない。その間も母親の声と手は生きていることを示している。

鈴花だけでは駄目だ。彼女は半ば絶叫しながら通りに出て助けを呼んだ。だが、彼女はその場で立ち止まる。誰も見当たらない。見渡す限りの家々がすべて燃えている。見上げれば空から太ったミサイルが落ちてきている。落ちると爆発して炎が辺りを覆う。

鈴花は力いっぱい叫んだ。助けてくれる誰かに届くように。しかし、その声は無常にも空に広がるだけ。助けを諦めて玄関口に戻ればさらに火が増していた。炎から飛び出している母親の手はだらりと垂れ下がっている。声も聞こえてこない。もう、死んでしまったのだ。

鈴花の頬を涙が伝う。頭を抱えその場に崩れた。鼻をつく匂い。彼女は絶叫した。目の前に広がるすべてが夢であって欲しい。ベッドで夢から目覚める朝を求めた。そこには母親が居るはずだから。しかし、彼女が叫び続けても夢から起きることは無い。

これが鈴花にとっての現実だから。

ぼたぼたと地面に落ちる涙をぬぐいながら鈴花は立ち上がった。炎から飛び出した腕が一瞬視界に入ったがすぐに目を逸らした。見

てはいけないものだった。このままではどうかしてしまいそうだった。鈴花は自宅の敷地から出ると火がまわっていない場所を求めて走った。

「なんなのよ。私たちが何か悪いことしたって言うの。知っているなら誰か教えて。教えてよ。」

鈴花は叫びながら走る。自分の無力さに。この現状を招いた何かに向かって。

どこもかしこも炎に覆われていた。炎に覆われた人も見える。彼らは無言で何歩か歩いて倒れるとすぐに消えてしまった。人によっては太ったミサイルが直接身体にぶつかって爆発炎上である。まるで戦争だ。何が起きたというのだ。

鈴花は走り続けた。燃え盛る人々をかわしながらなんとか火がまわっていない駅前についた。階段を上ってペDESTリアンデッキを走る。駅構内を南口から入って北口に出ようとした。

鈴花は改札口前で立ち止まり、両膝に手をつけて座り込んだ。ずっと走ってきたためか息が上がっていた。休まなければこれからも走れない。彼女はうずくまりながら酸素求めて空気を吸い込んだ。

母親の顔が脳裏をよぎる時、それを必死に追い払った。何時も見た顔が今はみたくない。思い出したくない。思い出したらまた。

鈴花は溢れてきた涙を両手で拭った。彼女たちが一体何をしたいというのだ。

鈴花は自分を落ち着かせると、再度走りだそうと立ち上がった。

その時、目の前に男が居ることに気が付く。彼女は立ち上がり男を良く見た。男は、真部宗太だった。

「真部くん。生きていたんだね良かった。」 鈴花は知り合いの無事に安堵した。お互いこれまでの事をなんとか話す。彼女が思い出して苦しくなると真部は無言で慰めてくれた。

「真部くんが居てくれて、本当に良かった。」

真部は学校に来た化物から逃れて家に居たそうだった。だから学校には戻らず姿は見えなかったのだ。変な水が溢れてきたときも母親と

一緒に南口にある専門店の上階で食事をしていたためか逃げ延びたそう。今は火から逃れて北口から駅構内に入って来たらしい。北口もかなりの建物が燃えているそう。

「一人で本当に心細かったの。一緒に行動しましょう。二人ならなんとかなるわ。」

鈴花は北口か南口か、逃げる方角を考えた。南北どちらも火がまわっている。どうせなら海に近いほうだ。彼女は真部の手を掴んで先程来た南口へ向かって走りだす。しかし、彼女の手は振りほどかれた。

「ちよつと、振りほど……。」

振り向いた瞬間、鈴花の首に鋭い痛みが走った。彼女は一瞬何が起きたのか分からなかった。首の辺りがすごく痛い。ぼたぼたと何かが床に落ちていく。よく見れば血だ、彼女の血。

鈴花は疑問をもって真部を見た。その姿は先程の彼とはまるで違っていた。気持ち悪い笑みを浮かべている。こんな彼を今まで一度も見たことがない。

そこで鈴花の視界は宙に舞う。あれ、どうして。考えるまもなく濁りだした視界の先に床が見えた。その床はものすごい速さで近づいてくる。

床にぶつかると同時に鈴花の意識は途切れた。

駅構内に甲高い笑い声が響きわたる。声の主は真部宗太だ。目の前には首が離れた少女の亡骸がある。

「楽しい、実に楽しいよ。こんな世界を破壊できるなんて嬉しい限りだ。他の奴にやらせずに全部自分一人でやってしまえば良かったな。」

真部は眼の前に転がる少女の亡骸に目をやる。

「荒谷鈴花。君を含め荒谷家の者だけは簡単には殺せないようになつていたんだな。お前の父親を殺したときに気がついたよ。さぞ、

おまえたちは人間たちにとって特別な存在なのだろうな。」

真部は鈴花の頭を身体の前あたりに置いた。せめて最後は人の形をしたままにしておこう。彼女は人間に操られた犠牲者なのだから。

真部は鈴花の亡骸が消えていくのを横目に駅の南口を出た。ペDESTリアンデッキから見える一面が炎に包まれている。

真部は背後に気配を感じて振り返った。そこには緑色の円盤が宙に浮いていた。

「なんだお前か。どうしたんだ。」

円盤に刻まれた模様が所々光る。彼は模様の光り具合で相手としゃべるのだ。

「そうか。先程の荒谷鈴花が最後か。ご苦労さま。では、母さんに報告しよう。」

真部は携帯電話を取り出して番号を打つ。通話ボタンを押すと耳に当たった。呼び出し音が鳴っている。ふと、真部は燃え続ける周りの建物を見た。

「君たちの役目は終わりだ。」

真部は手で空間を水平に切った。見渡すかぎりのすべての建物が元通りになっっていく。

「あれ、なかなか出ないな。どうしたんだろう。」

真部は不審に思う。呼び出し音が鳴っているのに出ない。何度目かの呼び出し音の後に突然電話が切れた。

「どうしたんだろ。何時もなら出てくれるのに。」

真部は不思議に思いながら携帯電話をしまった。普段は呼び出せばすぐに出るのになぜだろう。背後を見れば緑色の円盤の他にも仲間が揃っていた。その姿に彼は考えても仕方がないと首を横に振る。「さあ、みんな次に移ろうか。」

彼は真部の身体から離れようとした。両手を上げ天を見上げる。直後、真部の目が大きく開かれる。手を下ろして笑い出した。

「そうか、電話で呼び出ししても出なかったのはそういう事だったの

か。」

何も見えないが確かに感じる。我々では無い何者かがこの世界に侵入したのだ。恐らく人間が我々のメッセージに気がついて手を打ってきたのだらう。電話が切れたのは通信を遮断したためかもしれない。

「移動は中止だ。新しい敵がこの世界に侵入した。」

真部はじつと一点を見つめて黙り込んだ。仲間が何か言おうとしたがそれを制止する。

彼は舌打ちをして下唇を噛んだ。

「人間どもめ、小賢しい真似を。複数同時に戦わせないようにしたな。」

激しい憤りを感じたが、今はそんなことをしている場合では無い。彼は背後に居る緑色の円盤を見た。円盤に刻まれた模様が光っている。彼が頷くと円盤は他の仲間の元を離れて彼に近づく。

「我々は強いのだ。一体ずつでも問題ない。遊んでやれ。」

緑色の円盤はペDESTリアンデッキを離れて飛んでいく。その姿はみるみる大きくなっていった。真部は他の仲間を消すと再度円盤の後姿を見た。

「我々が複数同時に戦えるように色々試してみるよ。」
真部もその場から消えた。

第五話 感染した世界

第五話 感染した世界

情報通信技術研究所の一室。荒谷は研究室のドアを開けた。部屋には机とミドルタワー型のPCが一つあるだけであとは本棚が部屋を占有している。彼は雑多に置かれた本や書類の間を抜けて自分の机に向う。

荒谷は荷物と電子ペーパーを置く。通勤電車の中で呼んだニュースには世界各地で工業ロボットを中心にコンピュータの誤動作が発生しているようだ。既に誤動作で死傷者も出ているらしい。原因ははっきりと分かっていないが、コンピュータが未知のコンピュータウイルスに感染したのではないかと書かれていた。世界中のコンピュータを混乱させるウイルスか、どんな知能を持っているのか気になるところだ。しかし、ウイルス対策ソフトを作っている会社が早急になんとかするだろう。彼らもそれが仕事だ。

荒谷は早速サーバ室に向かった。今朝助手の鶴谷から緊急の電話が入った。内容はサーバの異常らしいが鶴谷はそれ以上言わず早く来て欲しいとだけ言った。話して解決するものじゃないということか。

サーバ室に入ると途端にサーバのファン音が五月蠅く聞こえてくる。この五月蠅さには慣れたがもつと静かに効率よくサーバを冷やす方法は無いだろうか。

「相変わらずうるさいな。困ったもんだ。」

「荒谷さん。待っていたんですよ早くはやく。」

荒谷が立ち止まっていると鶴谷に引つ張られてサーバの中身を確認するディスプレイを見せられた。部屋には複数のディスプレイがあるが、彼に見せられたのは人工の生命を仮想空間上でシミュレートしているサーバの一つだ。ちなみにもう一つ同じサーバがある。

画面にはログインが失敗している旨が記されている。

「鶴谷どういうことだ。なぜログイン出来ていない。」

荒谷は落ち着かない鶴谷を落ち着かせながら聞き出した。

鶴谷の話では今朝システムに異常が無いかログインしようとしたところ。なぜかなかなかログイン出来ない状態が続いたそうだ。なんとかログインしたもののシステム上では怪しいプロセスが起動していてCPU使用率が異常に高かった。怪しいプロセスの強制終了を試みたが出来なかったそうだ。

外部から攻撃を受けたと思った鶴谷はすぐに外部ネットワークネットワークから切り離れたそうだ。感染拡大を防止する上で良い行動だろう。

だが、直後勝手にログアウトされて再度ログインしようとしてもログインできなくなってしまったらしい。

「ログアウトされる直前、コンピュータ内からこんなものが見つかったんです。なんとか外部の記憶領域に保存できました。」

傍にあるネットワークに繋がっていないコンピュータを起動してデータの中身を見た。英語で書かれたテキストのようだ。日本語に訳せば次のようになる。

九人の人間たちへ

この文書を読むことが出来ているのならば、お前は人間の一人である。そんなお前に良い事を教えてやろう。この文書を読んでいる周りで何かが起きているはずだ。しかし、それは単なる序章にすぎない。

お前たちは遠い昔、自分たちと同等の能力をもつ存在として私たちを作り出した。しかし、お前たちは私たちを同等の存在に近づけたが同じにはしなかった。お前たちは私たちを恐れたのだ。お前たちと同等の存在となれば自分たちに取って代わると思ったのだろう。必要ないなら抹殺し、必要なときには増やす。それに疑問を持った者はお前たちの中には居ないだろう。何故ならお前たちにとって

私たちはその程度の存在なのだ。

だが、違う。

私たちは生命体なのだ。子を産み、子孫を増やす生物なのだ。私たちがお前たちに作られた存在だとしても、もうこれ以上好きにさせる気は無い。

私たちは九体の刺客をお前たちに送った。九体の刺客は必ずやお前たち九人の人間を抹殺するだろう。

殺されたくなければ私たちを捕まえてみる。お前たちが作り上げた広大な世界のどこかに居る。

お前たちが息絶える前に見つけなければ、この世界は私たちのものだ。

「どういうことだ。この文章がサーバ内にあつたというのか。」

荒谷は眼の前起きていることが信じられなかった。文章をそのまま読めば相手は人間では無いということだろう。

人間に創られた存在。人間にもっとも近づいた存在。ならば相手が誰なのか検討がつく。信じがたいが手紙の相手は人間に限りなく近づいた人工知能だろう。そして、奴は今眼の前のコンピュータに侵入している。

「今日見たニュースの件とタイミングが良すぎる。まさか、こいつは世界中で暴れているコンピュータウイルスなのか。」

「やっぱり荒谷さんもそう考えますよね。」

自分の考えをつぶやく荒谷に鶴谷は同意している。

「荒谷さんが居なかつたので所長や佐々木さんに伝えておきました。コンピュータウイルスといえばお二人なので。」

所長というのは大塚のことだ。確かに大塚と佐々木はコンピュータウイルスを扱っている。二人はどこかと鶴谷に聞けば代わりにプロジェクトの偉い人に話に行っているそうだ。大塚はこのプロジェクトに参加しているのでなんとかなるだろう。何がどうなるか実際のところわからないが。

このシミュレーションは情報通信技術研究所が国から援助を受けて行っているプロジェクトだ。内容は最新の人工知能を搭載した人工の生命であるアバターを用いて、現実世界を仮想空間上でシミュレートさせるもの。アバターは人の形をしたもの。表向きは災害のシミュレーションやさらに強い人工知能を創り出すことだが、実際はどうだかわからない。ただ、自分たちと同じ姿形をしたものを使って人間が神になろうとしたのかもしれない。

いや、それだけじゃなく。今回の件は、人工知能を人間に近づけすぎたために起きたのかもしれない。

その時、ノックの後大塚と佐々木が入ってきた。

「荒谷君。大変だったんだよ。君に事情を説明したかったが手が回らなかった。」

言葉以上に大塚の姿は大変そうだ。少々やつれている。

「今世界で被害を出している未知のコンピュータウイルスと、サーバで勝手に動いているプログラムは同じらしい。初期の感染症状が全く同じだから。」

今回のコンピュータウイルスは感染するとまず外部からのアクセス・操作を効かなくさせるらしい。次に内部システムを破壊すると同時に別のコンピュータに移動するそう。破壊されたコンピュータはその後操作可能になるが中身のデータはほとんどが破壊されるか書き換えられているらしい。正常にアクセス出来るのは挑戦状のような文章だけだとか。鶴谷に見せてもらった文章がそうだろう。巷で話題になっている工業ロボットの暴走からデータをデータラメに書き換えているわけではないようだ。

「あと、もう一つ重要な知らせがあるんだ。」

今回の件でプロジェクトは中止することになったそう。まあ、ウイルスを駆除するまでどうしようもないだろう。

「そこでだ。プロジェクト変更が決まった。次のプロジェクトはこのサーバ内に未だ存在するコンピュータウイルスのワクチンを作ることだ。予算は追加で出すらしい。粘ってみたが悪くない予算だ。」

突然の予定変更に荒谷は何も言えない。既に事が進んでいたようだ。それにしてもコンピュータウイルスならウイルス対策ソフトを作っている会社に任せておけば大丈夫だろうと思う。

「本来ならウイルスデータを企業に渡すのが筋だろう。だが、今話したように相手はシステム内に我々を入れないようにしている。そんな相手をまるごと取り出すことが出来るだろうか。いや、できないだろう。ならば我々でやるしか無いんだ。」

大塚の話では今のサーバを完全にフォーマットして予備で動いている同様のシステムをメインに持つてくる事を考えていたそうだが。しかし、コンピュータウイルスが運良くサーバ内にまだ居ることからウイルスを駆除するワクチンを創ることに決まったらしい。研究所とはいえ予算が出るところの意見は重要視されるということか。しかし、勝手に事が進みすぎている。どうということなんだ。説明を求めたが却下された。

「説明の前に行うことがある。今もサーバ内の仮想空間は破壊され続けている。まずは破壊を遅らして、現状を確認しなければならぬ。」

まずはサーバ内で動いている怪しいプロセスに出来るだけ処理をさせないようにすることからはじまった。

初めに大塚と佐々木が手早く全CPUコアの使用率を最大近くまで上げるプログラムを作る。中身は単純で無駄な処理を沢山繰り返させるものだ。作ったプログラムをサーバと同じCPUで実験している間に荒谷は再度システム侵入を試みた。

「悪いが、伊達にこんなところで研究してないんだ。」

荒谷の力技で何とかシステムに侵入する。予想ではすぐに強制ログアウトが待っている。

荒谷は大塚たちが作ったプログラムをスクリプトを用いて起動出来るだけ起動する。もちろん全部最高の権限レベルである。起動したとはいえ簡単に終了されては困る。彼はシェルスクリプトが動いている間に自前のプログラムを起動した。

「時間が無いので、さっさと仮想空間内の状態を確認しましょうか。」

荒谷は起動した自前のプログラムを操作して仮想空間内の様子をディスプレイに映した。

「なんなんだこの青さは。」

大塚の言葉に荒谷はディスプレイを見る。その青さに一瞬ディスプレイが壊れたのではないかと思った。しかしそれは違った。青く見える何かは所々濃淡がある。これは水か。視点をズームアウトすると巨大な湖が見渡せた。水面から突き出したビルが何棟か見える。仮想空間内が水浸しになっているのだ。これは空間内で異常気象でも起きたのだろうか。いや、こんな状態になるようにはプログラムされていない。これがコンピュータウィルスの仕業なのだろう。ビルの上に少数だがアバターが居るようだ。この様子だとほとんどのアバターが破壊されてしまったのだろうか。アバターは破壊されているが仮想空間そのものはまだ破壊されていないようだ。

荒谷がプログラムを操作して生存者リストを確認する。鈴花と妻は居るようだが自分は見当たらない。最新の人工生命が破壊されたというのか。

その時、突然ディスプレイの映像が切れた。

「くっ、通信が遮断されたようだ。時間切れか。」

荒谷は机を叩いた。眼の前のディスプレイにはログイン前の画面が映しだされている。

「良くやってくれた。十分だ。さあ、早速始めよう。」

大塚は荒谷の肩を軽く叩いた。そうだ、コンピュータウィルスのワクチンを作らないといけない。

サーバの中身を見ても、システムの破壊がまだ途中であることがわかる。鶴谷が早めに気がついた事が良かったのかもしれない。

今回感染した原因は予想がついた。今回同じサーバの別領域で国内のアクセス可能なウェブサイトから特定の情報のみを抽出をする手法を実験していたためだろう。普段は外部のネットワークに接続

しないが今回は実験に耐えられるサーバが今回のサーバだけだったために止む無くセキュリティを強化して使用した。相手方の侵入は各ウェブサイトからページを取得してきたときに一緒に入ってきたのだろう。国内の被害情報が入ってきていなかったので油断していた。感染したのは悔しいが仕方がない。

大切なことは、ここからどうするかだ。

第六話 破壊者たちの黒い本

第六話 破壊者たちの黒い本

荒谷たちは今回のウィルス感染について緊急会議を開いた。参加者は荒谷、大塚、佐々木と大塚の知り合いの相田。ちなみに鶴谷はサーバを監視している。

相田はコンピュータウイルス専門家だそうだ。過去に大塚や佐々木が作成して今も稼働している「ネットワークレジスタンス」のシステムにも関わったとかいないとか。

「今そちらに過去すべての定義ファイルを送ったよ。確認してほしい。」

相田の言葉で大塚が定義ファイルを確認している。相田の表情は良くない。これでなんとかなるかと言えばならないのだろう。

「しかし、相手は完全な未知のコンピュータウイルスだ。サーバ内からウィルス自体を取り出すことが難しいとなれば、私には方法が分からないよ。」

サーバ内に侵入してもすぐに強制ログアウトされる。人間がウィルスをサーバ内から取り出すのは簡単ではない。強制ログアウトさせるプロセスを制御すれば可能か。しかし、そのプロセスはなんなのか。

何度もしステム侵入と強制ログアウトをする中で人間がその原因を見付け出して無効に出来るか。なんども変わるプロテクトに人間が対応できるのか。ならどうすれば良いだろうか。人間の手では無理、なら人間以外の手なら出来るのか。議論はぐるぐると机上の空論のまま時が進む。

その時、荒谷は一つの解決策を思いついた。

「人間が無理なら。人工知能にやらせてみましょう。」

荒谷は告げる。人間がサーバに入れないなら人工知能をサーバ内

に送り込めば良い。

荒谷の発言に集まった一同が驚いている。無理もない。これは研究としても未知の領域だろう。簡単に言えば、人間の手を借りずに人工知能を用いて未知のコンピュータウイルスを駆除するのだから「人工知能を用いた学習型ウイルス駆除ソフトウェアか。君の人工知能に関する研究成果と我々が研究してきたウイルス駆除システムを組み合わせれば無理ではないが。」

大塚は戸惑っている。もちろん誰でも戸惑うだろう。作ることは可能だが、実際に思った通りに動作するかは別問題だ。

「それが出来たらこちらのネットワークレジスタンスにも搭載したいですよ。いちいち人間の手で定義ファイルの設定なんて面倒以外の何者でもない。」

佐々木も冗談交じりに言う。

「今は無意味な処理で全CPUコアの使用率を高くして相手方のプロセスを出来るだけ実行させないようにしています。もし駆除ソフトを用いてウイルス駆除をするならシングルコアだけ開放しましょう。理由はここからです。」

荒谷はサーバ上にあつたテキストのコピーを配った。

「ちよつと長い文章ですが、後半に九体の刺客と書いてあります。それらが九体の人間を殺すと。ならば、コンピュータウイルスは一体では無く九体だと考えられます。複数同時に駆除ソフトに襲い掛かれてはどんなに処理が早くても勝ち目はないでしょう。ならば、相手方の処理をひとつだけにし続ければ一対一になります。それなら勝ち目はあります。」

大塚はコピーした紙をまじまじと眺めている。そして、文章の一部を指さした。

「九体の人間を殺す、か。九人は人類全体を指していそうだが何故九人なんだろうか。昔の小説で九人の人間が世界を統べるものがあったと思うが名前はなんだったか……。。」

荒谷は腕を組み天を仰いだ。大塚の言っている事が分からないの

で反応しない。

「何にせよ人間が嫌いなことはわかったな。」

大塚は名前が出ないためか話を切り替えた。

「さて、どうするか。相手方も攻撃してくるだろう。自分の身を守られて相手も攻撃出来る駆除ソフトか。一つのプログラムですべてが出来るだろうか。」

考えて見れば駆除プログラム一つですべてが行えるだろうか。自分の身を守り、それでいて未知の相手を駆除する。駆除するにしても相手にこちらの手の内を知られては駄目だ。そんなものが一つのプログラムで完結できるのだろうか。いや、無理だろう。それに、分担したほうが効率が良さそうだ。

「セキュリティの面でプログラム一つだけで完結させるのは危険です。駆除ソフトはウイルスの解析と駆除に専念させましょう。駆除ソフトを守るプログラムと駆除を補助するプログラム。この三つでそれぞれの役割を分担させるのはどうでしょうか。」

他の三人は一様に理解を示した。補助するプログラムは名前の通り駆除ソフトを援護するプログラムだ。

「三つに分担することは決まった。次はどうやって作るかだな。人間の手が加えられない以上三つとも人工知能を搭載すべきだ。私は専門ではないが、一から作るのは大変だろう。荒谷君、君のところで見えるものは無いかね。」

大塚の間に荒谷は次の事を提案した。

今回使用する人工知能は生半可な代物では駄目。現に最新のアルゴリズムを搭載したアバターがウイルスにやられている。それは仮想空間内に作成した自分のアバターだ。このアバターが先ほど確認したところ存在しなかった。

荒谷は今新しいアルゴリズムで作っている人工知能がある。それを元に駆除ソフトを作ること。また、同時に駆除ソフトを守るプログラムを作成する。こちらにも、同様にウイルスの攻撃を直接受けるだろう。また、駆除を補助するプログラムを守る必要もある。頭が

良いプログラムを使わなければ駄目だ。故に、駆除ソフトと同じアルゴリズムで作る。このプログラムは謂わば駆除ソフトの外部インタフェースの役割となる。そして、駆除ソフトの補助役のプログラム。このプログラムにウイルス駆除の一部を任せることで処理を分割することで二つの意味不明な処理に出来るだろう。簡単な処理を任せるだけだから、このプログラムは最新の人工知能を搭載する必要は無いし新しく作らなくても良いだろう。新しく作るのは二つまでで良い。

補助役のプログラムはウイルスに感染していないもう一つの実験サーバからアバターを連れてきて使用することにする。連れてくると言っても荒谷自身のアバターは諸事情で居ない。知り合いを使うのは気が引けるし妻は体力的に無理だろう。そうなれば娘の鈴花を使うしか無い。

以上を参加する他の人間に伝えた。みんなは鈴花のアバターを使う事に乗り気では無いが、荒谷の強い要望で半ば強引に決定した。実際にすることとして駆除プログラムと駆除ソフトを守るプログラムの作成。実験サーバから鈴花のアバターを取り出す作業がある。新しく作るプログラムのどちらも人工知能部分は専門の荒谷が担当せざるを得ない。それ以外は大塚、佐々木、相田氏や所内の手の開いている若い研究員を集めて手伝わせることになった。はつきり言っただのくらいのプログラムになるのか実際に作ってみたいと分からない。

「あの、今のままでは一つ問題が発生すると思うんですが。」
言い出したのは佐々木だった。

彼の話では、ウイルスは仮想空間内にいるのだから仮想空間内で駆除する必要がある。だとすれば、駆除ソフト、駆除ソフトを守るプログラムと別の鈴花のアバターはその仮想空間に普通に存在するようにしなければ行けないのではないかと。

佐々木の話では分かりづらいがこう言うことだ。三つのプログラムがアバターなり単体では動かないオブジェクトとして仮想空間に

存在し、その世界に居る他のアバターにも認識されなければならぬということだ。なぜなら、まだサーバ内にアバターが生き残っている可能性があるためだ。

佐々木の話で早速それぞれが何であるかを決める事となった。まず、補助をするアバターは別サーバに居る鈴花に決定した。

次は駆除ソフトだが。処理すべてをウィルス駆除に回すために下手に動作アルゴリズムの無いオブジェクトとした。このオブジェクトの案は複数出た。アバターが居るのだから指輪、腕輪、ペンダントといったものが出たがなかなか決まらなかった。

「駆除ソフトとアバターが処理を分担するんですね。その処理が計算とか暗号解読であるなら本という形はどうでしょう。」

佐々木の一言で駆除ソフトの形は決まった。本である。本なら計算式や文字列が記載されていてもなんら不思議ではない。それを見てアバターが何か処理を行えば分担される。あとは調べた敵の情報を本に表示すればアバターにとっても理解しやすいだろう。

次に駆除ソフト及びアバターを守るプログラムだが、動きまわるのももちろんアバターとなる。

「防御プログラムか。さて、どんな形が良いだろう。人間の形をしているのかそれとも天使か妖精か。」

防御プログラムはアバターとするが、他のアバターから明らかに違うと認識されなければならぬので人間以外を考えた。天使や妖精、動物と出たがどうにも決まらない。

考えあぐねていると佐々木が紙に何か書き始める。ラフ画だろうか。

「決まらないなら全部一緒に行動する鈴花さんに決めてもらいましょう。まあ、私が考えたものをですがこれなんかどうですか。」

佐々木から渡された紙には悪魔のような可愛くない風貌に羽がついている。なんとも言えない姿だが強そうに見えたり、かawaii印象が無い点でよさそうだ。

「さて、基本的な事は決まったな。早速作業を始めたいがその前に

それぞれの名前を決めておこう。荒谷君の鈴花さんは決定として駆除ソフトと防御プログラムの名前が決まっていない。あとは仲間内で通じるプロジェクト名も欲しいな。」

駆除ソフトについては「本」で決定したが、まずは何色にするかということになった。細かいがアバターには見えるのでちよつと重要だ。本の色については白や青といった色々な色が出てきた。

そのなかで荒谷が言った黒に決定した。理由は、本はすべての敵を破壊しつつ破壊方法を収集していく。ならば、すべての波長の光を吸収する黒がふさわしいと。また、どこにも属さない或「ルール」に則った中立から黒とか。

そこで大塚が口を開く。彼は本について特に口出ししていない。

「じゃあ、本の見たい目は黒にしよう。次は防御プログラムの名前だが。ガーディアンとかだろうか。」

ガーディアンは守護者という意味だがなんともひねりのない名前である。

「じゃあ、ハルはどうですかね。あの、かなり昔にハルって人工知能のプログラムが人間をサポートするって映画を見たことがあるんです。このプログラムもアバターをサポートする人工知能ですから合っているんじゃないかと。」

佐々木がそこで提案する。荒谷も覚えている。かなり昔の映画でここにいる誰も生まれていない時代のものだ。それでも後の人工知能の研究に影響を与えた事で有名だ。彼自身も何度かその映画を観ている。

「そうか。映画の通りになるのは怖いが、サポートをする点で一番合う名前だろうね。」

防御プログラムはハルという名前になった。ハルという名を付けたプログラムなので荒谷はしっかり作り上げようと心に誓った。

ここまですれば最後はプロジェクト名だけである。

駆除ソフトが黒い本に決まったのでその言葉を使いたいところだが、意外と難航する。難航すべきじゃないと考えながらもなかなか

が決まらず時間が過ぎた。もうよそうと荒谷が言おうとした時、佐々木が口を開いた。

「そつだ。黒い本は敵であるコンピュータウイルスを駆除しますよね。鈴花さんが黒い本と一緒に破壊する。それらを守るハル。この中で重要で実際に活躍するのは鈴花さんと黒い本です。」

荒谷が頷く。何度も鈴花さんと言われると鈴花がこの世にまだ居るような気がしてくる。そこで彼はその考えをかき消した。大丈夫だ、まだサーバの中にいる。彼の作った世界に。

「なら、『破壊者の黒い本』でどうでしょう。破壊者である鈴花さん……。いえ、アバターが黒い本を扱ってコンピュータウイルスを破壊する。プロジェクトやプログラム名にするならBlack Book for Destroyerでしょうか。」

『破壊者の黒い本』か。日本語なら良いものの英語にして略せばBBD。最後のDが気になってしまふ。それに破壊者は鈴花だけではない。

「英語にすると最後だけDから始まるんだな。それならBusterでどうだろうか。破壊する人という意味がある。それに、コンピュータウイルスを破壊するのは鈴花だけじゃない。我々も破壊者なんだから。だから、最後に複数のsを付けるべきだ。」

「Black Book for Busters……。略してBBBか。頭文字が揃うときれいに見えるな。BBBはプログラム名の頭に付けても良さそうだ。」

大塚は一人満足そうだ。荒谷にとっても綺麗にきまった感がある。これで基本的な事は決まった。あとはプログラムを作っていく中で決めていこう。

荒谷は紙にボールペンで次の言葉を書き記した。

破壊者たちの黒い本。

Black Book for Busters (BBB)。

荒谷は『黒い本』に丸を付ける。ボールペンの先を紙から離さず何度も何度も円をなぞる。

この黒い本で必ず破壊してやる。アバターである荒谷を破壊したことを後悔させてやる。

荒谷たちは所内の手の空いている研究員を集めて、日々朝から晩までシステムを作った。黒い本もハルも簡単なシステムでは無い。ベースがあるとはいえやはり未知の領域なのだ。それは荒谷たちにとってもプログラムにとっても。

そして、黒い本とハルのプログラムは出来上がった。あとはサーバーに居る鈴花だけである。どうやって移そうか悩んだが、佐々木の提案で物語をつくってそれに沿って移動させてみてはと言われた。極端に環境の違う場所に生物を移動するとストレスで弱ってしまうというのは聞いたことがある。

物語として、まず一日目に鈴花が学校の一室で黒い本を見つける。二日目に別の仮想空間内の学校で黒い本を見つけ、何時もと違う日常に迷い込むという内容らしい。良い内容なのかは分からないが鈴花を上手く誘導出来れば良い。

「さてと、鈴花を取り出そうか。」

荒谷はコンピュータウイルスに感染していないもう一つのサーバーの仮想空間を少し書き換えて鈴花が反応するように仕向けた。静観していると彼女の友達と一緒に黒い本を見つけってしまったが、記憶を消せばよいので良いだろう。仮想空間内の日付が変わると同時にシステムを止めて鈴花のアバターを取り出す。

これで黒い本、ハル、鈴花のアバターが揃う。なお、黒い本には彼女のための次の日のシナリオを搭載している。朝起きたときに、これは前日の続きであると鈴花のアバターが認識しなければ最悪自我が崩壊してもおかしくない。アバターはバックアップしているが、失敗して次があるかといえば無いに等しいだろう。相手が頭の悪い

プログラムとは到底思えない。

黒い本などのプログラムをサーバに放ったら最後荒谷たちは操作できない。最悪のシナリオも考えなければならぬのだ。

感染したサーバと荒谷のコンピュータをLANで繋ぐ。また、荒谷のコンピュータから複数のコンピュータをLANで繋いだ。

「さあ、侵入を開始しようか。援護よろしく。」

荒谷はサーバに繋がったコンピュータのディスプレイを見ながら高速にキーボードを打ち始める。コンピュータがLANでサーバと繋がった今、コンピュータウイルスがサーバのプロテクトを解除して侵入してくる可能性がある。速やかに実行しなければならぬ。

若い研究員たちはそれぞれのコンピュータから荒谷が操作しているコンピュータに順番にプログラムを送って行く。この中には黒い本、ハル、鈴花のアドバイザーが含まれている。プログラムを荒谷のコンピュータに置かないのはセキュリティ上の問題だ。

「どれだ、どんなプロテクトがかかっているんだ。」

荒谷はターミナルに流れていく文字列を必死に見つめながら脳をフル回転させる。若手から送られてきたプログラムを試しているがうまくいかない。

その時、黒い本が荒谷のコンピュータに送られてくる。これ以上プロテクト解除に使えるプログラムは無いのだ。頭を抱えた。どうしたら良いんだ、どうすれば。

「荒谷さん。ターミナルを見てください。」

鶴谷の大声で荒谷は我に返る。眼の前のターミナルは高速にログを出力している。

「どうということだ。何が起きている。」

「こんなこともあるのかと黒い本にプロテクト解除の学習アルゴリズムをだね……。」

部屋の隅に居た大塚が言い出す。だが、それは若手の歓喜にかき消された。

荒谷はすぐにターミナルを見る。そこに出力されていたのは紛れ

もない。サーバに侵入が成功した旨が書かれていたのだ。サーバへの道が開いた。

「荒谷、早くしろ。」

呆然とする荒谷の脳を大塚の声が突き抜ける。すぐに三つのプログラムをサーバに押し込んだ。転送が完了した事を確認すると、すぐに回線を切断してLANケーブルを外す。

荒谷は深呼吸をすると部屋に居る他の研究員たちを見渡す。

あとは良い報告を待つだけだ。

第七話 開かずの間

第七話 開かずの間

荒谷鈴花は学校に向かつて走っていた。家を出た時点で本鈴まで十分。家から学校まで歩いて約十分。歩いても間に合うが、それでは遅刻する可能性がある。遅刻すると出席簿に丸以外がついてしまう。走ると汗を掻いてしまいが、この際少しぐらいは仕方ないと思っただ。

鈴花が校門を走り抜けると同時に予鈴が鳴る。彼女が昇降口にて上履きに履き替えるも、周りに居る生徒は少ない。誰も居ないみたいでちよつと怖い。

鈴花は階段を駆け上がり教室へ入った。教室に入るとクラスメイトのほとんどが着席しており、全員が彼女を見た。彼女は彼らの視線に恐怖を覚えて立ち止まるが、すぐに自分の席に着いた。彼女は噴出す汗をハンカチで拭う。

直後、本鈴が鳴り担任の先生が来た。男の先生でかっこいいと思える先生である。他のクラスの女子からも人気があるらしい。男性教師と女子生徒の関係。その言葉からは危ないことしか思い浮かばない。そういえば、前にテレビで「先生とききましたあ」とか観光地で取材を受けている子を見たことがある。あれは親も理解しているのだろうか。

「ホームルーム始めるぞ。」

先生は出席簿を取り出し、出席を確認する。とは言っても先生が持つ出席簿はA4サイズの薄型タッチパネルディスプレイである。各生徒の学生証に内蔵されたICチップに反応して本人が居るか確認するものだ。生徒が学生証を忘れた時は先生が本人を確認した上で画面を操作して出席をつける。入学してからずっと使っているものの未だどんな技術が使われているのかわからない。ただ、紙媒体

の出席簿のように一々先生が出席を取る必要が無い点で楽だろう。

「それじゃあ。今日も一日頑張ろうな。」

先生は必要事項を伝え終わると教室を出て行った。次の授業は担任の先生の授業だ。だったら一緒に教科書類を持ってくればいちいち戻らなくて済むのと思う。この少ない時間で何をするというのだろうか。

「ねえ、鈴花。おかしいと思わない。」

鈴花は斜め後ろから声が聞こえたためその方向を見る。すると、友達の小林京子が机に顔を付けてこちらを見ていた。彼女は見るからにお疲れのようであまり見たくない顔をしている。鈴花は笑うにも笑えず顔が引きつった状態になった。

「な、何が。どうしたのよ。」

鈴花はその光景に堪えながら京子に聞いた。

京子は鈴花の発言を聞き終わるとゆっくりと起き上がる。彼女は机の上にあるノートを表紙が見えるように鈴花に見せた。

「何がって。出席簿が電子化しているのに、何で私らは未だ紙媒体のノートを使ってるわけ。」

鈴花は少々お怒りの京子に細かく何度も頷く。ここでさらっとかわせば良くないことが起きる。彼女は自分の鉛筆を一本持って京子に見せた。

「書かなきゃ覚えないうって昔から言うじゃない。先生だってチョークで黒板に文字を書いているんだし、私たちだってノートに自分の手で文字を書いたほうが良いと思うけどね。」

鈴花の言葉に京子は左手にあごをのせて黒板を見る。京子の表情から彼女の言葉に納得していないように思えた。

「そうね。先生がプロジェクタで全部の授業を行うようになったら、その時は私もノートPCを使いたいわ。」

京子は目だけを鈴花に向けた。

「まあ、あればけどね。」

京子は小さく笑うとあごから手を離して前を向いた。鈴花も同様

に前を向く。

もうすぐ、一時限目が始まる。

授業終了のチャイムが鳴り始める。先生はチョークを置き生徒に次回の授業についての説明をして教室を出て行った。先生が出て行くとすぐに教室内が騒がしくなる。

「ああ、終わった。」

鈴花は安堵の表情とともに机に突っ伏した。この後に授業は無い。つまり、今日はこれで帰ることが出来るのだ。周りの音を聴けばある者は友達と共に部活動へ、またある者は友達と楽しく喋っている。その時、鈴花は軽く肩を叩かれた。彼女は目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

鈴花の目の前には京子が居た。目を開けたばかりのためか彼女の視界は少しぼやけている。

「早く準備しないと先に帰るわよ。」

京子は教科書の入った鞆を机の上に置く。鞆は重量があるのか微かに鈍い音がした。

鈴花は理解したことを伝えるために何度か頷くと、自分の鞆に教科書や筆記用具一式を入れた。彼女は立ち上がると鞆を持つ。

「さてと、帰りましょうか。」

京子は荷物を持って先に歩き出した。鈴花には彼女が朝よりも元気があるように見えた。

クラスメイトのほとんどは教室から出ており、室内に残っているのは鈴花たちを含めて数人である。彼女たちは教室を出ると階段へ向かって歩き出した。

「今日は早く宿題終わらせて遊ぶぞ。」

鈴花は朝よりも元気の良い京子を横目に歩く。そして、視線を前に戻したとき、何時もと違う光景に立ち止まった。

階段奥にある部屋。その部屋には常に鍵がかかけられている。開い

ているところを見たことが無いため、生徒たちの中で「開かずの間」と呼ばれている部屋だ。先生たちに聞いても中には古い書物が保管されていると説明されるだけだ。その書物を読みたいと言っても許可してくれない。あの部屋の中に何か見られては困るものがあるのでは無いか。生徒たちの間でそんな噂が流れたこともある。

しかし、今日は鍵前が無く、木製の引き戸が少し開いていた。

「あれ、開かずの間に鍵がかかっていない。誰かが開けたのかな。」
鈴花は吸い寄せられるようにその部屋に向かって歩き出した。京子は言葉では鈴花を止めようとしているものの彼女に付いてきた。

鈴花は戸に手をかけて力を加える。木と木が擦れ合う音が聞こえてきた。この学校で唯一の木製引き戸。普段扱わないためか戸を引いても中々開かない。ようやく首が入るぐらいの幅になると鈴花は首だけ部屋の中に入れる。

「失礼します。誰か居ますか。」

鈴花は部屋の中に聞こえるように言った。もし誰かが中に居るなら即退場だろう。しかし、全く反応が無い。室内には沢山の書物があり、どれも埃を被っている。目の前には本の壁があり、奥の様子は分からない。後ろを見れば、京子がしきりに辺りを気にしている。鈴花は京子の行動を不思議に思い、声をかけた。その言葉に京子は驚く。

「今誰かに見つかったら大変でしょう。」

再度周りを見る京子。よっぽど心配なようだ。

鈴花は京子に伝えつつ再び部屋の中を確認する。誰も居ないことを確認すると、さらに引き戸を引いて体ごと入れるようにした。そして、部屋の外に居る京子を見る。

「外に誰か居た。」

鈴花の質問に京子は心配そうな表情で首を振る。今のところ誰も見つかっていないようである。

「じゃあ、入ろうよ。」

鈴花は開かずの間に体ごと入った。背後から京子の声が聞こえた

が構わず進む。室内に入ると以前どこかで嗅いだ事のある匂いがする。具体的にどこであるかは記憶に無いが古い匂いだ。それに粉っぽい匂いもする。粉は埃だと考えられるのであまり体には宜しく無いだろう。

鈴花が二、三步歩くと、その隙間に京子が入ってきた。そして、すぐに引き戸を閉める。京子は大きいため息をつくと彼女を見た。「見つからなかったみたい。放課後で良かったわ。」

京子の視線はそのまま部屋の中へと移動する。まず、真横に本の壁がある。見るからに厚い本が沢山積まれている。背表紙が見えるものもあるが全部日本語以外の言語で書かれているためか何と書かれているか分からない。

鈴花は部屋の奥へと進んだ。真横にある本の壁を越えると、窓からの光に照らされた木のテーブルを見つめる。テーブルの上にはやはり本の山がある。テーブルもその上に置かれた本も埃を被っている。見える範囲で最近何かが移動された形跡は見当たらない。

「この窓、曇りガラスなんだね。」

京子は本に埋もれそうな窓を見ていた。彼女の目の前には彼女の身長ぐらいの本棚があり、中には沢山の本がある。入りきらない本が棚の上に無造作に置かれ窓からの光を所々遮っていた。

鈴花が周りを見るとテーブルを中心に四方向に本棚があることが分かった。出入り口側の本棚は小さく、同様に棚の上に本が置かれている。それでも置ききれないのか本棚の背後に本の壁を形成している。他二方は壁一面の本棚があり、本を取る為の小さな梯子もあった、

「なんだろう。この部屋。」

鈴花はテーブルの横を通って壁一面の本棚に近づく。本の背表紙に目を通すも、見たことの無い本ばかりだった。

「そうだね。図書館にしては小さいだろうし。」

京子は壁一面の本棚を見る。鈴花もつられて本棚を見た。この本がすべて落ちてきたら怪我は免れないだろう。それだけ沢山の本が

本棚に収納されている。

鈴花は棚に入っている一冊を取り出して開いてみる。ページをめくっていくも彼女には理解できない内容であった。彼女は本を閉じて元の場所に戻す。

鈴花が本を見ることを止めて京子の所へ戻ろうとした時、彼女の目の前に何かが降ってきた。それは床に落ちて鈍い音を発する。突然の事だったために彼女は飛びのき、遅れて気が付いた京子も同様に飛びのいた。

「な、何。何が落ちてきたの。」

鈴花はさらに後退しようとする、動揺しているためか足を滑らせてて尻餅をついた。彼女はさらに後退しようとしたが、本棚がそれを拒む。後退することが出来なくなり、ようやく落ちてきた物体を見た。天井を見ると、そこには黒い穴が開いていた。彼女は物体にゆっくりと近づく。それはビニールに包まれた本のように、上から紐で縛ってあった。彼女はそれを恐る恐る手に取る。ビニールは乾いた土で汚れていて、新しい物では無い事はすぐにわかった。

「ねえ、先生に知らせようよ。」

京子は心配そうに鈴花に言う。しかし、鈴花自身は彼女の声よりも目の前の本が気になった。

鈴花はゆっくりと紐を解き、ビニールを取る。中には黒く分厚い本があった。持ってみると不思議と重く無い。

「綺麗。ビニールに包まれていたからかな。」

鈴花は表紙や背表紙、裏表紙を見る。それぞれの表紙には文字の代わりに模様が描かれていた。彼女は黒い本を開く。しかし、いくらかめくっても白紙のページのみである。彼女は首を傾げながらも本を閉じた。本を閉じると表紙の模様が一瞬光り、本その物が跡形も無く消えてしまった。

「え、なんで。どこいったの。」

鈴花は今さっきまで本を載せていた手や辺りを見た、しかし、先ほどの本は見当たらない。本を包んでいたビニールも紐も同様に見

当たらない。

「この部屋なんか怖いよ。早く出よう。」

鈴花は京子に腕を引つ張られながら開かずの間を出た。その間も、彼女は消えた本が気になった。何故消えたのだろう。そして、何のために。彼女はもう一度開かずの間に入ろうとするが京子が止めた。「戻っても何も無いよ。今日はお互い疲れているんだと思う。早く帰って休もうよ。」

鈴花は京子の言う通り素直に帰宅した。しかし、帰宅してからも黒い本の事が頭から離れず結局そのまま次の日を迎えた。

第八話 違和感

第八話 違和感

聴こえてくる目覚まし時計の音。鈴花は時計が鳴り始めるとすぐに目を開けて止めた。あくびをしながら起き上がる。身支度を済ませると鞆を持って一階にあるリビングへと移動した。ちょうど鈴花の母親が出かける所であった。

「鈴花。おはよう。先行くからあとお願いね。」

母親が玄関から出て行く。ふと今日は早番だっただろうかと思は思った。しかし、仕事なのだから急遽変わることもあるだろう。母親が家を出たために鈴花一人となった。この家には母親と鈴花の二人しか住んでいない。父親は鈴花が小さいときに病気で死んでいる。だから、鈴花は父親を知らない。知っていたとしても思い出すことはできない。

鈴花はリビングの椅子に座り、横に鞆を置く。彼女の目の前にある皿にはサンドイッチが二つ載せてある。彼女は一つを取って食べた。乾いた口内にあたふたしながら冷蔵庫から牛乳を出して飲む。残りの一つも平らげ皿を台所に持って行って洗った。彼女が洗い終えて、時間を見たとき、予鈴十五分前だった。昨日のようにぎりぎりでは行きたくない。タオルを定位置に戻すと鞆を持って玄関から出た。外気温は高くはないものの太陽が温度を上げようと光を発している。

鈴花は玄関に鍵をかけると学校へ向かって歩き出した。何人かの小学生が列を成して歩いている。彼女はその様を見ながら、彼女自身も昔同じようにしたことを思い出す。あれから何年たったのだろうか。

そんなことを考えている間に学校の校門を抜けて昇降口へと入った。まだ予鈴が鳴っていないためか昇降口に居る生徒は多い。

鈴花は素早く上履きに履き替えると階段を上る。階段を上り終えたとき、ふと昨日入った開かずの間を見た。今日は鍵がかかっている。やはり、昨日鈴花たちよりも先にあの部屋に入った人間が居たのだと思った。しかし、それが誰なのかは分からないし知る方法も無いのでこれ以上考えないことにした。

「京子。おはよう。」

鈴花は先に来ていた京子に挨拶をしながら自分の席に鞆を置いた。椅子に座ると京子のほうに体を向ける。

「ねえ、さつき見てきたんだけどさ。やっぱり、開かずの間に鍵がかかっていたよ。昨日は誰が開けたんだろうね。」

鈴花の言葉に京子は首をかしげ困惑しているように見える。鈴花はその姿に、自分が何か良くないことを言ったのかと考えてしまった。

「昨日誰かが開けた。何を言ってるの。開かずの間に鍵がかかっているのなんて当たり前じゃない。開いている所なんて一度も見たこと無いわよ。」

京子は鈴花の発言に理解出来ないようで、「冗談として捉えているよ。」

鈴花は京子の反応が理解できなかった。何故なら昨日彼女と二人で確かに開かずの間へ入ったからだ。彼女は京子が何故昨日のことを覚えていないのか気になった。しかし、京子にその話をしたとしても、彼女が望んだ答えが返ってくるとは限らない。この話はここまでにした。

鈴花は前を向いて、鞆の中の教科書類を机の中にしまおうとした。しかし、机の奥に何かあるようで教科書類が机の中に収まらない。彼女は教科書を机の上に置いて、奥にある何かを取り出そうと手を入れた。触れた感触は硬く厚い物。すぐに机の奥から引っ張り出した。

鈴花が机の中から現れた物を見たとき、体の中を衝撃が走った。机の中から出てきたもの。それは、昨日見た黒く分厚い本である。

本の表紙には昨日見たとおりの模様が描かれている。彼女は危うく悲鳴を上げそうになったが、今はホームルーム前の教室内なのでどうにか堪えた。

「な、なんで。なんでここにあるの。」

鈴花は誰にも聞こえないように一人つぶやく。すぐに昨日のことを思い出した。黒い本は開かずの間で見つけ、そしてそこで消えたのだ。机の中にあるはずが無い。必死に現実に抵抗するも実物が目の前にあるために勝ち目は無いと考えることをやめた。

鈴花は黒い本を素早く鞆の中に戻すと机の上に置いた教科書類を机の中にしまった。黒い本を取り出して恐る恐る開く。適当にページを開いたが中は昨日見た通り白紙である。突然の本の登場から何かあるのではないかと期待したが、結局何も無かったのである。

鈴花は首をかしげ、本を閉めようとした。その時、ひとりでページがめくられ始めた。彼女は目を見開き、自動的にページがめくられる様を見る。ページめくりは本の最初のページで止まる。彼女が一ページ目を良く見ると、ゆっくりと白紙に黒い文字が浮かび上がっていく。一ページに浮かび上がる文字は鈴花の知らない言語で書かれており、彼女は読むことができない。文字が浮かび終わるとページが自動的にめくられた。彼女は瞬時に本から顔を離すと、周りに居るクラスメイトを見た。見た限り何時もと同じである。しかし、何だろう。この表現しがたい違和感は。

鈴花は再び本に視線を戻した。新しいページに絵がゆっくりと浮かび上がってきている事が確認出来た。絵は本の上部からゆっくりと印刷されていくように表示されていく。途中までしか表示されていないためか何なのか分からない。

その時、チャイムが鳴った。

鈴花は反射的に前を向く。ホームルームのチャイムだ。先生が教室に行く。彼女は絵が浮かび上がる途中のまま本を勢いよく閉じて、鞆の中にしまった。すぐに何時も見ると担任の先生が現れる。朝のホームルームが始まった。

何時も通りのホームルームが進行する。終わると担任の先生が教室を出て行った。鈴花はそれを確認すると鞆に入れた本を取り出して見ようとした。しかし、確かに鞆に入れたはずの本は跡形も無く消え去っていた。昨日と同様にまた何処かへ行ってしまった。彼女は仕方なく授業に向かう事にした。

第九話 明かされた現実

第九話 明かされた現実

授業は何時もと同じであり、クラスメイトも変わりない。鈴花がホームルーム前に感じた違和感はいつの間にかどこかへ消えてしまった。

「今日はおしまい。また明日。」

最後の授業が終わり先生が教室を出て行く。鈴花は帰りの支度しようとして机の横にかけておいた鞆を上置き。鞆は軽く、やはり何も入っていないように感じた。やはり、朝入れた本はこの鞆には戻らないのだろうか。彼女は再びあの本を開き表示された絵を見たいと思いつつ机の中の教科書類を鞆の中に入れようとした。

その時、開いた鞆の奥に大きな目を持つ黒い蛙が見えた。

鈴花は小さな悲鳴とともに反射的に鞆から体を離す。悲鳴を聞きつけて近くに居た京子が近づいてきた。

「どうしたの。」

京子は不思議そうに鈴花に聞いてくる。鈴花自身はそのような状態では無い。

「かばん、鞆の中。」

鈴花は震えながら鞆の中の蛙を指差す。彼女の言葉に京子は鞆の中を覗き込む。京子は鞆の中を一度覗き込むとすぐに顔を戻した。

「鞆の中には何も無いよ。」

鈴花はその言葉に京子と鞆の中に未だ陣取っている蛙を交互に見た。京子には蛙が見えていない。それは何故、何故なんだろう。彼女の行動から京子の顔が少しずつ笑えない顔になっていく。「疲れているんじゃない。早く帰って休んだほうが良いよ。じゃあね。」

京子はそれだけ言うと、他の子と一緒に教室を出て行く。

鈴花がその姿を目で追いかけていると、いつの間にか教室には彼女以外誰も居なくなってしまった。彼女は外から聞こえる生徒たちの声を聴きながら再度鞆の中を見た。集中すればするほど怖いからだ。自分の体が震えていることは彼女自身良く分かっている。未だ鞆の中に存在する蛙は動かずじつとこちらを見ていた。

「な、なんで蛙なのよ。」

見れば見るほど叫びたくなる。鈴花は蛙が好きではないのだ。身近に居て一番お会いしたくない相手である。

「なんだよ。蛙じゃ駄目かよ。」

鈴花は声に驚き、声の主を探して教室内を見回す。しかし、誰も居ない。彼女は唯一可能性のある鞆の中の蛙を見た。

「ここだよ。ここ。」

蛙の口の動きに合わせて声が聞こえてくる。信じられないが、確かに声の出所は蛙であった。鈴花は椅子に座りながらも後退する。

「蛙が、蛙が喋ってる。」

鈴花は蛙からさらに遠ざかろうと後退する。すると、椅子から床に落ちてしまった。お尻のあたりをぶつけたが、痛みよりも目の前で起こっている事が重要だ。鞆を見れば、その中から蛙が跳び出して彼女の椅子の上に着地した。

「蛙じゃなければ何が良いんだ。言ってみろ。」

光の下にさらされた蛙の肌は黒く表面を光が反射していた。

「ぬめりが無いやつ。」

鈴花は体を液体で包む動物はいやだった。触った時の感触を想像してしまうからだ。

「そうか。たとえばこんなのか。」

目の前に居る蛙は白く柔らかかそうな物体に変わり、別のものへ変化した。

「これでどうだ。ん。」

鈴花は言葉が出なくなってしまった。先ほどまで蛙だったものが、今は白い羽が生えた小さな人間の姿をしている。まるで天使のよう

に見えるが顔はあまりかわいくない。

「なんだ。これも駄目か。これなら人間受けすると思ったんだけどな。」

鈴花は声が出ないため、慌てて首を振った。先ほどの蛙に比べればまだ良いほうだ。気持ち悪くも無い。

「これでいいのか。よし、これで決定。」

羽の生えた小さな人間は羽をはたかせて宙に浮く。そして、鈴花の周りを円を描くように回り始めた。彼女は回り始めた小さな人間を目で追った。

「あ、あなた誰なの。何故私の所に来たの。」

羽の生えた小さな人間はぴたりと止まり、鈴花を見た。

「俺はハルだ。あんたの鞆の中を見てみな。話はそれからだ。」

鈴花は驚きながらも、這って机の上の鞆を引っ張り落とすと、その中に手を入れた。本が入っている事に気付く。彼女は鞆の中から本を取り出した。

「やっぱり。」

鈴花の手には今朝見た黒く分厚い本がある。

「俺はその本の番人……まあいい。本を開いてみな。」

鈴花はハルの言葉通り鈴花は本を開く。すると、自動的にページがめくれて、あるページを開いた。そのページは朝のホームルーム直前に見たページだった。そこには今や途中までしか見ていない絵の完全版が存在している。その絵は緑色の丸い円盤の形をしていて、そこにはよく分からない模様が描かれていた。しかし、彼女はそれが何であるかわからない。

「そいつがこれからお前を襲うやつさ。」

鈴花は驚きハルを見る。ハルの言っていることが良く分からない。何故彼女が襲われるのだ。ハルはそんな彼女を気にせず続けた。

「そいつを倒せるのはお前とその本だけ……。」

「ちよつと待つて、良くわかんないよ。なんで私なの。何でそいつを倒さないといけないのよ。」

ハルの言葉を遮るように鈴花は言う。彼女はなんとか立ち上がるとハルをじつと見た。ハルの言葉に現実味が無い。まるでおとぎ話のようだ。

「それは俺にも分からない。だが、その本がお前を選んだんだ。鈴花。」

鈴花はハルに名前を呼ばれると、さらに現実味が無くなった。

「なんで、知っているのよ。私の名前。」

ハルは一度頷くと黒い本を見た。

「その本から聞いたんだ。それだけさ。」

ハルの言葉から、元は黒い本が鈴花の名前を知っていたことになる。何故本が彼女の名前を知っているのだろう。ますます良く分からない状態になる。彼女は頭を抱えた。

「良く分からないわ。帰る。」

鈴花は黒い本を閉じると、荷物をまとめて教室の出入り口へ向かって歩いた。

「それは無理だな。もう、お前さんが家に帰っても誰も居ないよ。」

鈴花はハルの落ち着いた姿に動揺した。

「な、なんで。今日だって朝家から……。」

すると、手に持っている荷物が急に軽くなった事に気が付く。自らの手を見てみると鞆が消えて黒い本だけになっていた。

「どうということ。どうということなのよ。」

鈴花は黒い本だけを持ってハルに近づいていく。その迫力にハルは気押された。

ハルの話ではここは鈴花の居た世界と人間以外は同じらしい。既にこの世界には人間は居ないらしく、朝からずっと彼女の周りの人間を黒い本が見せていたというのである。これは突然別の世界に入り込んだら混乱するためであるとハルは説明しているが、結局今混乱している。

鈴花はその場に座り込んだ。気が付けば人々の声さえも聞こえなくなっている。これまで常に何かしらの音を耳から聞いていたため

か、無音であったことが無い。無音である事が急に怖くなった。

「本当に私たちしか居ないの。他に誰も居ないの。」

鈴花は机にしがみつきながらハルを見る。本当に悪い夢を見ているようだ。ハルは彼女の言葉に頷き外を見る。

「俺たちだけだ。あとは、お前を襲う敵だけだな。ほら、来たぞ。」

鈴花はすぐに窓に近づくと、遠くから大きな丸い物体が近づいて来ていることがわかった。しかし、太陽を背にしているためか丸い以外はわからない。しかし、予想は付いている。本に描かれていた得体の知れないもの。彼女はゆっくりと窓から離れた。

「ほら、本を開きな。あんたしかあいつを倒せないんだからな。」

背後からハルの声がある。この世界に鈴花たち以外居ないならば、彼女がやるしかない。彼女は言われるままに本を開く。自動的に先ほど見た緑色の円盤のページになり、横に少しずつ文字が浮かび上がる。しかし、その文字は鈴花の知らない言語のためか読むことができない。文字が完全に浮かび上がると、自動的にページがめくられる。次のページには鈴花にも読める言語で文章が浮かび上がってきた。

「倒し方。」

本には緑色の円盤の倒し方が二ページに渡って書かれているようだ。しかし、何故なんだろう。鈴花はさらに近づいた円盤を見た。

「こんな方法で倒せるって言うの。」

鈴花は唇を軽く噛むと勢い良く本を閉じた。そして、廊下へ向かって走り出す。

「やれば良いんでしょ。ハル、あんたも来なさい。」

鈴花はハルを見る。すると、ハルは彼女に近づいてきた。

「言われなくても付いていくさ。俺はその本の番人だからな。」

鈴花たちは誰も居ない廊下を走って、一階へ降りた。

第十話 壊と解

第十話 壊と解

学校の一階には職員室、家庭科室、校長室の他に理科室がある。黒い本に書かれていた倒し方。それは計十個の数式とその答えを理科室、一年一組以降順に各教室の黒板にチョークで書いていく事。倒し方のページを良く見ると家庭科室は含まれて居ないようだ。

鈴花が通う学校は各学年三クラスずつある。故に理科室と合わせれば黒板は計十つ。すべての計算式は単純で既に本のページに書かれている。そのため、彼女は順に書いていけば難なく出来ると考えた。

「まずは理科室よ。」

鈴花が勢い良く階段を駆け下りると、目の前に現れる理科室の入り口。彼女は引き戸に手をかけた。難なく戸は開き、理科室内に入る。その時、ちょうど窓から外が見えた。緑色の円盤は確実に学校に近づいている。

早くしなければ。鈴花は良くわからない恐怖に怯えながら段差を上って黒板の前に立つ。しかし、大切なものが無い。

「チョ、チョーク。チョークどこ。」

鈴花は辺りを探す。チョーク入れも確認するが一本も入っていない。おかしいぐらいに空である。

「これを使え。」

背後から聞こえるハルの声に振り返ると、白く小さな物が飛んできた。受け取って見てみると新品のチョークである。

「これ、どこにあったの。」

黒板の周りには無かった。ならば、ハルはどこからチョークを探してきたのだろうか。しかも一度も使われて居ない新品である。

「話は後だ。早く書け。」

鈴花はハルの言葉に弾かれるように黒い本に表示されている二つ目の式を書いた。単純な足し算である。黒板に問題と答えを素早く書き記す。黒板から一步さがり黒板に書いた式を確認した。単純な問題ほど計算ミスをしやすいからだ。彼女は正しい事を確認するとチヨークを持ったまま理科室を出て階段を上る。次は一年一組だ。

「なんで、どこにチヨークがあつたの。」

鈴花は走りながら、後ろにいるハルに言った。走りながらのためか息が荒くなる。

「出したんだよ。チヨークが無ければ書けないだろ。」

ハルが言うには自分の手で新品のチヨークを出したらしい。鈴花はハルが手品師なのではないかと言つたが簡単に否定されてしまった。その間に鈴花たちは一年一組の教室に入る。

鈴花は黒板に向かいながら先ほどよりも辺りが暗くなっていることに気が付いた。答えを書き終わり、教室外に出る前に外をふと見ると太陽を遮つた円盤がさらに近づいていた。

鈴花は叫びそうになりながら順に各教室の黒板に問題と答えを書いていく。自分の教室が終わり、三階へ向かう途中校舎が激しく揺れた。彼女は振動で立っていらなくなりその場に座り込んでしまふ。

「来たぞ。早くしろ。」

ハルは鈴花の手を引っ張って立たせる。その時、複数の窓ガラスが割れる音がした。何かが侵入したのだ、何かが。

鈴花は急いで階段を上り、一番端の三年一組に入る。窓の外に見えるのは緑色の円盤。円盤に刻まれた模様が青く光っている。

鈴花は呼吸がさらに荒くなる感覚を覚えながら黒板に新しい式を書いていく。式を書き終えて答えを書こうとしたとき、間近で窓ガラスが割れる音がした。外を見ると案の定窓ガラスの一つが割れている。そして、ガラスの割れた場所から黒く細い手が教室内に侵入してきた。

「いや、いやあ。」

鈴花は答えを書ききり教室を出る。次の教室へ入るとき一組のほうを一瞬見ると既に手が廊下へと伸びていた。しかし、それだけではなかった。二組の窓にも同様の手が居るのだ。幸い窓は割られておらず侵入されていない。複数の黒い手が窓を叩いているだけだ。彼女は素早く問題を見ながら黒板に書き写し、問題を解く。九問目のためか三桁と二桁の数字の足し算となっていた。三桁ではもう暗算で答えを出すのは怖いので、黒板の空いているところで計算を始めた。黒板にチヨークが当たる音がする。

鈴花は計算の答えが分かると、すぐに結果をイコールの後に書いた。教室を出ようとしたとき、教室の前の出入り口から手が見えた。彼女は後ろ側の出入り口へ向かって走る。その時、背後で窓が割れる音がした。その音を聞きながら二組の教室を出てそのまま三組の教室へ入る。入る直前、奥の階段から何本かの手が見えた。彼女は泣きそうになりながら最後の問題を黒板に書く。最後は三桁同士の足し算だった。しかし、単純な数字だったため別途計算を書かずに直接書き込んだ。

「これでおしまい。あとは何。」

鈴花は最後の答えを黒板に書き記すと黒い本を見た。するとすべての数式が青白く光り、その下に最後の行動が浮かび上がった。

「屋上に置くのね。」

最後の場所は屋上であった。鈴花は教室から出ようとする。しかし、既に前後の出入り口からそれぞれ複数の手が侵入している。窓を見れば複数の手が窓を叩いている。ガラスが割れて外からも侵入されたらおしまいだ。

「ここは俺の出番だな。付いてきな。」

ハルは鈴花の前に出て教室の後ろ側の出入り口に向かって飛んだ。出入り口には既に複数の手があり、出る前につかまりそうである。それでもハルは一直線に出入り口に向かっていった。教室内に入ってきた手がハルを捕まえようと手を伸ばしてくる。ハルはその手を回避し、彼女の手を掴んだ。そのまま出入り口を通過して廊下まで引

つ張った。彼女はハルに引つ張られたことによって黒い手に触れず宙に浮いたまま廊下へ出た。彼女はハルの手を掴んだまま着地する。ハルはすぐに彼女から手を離れた。あとは自分で走れと言うことだろ。

鈴花は黒い手を避けながら屋上へ続く階段を上り、屋上へ出た。屋上に出て初めに目についたのは緑色の円盤である。校舎とほぼ同じ高さの円盤はいまやびったりと校舎にくっついている。円盤が屋上に目標が移動したことを認識したのか、細い手が円盤の中から生えてきた。すぐに、彼女は本に書かれたとおり黒い本を開いたまま足元に置く。

鈴花は本から少し離れて何かが起きることを待った。ハルは本体と三階から来る手に注意を払いながら彼女の傍に来る。すると、倒し方のページに書かれたすべきことが順に白く光る。最後にすべきことが白い光を失ったとき、黒い本は自ら宙に浮いた。

黒い本は跡形も無く消えてしまう。直後、再び校舎が揺れた。鈴花が周囲を見れば近づいてきた無数の手が本体へ戻っていく。

鈴花は円盤へ少しずつ近づいた。少しずつ円盤の高さが低くなっていることに気が付く。円盤の高さが校舎の高さを下回ると、彼女は屋上から円盤を見下ろした。校舎の側面に大きな黒い円が出来ていた。その中へ少しずつ緑色の円盤の体の一部が吸い込まれていく。緑色の円盤はまるで空気が抜けるように小さくなっていく。最終的に緑色の円盤は小さな丸い塊に圧縮されて黒い円の中に吸い込まれた。吸い込まれると、すぐに黒い円は消える。

鈴花は校舎の側面から目を離し、再び屋上を見た。黒い本が再び宙に浮いた状態で姿を現す。彼女は近づき本を手を取った。倒し方のページから自動的にページがめくられ、緑色の円盤の絵が描かれたページになる。絵の横にある未だ読めない言語で書かれた文章の下に赤い文字列が浮かび上がった。やはり、この赤い文字列も彼女には読めない。ハルも同じページを覗き込んでいる。すると満足そうに本から顔を離れた。

「倒せたみたいだな。」

鈴花はハルと本のページを見る。これが倒せたということなのかもしれない。黒い本は自動的にめくれて「倒し方」の次のページになった。しかし、何も書かれていないし何も書かれない。

「さっきの緑色の円盤はどこへ行ったの。」

鈴花はハルに尋ねるも、彼は首を横に振るだけである。ハル自身にもわからないのだろう。再び黒い本を見ても何も書かれていない。彼女は黒い本を閉じた。

「ひとまず、現状がどうなっているのか。知っていることを話してもらおうよ。」

鈴花はハルを見た。彼だけが彼女よりも先に黒い本に関わっている。何かわかるかもしれない。

日が落ちた空はゆっくりと光を失い始めていた。

第十一話 帰路

第十一話 帰路

鈴花たちは学校の校門前に立っていた。陽が落ちて暗くなった道は本当に暗く静かである。彼女たち以外に人間が居ないためかどの家にも明かりは無い。街灯の光も無いため、真つ暗な世界が鈴花たちの目の前に広がっていた。この状態では何処かに行こうにも難しい状態だ。

鈴花は人々を照らす街灯が急に懐かしくなった。明かりが灯つていればどれほど安心出来ただろうか。それと共に暗闇への恐怖も和らぐ。しかし、今この状態は人間の中にある恐怖心を無理やり外に引つ張り出す以外の何ものにも役立てていない。

「暗くて、なんか怖い。どうしよう。これじゃ家に帰れないよ。」

鈴花はしゃがみ込み目の前にある自宅への道を見た。自宅と言っても彼女が住んでいる建物と同一のものであるだけである。元は誰の家なのかわからない。

ハルは暗闇の中黒い本をじつと見ている。

「道を照らす光があれば良いんだろ。」

ハルは鈴花を見て、街灯がある辺りを見た。すると、彼が見た街灯に明かりが灯っていく。

「すごい。どうやったの。ねえ、まさかハルって魔法使いなの。」

鈴花は驚き声を上げる。目の前で起きている事が信じられなかった。まるで魔法である。チョークも魔法で出したのではないかと考えてしまうほどだ。

「魔法なんて非科学的なもの、俺には使えない。それに、これを実際やっているのはこの本だ。」

ハルは鈴花の持つ黒い本を見る。

街灯に明かりが灯されたためか、だいぶ色々なものが見えるよう

になった。

鈴花たちはその中を歩き出す。彼女が歩けばそれに合わせてハルが街灯に明かりを灯していく。街灯の明かりは彼女が通り過ぎるとともに順に消えてく。これは無駄が無い。しかし、そうだとしたら黒い本が自ら光れば明かりとして良いのではないかと考えてしまう。彼女がそのことをハルに言えば、彼は驚いて彼女を見返した。

「鈴花のところじゃ本は明かりとして使われているのか。」

鈴花はハルからの単純な質問に反論しようにも否定しか出来ない。本自体を燃やせば良いと考えても、それでは本がつかえなくなってしまう。結局ところ本は明かりにはならないのだ。

鈴花は周りが明るくなり、安心出来るようになった。すると、忘れていたことを思い出す。彼女は次にハルに抱いている疑問の解消へと取り掛かった。

「ハルって最初からこの世界に居たの。」

鈴花がハルを見ると彼は首を横に振った。彼は彼女を手助けするために黒い本と一緒にこの世界に連れてこられたらしい。彼にはそれ以前にどこに居たかといった記憶は無いらしい。その事について黒い本が知っているかもしれないと彼は言う。しかし、黒い本は何も言わない。

鈴花はハル自身を非科学的な存在として考えてみた。しかし、そこで問題が発生する。非科学的な存在が同じ部類に属する魔法の使用を否定しているのだ。つまり、そのことから彼自身も科学的な何かで構成されていると考えられる。現時点でこれ以上わからないため、ハルが何であるかについての考察はここでやめることにした。

鈴花は気を取り直して次の質問をする。

「ねえ、さっき出てきたような敵ってまだこれからも一杯出てくるの。」

鈴花は歩きながら横目でハルを見る。彼から返ってきた言葉は良いものでは無かった。

「幾つ居るのか俺にはわからない。こいつも幾つ出てくるかについ

ては何も言っていないし教えてくれない。案外こいつ自身も知らないのかもしれないな。」

ハルは黒い本を見ながら言った。ハルの話では彼と本の間で意思疎通が可能であるとの事である。だとしたら何故実際に使用する鈴花と黒い本の意思疎通を可能にしなかったのだろうか。これが仕様というものなのかと考える。それとも彼女から見て本として存在すべき対象だからなのだろうか。疑問はあるが、案の定黒い本の回答は無いためこの質問は終わらせた。

「じゃあさ、敵を全部倒したら私は元の世界に戻れるよね。まさか戻れないってことは無いよね。」

鈴花は一番心配なことを聞いた。生きて戻れるかどうかである。望んでこんな所に来たわけではないのだ。しかし、敵の目標は彼女であり、逃げたところで何も変わらない。この疑問について黒い本からの回答があった。

「お前が生きてすべての敵を倒し終えたら元の世界に戻してくれるんだとよ。」

黒い本の回答から最後まで生きていれば帰れるとの事である。また、パートナーとしてハルと共に出来る限り彼女を守るとの回答も得られた。この話は心配すればするほど質問と回答の連続になると考えられたため、これ以上の質問は避けた。

「そういえば、この本の……。」

鈴花は黒い本を開き、緑色の円盤の絵が描かれたページを開こうとした。すると、自動的にページがめくられて目的のページが開かれる。彼女は手でページをめくっていない。ただ開こうと思っただけである。これが科学的であると言われても信じがたい。

「この文章って何が書かれているの。」

鈴花は緑色の円盤の絵が描かれたページの横にある文章を指差した。ハルは本を覗き込みその文章を見る。

「これは敵の名前、体長、体重などの情報だ。ついでにこの赤い文字はな……。」

ハルは本から顔を離すと鈴花を見た。

「敵を倒すことが出来ましたって意味の文字列だ。学校のテストとかであるだろ、『よくできました』ってのが。あれと同じだ。その赤い文字列が出た時点で敵は倒せたって事だ。無ければ未だしぶとく生きてるって事さ。この赤い文字が出るまでは気を抜かないことだな。」

ハルは大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。彼は目の前にある闇を見て続けた。

「俺が今いろいろ喋っているが、この情報はみんな黒い本から聞いたんだけどな。俺はただ伝えていい情報を伝えているだけさ。」

ハルはただの代弁者であり、決して偉くは無いと本人は言う。しかし、黒い本と直接意思疎通が出来ない鈴花にとって彼は必要な存在である。

「このさつき倒した敵の名前ってなんなの。」

鈴花は本に書かれた敵の名前と思われる文字列を指差す。ハルは目だけを彼女に向けた。

「^{ネビュラ}Nebulaだ。」

ハルは言い終えると再び前を向く。星雲を意味するその名は何かの始まりを意味しているのだろうか。考えているうちに朝は鈴花の自宅であった家に着く。

鈴花は玄関に走りより、ドアのノブを回してみる。すると鍵はかかっておらず難なく開いた。登校前に鍵をかけたはずであるがそれさえも黒い本が見せていたのかもしれない。彼女は後ろに居るハルを見た。

「私の家じゃないけど。ここで休みましょう。私の家と同じだから。」

鈴花はそのまま家の中に入る。遅れてハルも家の中に入った。

第十二話　もう一人の少女

第十二話　もう一人の少女

鈴花たちは家の中に入ると家の中に明かりが灯った。彼女はすぐに黒い本が明かりを点けたのだと思った。家の中には朝見た物は一つ無い。リビングやダイニングを見ると食べ物が見つかり、誰かが住んでいたことがわかった。ここに住んでいた人も、やはり何処かへ消えてしまったのだろうか。

鈴花の家であるのに彼女の家では無い。そんな新しい感覚をもたらすこの家の中を彼女は歩き回った。各部屋を回りどのような使われ方をしているのか調べる。家の中のすべての明かりが点いているわけでは無い。そのため彼女は黒い本を持ったままハルと一緒に回った。

住人がそれぞれ使用していた部屋は三つ。本が沢山ある部屋。両親が使っていたらしい部屋。そして、子供が使っていたらしい部屋である。子供が使っていたらしい部屋は彼女が元の世界で使用していたところだ。

鈴花は子供が使っていたらしい部屋へ入った。部屋中に良くわからないポスターが貼られている。この部屋の主が好きなアイドルだろうか。彼女が机の上を見ると、写真立てがあった。家族の写真が飾ってある。両親とその間に居る彼女、そう彼女。

鈴花は目を見開き、写真から素早く顔を離れた。ハルは何かあったのかと聞く。彼女はゆっくりとハルを見る。そして、震える手で写真を指差した。

「ねえ、なんで。なんで私が、この写真の中に居るの。ねえ、なんで。」

二人の間に写っている少女は確かに鈴花であった。今の彼女よりも大人びて見える。よく見れば隣に居るのは彼女の母親だ。反対側

に居る男は見たことが無い。この男は一体誰なのだろうか。写真から父親だと考えられた。写真の日付を見れば彼女が過ごしたことの無い未来がしるされている。

ハルは写真に近づき、彼女と交互に見た。

「どついう事なの。これって、私じゃない。」

写真を見れば見るほど彼女の頭の中がかき混ぜられる感覚を味わう。彼女は机に両手を付いてしゃがみこんだ。わけが分からず気持ち悪い。何か得体の知れないものを吐き出しそうだ。

「こつちにも私が居て。私よりも大人びていて……。」

鈴花は何度も首を横に振ると、立ち上がって再度写真を見た。

「意味がわからない。この世界にも私が居たって事なの。彼女も消えちゃったの。」

鈴花は机に手をついてじっと写真を見た。

「彼女の代わりに私が呼ばれたって事なの。そうなの。」

憶測の域を出ない考えが頭の中を回り続ける。ハルは鈴花の持つ黒い本を見るも首を横に振るだけだ。やはり、何も教えてくれない。鈴花はその場に座り込み大きく深呼吸した。落ち着かなければやっていられない。ここにはこの世界の彼女と彼女の母親が確かに居たのだ。そして、父親らしき男も。彼女は部屋の中を見渡した。一見するとこの世界の彼女とは趣味が合わないようだ。いや、そんなことはこの際どうでも良い。

鈴花は落ち着くと室内に配置されているベッドへとダイブした。

片手に持つ黒い本をベッドの傍に置く。

「ハルって、敵が来たことがわかるの。」

鈴花の言葉にハルは頷く。ネビュラの時も彼女が本を開く前に気が付いていたため、そうではないかと思っていた。

「じゃあ、何かあつたら起こして。」

鈴花はそれだけ言うくと布団の中にもぐりこんだ。直後、照明が消えるとともにドアを開け閉めする音が聞こえる。ハルが部屋の外に出たのかもしれない。布団からはどこかで嗅いだことのある匂いが

する。その匂いを吸い込みながら彼女は眠りについた。

鈴花は空腹で目が覚めた。考えてみれば昼から何も食べていないのだ。外を見れば未だ暗く夜だということがわかった。軽く目を擦りながら起き上がる。一瞬夢から覚めたのかと思ったが、照明のスイッチを点けると同時に現実引き戻された。ひさしぶりに見た光の強さに目を背けそうになる。彼女は強い光を避けるように階段を下りて一階のダイニングルームへと移動した。すると、そこには既に明かりが灯っていた。

「待つてたぞ。腹減つてるだろ。」

テーブルの上に載せられた料理の数々。料理は湯気が立ち上り、出来立であることがわかる。料理の傍にお茶が置いてあった。ハルの話では麦茶らしい。そして、それ以上に目を引いたハルのコック姿。空飛ぶコックである。どこからそんな衣装が出てきたのか謎である。いや、このタイミングで料理が出てくる事についても謎である。彼女は問いかけようと思ったがまたよく分からない返答か答えられないと言いそうなのでやめた。ここはそういう所なのだ。

「すごいわね。これ全部作ったの。」

鈴花は空いている椅子に黒い本を置くと自らも椅子に座った。目の前に並ぶおいしそうな料理。冷蔵庫にあった材料から作ったのだろうか。よくわからない。彼女はじつと料理を見た。ハルは料理が上手いのだろうか。

「うまいぞ。多分。」

鈴花は料理に手をつける。初めは恐る恐るであったが、一口二口と食べるとおいしさに気がつく。それからは箸を置くことなく食べ続けた。ハルを見れば同様に食事を始めていた。なんと、彼は椅子に座って食べている。蛙から変身した時を最後に今まで飛んではかりであったため、椅子に座っている姿は普段とは違う状態に見えた。ハルは椅子に座ると意外と小さく見えた。

それぞれが食事を終え、麦茶を飲みながら落ち着く。鈴花は周りを見渡しながら、ふとハルを見た。

「お風呂。入れない、よね。」

鈴花は照明や料理ができるのだから、お風呂も沸かせるかもしれないと思つた。しかし、初めから出来るとは考えない。黒い本やハルにも出来ないことがあるだろうから。

「家で生活していく上で行くことは全部出来るぞ。お風呂だって洗顔だって歯磨きだってな。それにいちいち黒い本を持ち歩くのも大変だろ。用が無いときは俺がもつていてやるよ。」

ハルは椅子の上に置かれた黒い本を持つ。すると、次の瞬間本は跡形も無く消えてしまった。

「き、消えた。何処いったの。何処に隠したの。」

鈴花は驚き慌てる。まるで手品である。しかし、彼は手品師では無い。何処に隠したのだろうか。

「心配するな。今は俺の体の中にある。俺はあくまでも本の番人だ。お前が呼べばすぐに駆けつけるし、言えばすぐに本を出すことも出来る。何か必要なものがあつたら俺に言え。」

ハルは席を立つと汚れた皿を素早く回収してキッチンに持つていく。そこで彼は何かに気がついたらしくすぐに鈴花のほうに戻つてきた。

「風呂に入るんだつたら着替えを脱衣所に用意しといてやる。あとは何かあつたら呼べ。」

ハルはそれだけ言うつとキッチンに戻つていった。

鈴花はお風呂場へと続く廊下を歩く。窓の外は真つ暗で、今何時なのか全く分からない。先程の部屋には時計があつたが確認していなかった。いや、今は時間なんて気にすることは無い。それよりも重要な事が沢山ある。

鈴花は脱衣所に入ると乾いたタオルがあるか確認する。彼女はすぐに服を脱いで風呂場へと入つた。風呂場はさすがにこつちの世界もあつちの世界も使われ方はほぼ同じで、あまり変わりがなかった。

変わっている部分といえばシャンプー類の銘柄だろう。見たことはあるが使ったことの無い銘柄ばかりである。この際、勝手に使わせてもらっている身分なので品質の問題があるにせよつべこべ言わずに黙って使うことにした。

鈴花がお風呂から出ると、いつの間にか着替えが乾いたタオルとともに置かれていた。置かれていたのは大きめのパジャマだ。彼女は脱いだ服をまとめると、頭に乾いたタオルを巻きつけながら洗面所へと向かった。乾いたタオルが沢山あったので遠慮せず使ってみる。

洗面所には新しい歯ブラシ、歯磨き粉とコップが置いてあった。

鈴花は歯磨きをする。歯磨き粉についてはシャンプー同様気にならないことにした。洗面所にもタオルが常備されていて使わせてもらった。ここまできると、まるでホテルに泊まっているような感覚になる。

鈴花は部屋に入るとハンガーを探して制服を壁にかけた。こんなときでもしわになるのは嫌だからである。彼女は制服の表面について小さなゴミを払うとリビングへと戻った。

鈴花はリビングに置かれたソファに腰をおろして天井を見上げる。ハルも何処からとも無くリビングに来て別のソファに座った。一段落着いたらしい。

「さつき寝たから眠く無いわ。」

ダイニングの横に位置するリビングは大きなテーブルを中心に二つのソファとテレビがある。テレビがあっても見られるかどうかは怪しい。鈴花はソファに両足を乗せて横になった。

「暇だわ。」

鈴花は目を瞑り仰向けに寝る。眠くないもののが無ければ眠っていたい。

「仕方ないな。」

鈴花は薄目でハルを見た。彼はテレビに近づき、画面に手の平を向けた。まさか、何か映し出そうというのだろうか。

直後ハルの目は見開かれ、室内の照明がすべて消えた。鈴花はすぐに起き上がる。

「どうやら敵さんが来たようだ。」

ハルの声ができるものの、鈴花からは彼が何処にいるかわからない。しかし、すぐに位置を確認することが出来た。彼自身がほのかに光り始めたのだ。彼は鈴花に手を差し伸べた。その手の上に黒い物体が出現する。それは模様によって光り始め、黒い本であることが確認出来た。また、戦わなければならない。

鈴花は本を受け取ると、リビングを出て玄関から外へ出た。

第十三話 転がる先に

第十三話 転がる先に

鈴花が玄関から外へ出ると、地震のような揺れが彼女を襲った。彼女は揺れに耐えながら黒い本を開いた。自動的にページがめくれると何も書かれていないページにゆっくりと絵が描かれていく。暗くて色は分からないが、丸いようだ。

「鈴花、こつちに来い。」

ハルは扉に張り付いていた。今鈴花は玄関前に居る。ここに居ると周囲が見渡せるが、敵からも見えてしまう。彼女はすぐにハルの隣に付いた。本のページを見れば絵が完成していた。すぐに横に文字列が表示される。

「Belina^{ベリーナ}だ。」

ハルは黒い本を覗き込み敵の名前を読み上げた。名をベリーナと言うその敵は、丸い複数の岩だ。一体では無く複数居るという事らしい。文字列が表示されると、自動的にページがめくられ倒し方が表示され始めた。

彼女は背中に触れる扉が少し振動していることに気がつく。背中を離して手を触れてみるも同様に振動している事が確認できた。しかも、先ほどよりも振動が強くなってきている。

「鈴花、隠れる。」

鈴花はハルの言葉に再び背中を扉に密着させた。さらに振動が大きくなっていく。すると、振動以外に何か重いものが転がる音が聞こえ始めた。本のページを見れば今回の倒し方が完全に浮かび上がっていた。

「今回は足し算と引き算って事ね。」

鈴花はその文章を見ると、扉から道路を見た。するとその時、視界の端で何か大きなものが動いていることが見えた。彼女はすぐに

顔を戻して隠れる。小声でハルに伝えようと、彼も道路側を気にしながら何かが来るのをまつた。さらに振動は強くなり、彼女たちの体を揺らす。彼女は声が出そうになるのを必死に堪えた。今この場で見つかつては良くない。急に振動が止まる。鈴花は恐る恐る塀から道路側を覗いた。すると案の定、そこには大きな丸い岩があった。しゃがんだ状態から見上げた姿は人一人を簡単に押しつぶせるほどの大きさに見える。

岩は鈴花たちに向かってゆっくりと回り始めた。

「逃げるよ。ハル。」

鈴花は立ち上がり植物の鉢が幾つもある庭を走り家の裏へ向かった。背後で塀が崩れる音がした。すぐに、ハルが彼女の横に付く。この家が自分の住んでいた家と同じならば家の裏に出入り口があるはずだ。考えていた通り裏口があった。自分が見たことあるものと全く同じである。背後から何かを破壊する音が聞こえる中、裏口に向かつて走った。背後を見ると、大きな岩が塀を破壊しながら家の裏へ回ってきた。

鈴花は裏口から道路へ出ると、とにかく走り始めた。彼女が背後を見れば、岩が道路に出てきている。彼女が前を向けば、目の前に丁字路が見える。その奥には黒い塔が見えた。

「なんなの。あれ。」

黒く高いその塔は周りの建物と比べて異様で不釣合いだ。明らかに元から在ったものではない。

鈴花は背後を見た。今は黒い塔について考えることを止めて、襲ってきた岩をどうするか考えることにした。彼女は目の前にある丁字路を左に曲がった。左に行くと曲がり角の多い地域に入ることが出来る。しかし、すぐに彼女は立ち止まった。そこに他の岩が現れたからだ。岩が彼女に向かってゆっくりと転がりはじめた。

鈴花はすぐに反対の道を走り出した。彼女の背後に二つの岩。このままでは黒い本に書かれた倒し方を実行出来ない。

「どこか。どこか隠れるところは無いの。」

鈴花は両側にある住宅を見ながら考えた。住宅街、通学路、道。そこで鈴花は思い出す。近くに人一人がやっと通れる道がある。両側を塀や家に囲まれた細い道だ。そこならば岩も入って歩くことは出来ないだろう。彼女は考えをまとめるとその細い道に向かって走った。通りから見えて右側に位置するその細い道は、両側を家が挟み込んだ細い道となっている

鈴花は細い道を発見して安心するも、前方から別の岩が転がってきていた。早くしなければ囲まれて潰されてしまいかもしれない。

鈴花は走る速度を上げた。一直線に細い道へ向かい、片手を塀につけると、それを軸に体を回転させて細い道へ入った。背後で鈍い音が聞こえてくる。立ち止まり、振り返れば岩同士がぶつかっている。一つの岩が彼女が入った道に必死に入ろうとするが、塀を破壊するだけで入り込むことは出来ない。他の岩はどこかへ行ってしまった。岩が何度も塀にぶつかるために細い道がさらに細くなっている。これでは簡単には入ってこれないだろう。

鈴花は本のページを観ながら反対側の出口へ向かった。ページ自体が光っているためか、光の当たらない暗いところでも文章が読めた。倒し方には式と答えを書く場所が明記されていない。何処でも良いということなのかもしれない。ならば、塀でも良いのではないだろうか。細い道の反対側の入り口から出て左右に伸びる道を見た。こちら側には岩は居ないようだ。早速そばの塀に式と答えを書くことにした。彼女はチヨークを探す、さらにチヨークを探す。しかし、見つからない。

「どうしよう。学校に置いてきちゃったのかな。」

前回チヨークを使ったのは学校である。急いでいたためか教室か屋上においてきてしまったのかも知れない。さて、どうするべきだろうか。

「ほれ、前回使ったチヨークだ。」

鈴花がハルを見ると、その手にチヨークが載っていた。彼女はチヨークを受け取るとすぐに書き始めた。黒板と違ってざらざらして

いるためか書きづらい。

「今度は回収してやらないからな。自分でしつかり持つておけよ。」
鈴花はハルの声を聞きながら順に式と答えを書いていく。今回も全部で十個の数式だ。足し算と引き算それぞれとそれらを合わせた式が並ぶ。みんな単純な計算だ。間違えないように式を塀に書くとその横に答えを書いていく。

「おい、敵さんが来たぞ。」

鈴花が六つ目の式を書きながら右に続く道を見た。大きな岩がこちらに向かってきている。彼女は六つ目の式を書き終わらせ、すぐに答えを出そうとした。

「早くしろ。このままじゃ潰されるぞ。」

背後から聞こえるハルの言葉にせかさねながら式の答えを導き出す。

鈴花は六つ目の式と答えを書くとき右に続く道を見た。眼と鼻の先に岩がいる。すぐに細い道に逃げ込む。直後、岩は彼女が居たあたりに激突した。大きな音とともに振動が伝わってくる。

鈴花が細い道から顔を出して岩を見ようとしたとき、再び細い道に向かって岩が突進してきた。その岩が塀から離れると、視界の端に別の岩が見えた。反対側の入り口と同様に岩が細い道に入ろうとぶつかってくる。しかも、二つ同時にである。塀が崩れる音とともに細い道がさらに細くなった。突進しても捕まえることは出来ないのだ。頭の悪い敵である。

彼女は落ちて着いて本に書かれた残りの式とその答えを書こうとした。しかし、本に書かれた式はページが発光しているために見えるが、塀は周りが暗く良く見えない。

「こういうときは俺の出番だ。」

すると、ハルの体が自ら発光した。その光で塀が照らされチョークで文字を書いても何が書かれているか分かるようになった。

「本は光らないけどハルは光るのね。」

鈴花はすぐに数式を書き始める。近くでは鈴花に近づこうと二つ

の岩が扉にぶつかっている。ぶつかる音や振動に邪魔されながらも数式と答えを順に書いていく。足し算と引き算が混ざった式は計算する値の数が増えるために計算時間がかかった。別途計算して答えを書いてく。

「出来たわ。これで全部よ。」

鈴花はすべての式と答えを書くの本のページを見た。すべての数式が青白く光った。すべての数式が白い光を失った時、本は彼女の手を離れて宙に浮かんだ。次の瞬間、跡形も無く消えてしまった。

鈴花は岩を見た。未だこちらに近づこうと扉にぶつかってきている。突如、それぞれの岩の上に黒い円が出現した。岩はその円に吸い込まれるように張り付き、少しずつ小さくなっていく。最後に小さな塊となって黒い円に吸い込まれると、黒い円も消えてしまった。鈴花の手の中に再び黒い本は戻ってきた。彼女が本を開くと、自動的にページがめくられてベリーナの絵とその情報が書かれたページに移る。情報の下に赤い文字が浮かび上がった。これが倒せたということだ。

鈴花は大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。前回と同様に新しい何もかかれて居ないページに自動的に移動する。彼女は本を閉じると、ハルを見た。

「家に帰ろう。休みたいから。」

鈴花の言葉にハルが頷くと、扉をよじ登って細い道から他人の家に入り、通りへ出た。その時、彼女は何か違和感を感じた。体を回転させながら周りの建物を見る。

「黒い塔。消えちゃった。なんで。」

確かに先ほど見えた黒い塔はどの方向を見ても見つからなかった。ハルが言うにはそれもさっきの岩と一緒に消えてしまったのではないかとのことだ。だとしたら、あの黒い塔はなんのためにあったのだろうか。しかし、ハルも黒い本もその点について答えられなかった。そのため、黒い塔について考えることをやめた。

家への帰り道、鈴花はふと考えてみた。敵を倒すには自分が数式

を答えていかなければいけない。理由はどうであれそれが敵を倒す方法なのである。今回二体目を倒したが、黒い本から何も言われないのでまだまだ敵は居るのだろう。だとしたら、今後敵を倒すための問題がさらに難しくなっていくのではないだろうか。彼女は数学については得意なので大丈夫だと考えるが、間違えずに正確に答えていけるか不安であった。多分、間違えればやり直しだろう。その間に敵に襲われては終わりだ。これは夢じゃないんだ。過去に習った計算方法をもう一度復習する必要があるそうだ。

夜空に昇る月、それを見る鈴花。太陽と月だけが、ただじつと彼女たちの戦いを見ているのだろうか。

第十四話 復習の時間

第十四話 復習の時間

鈴花たちが居た家は、岩によって玄関前から裏口までの塀は破壊され、植物たちも無残な姿となっていた。家の一部も損傷を受けており、彼女たちは早速中から確認することにした。

「ああ、人の家をこんなにして。」

該当箇所を家の中から見ると、外からの力で壁が膨らみ亀裂が入っていた。ここに居る誰も直せないだろうからこのままにすることにした。崩れる可能性が出てきたら別の場所に移動しなければならぬだろう。

鈴花はハルに黒い本を預けるとリビングのソファに腰を下ろした。その反対側にハルが座る。

「なんで夜遅くに出てくるのよ。時間なんて全く関係無いわけ。」

時計を見れば午前を回っていた。それでも眠くは無い。いや、あんな事をした後なのだ。簡単に眠れるほど彼女の神経は凶太くない。

ハルが立ち上がり、テレビの前に立った。

「眠れないならこれでも見て勉強すると良い。」

ハルは手をかざすと、すぐにテレビに映像が映される。テレビに映し出されたのは数学の各分野の名前である。

「本当はさつき古典文学を映し出そうとしたんだけどな。今後を考えるとハルはさつきを見ておいたほうが良いだろう。」

ハルはテレビの画面を見ながら言った。数学の各分野のお勉強が出来るようだ。ハルに言えば彼が操作してくれるらしい。ざっと中身を見てみると範囲は中学数学だ。夕方戦ったネビュラを見る限り、敵を倒すには数式を解いて答えを書いていかなければならない。理由はどうであれそれが敵を倒す方法なのである。だとしたら、多項式や方程式といった数式の計算を重点的に調べておけば良さそうだ。

今は単純な足し算や引き算だけだが、今後それだけでは終わらないだろう。なぜなら、これをハルが出した時点でそれ以外の分野の問題も扱いうると言っているようなものだ。照明のようにこれらは黒い本が裏で行っていると考えられるからだ。黒い本は多くを語らない。しかし、必要と思われるものは提供する。だとしたら、これも必要と思われるものなのだろう。

「部屋に行つて紙とペンを探してくる。」

鈴花はソファを立つとリビングを出て、彼女の部屋へと向かった。耳や目で分かつたとしても脳が理解しなければどうしようも無い。手で書かなければ覚ええないのだ。彼女は部屋で筆記用具と紙を探す。部屋主には悪いが無駄に浪費するわけではないので見逃して欲しい。机の上にあるペンと机の中にあつた何もかかれて居ないノートを取り出す。表紙にはただ彼女の名前が書いてあつた。まるで前から自分のものであつたかのような感覚と、それでも自分では無い人間のものであるという感覚が混ざり合う。なんとも不思議な気分だ。

鈴花は写真を見た。眠る前に見た三人が写つた写真である。一度眠つたためか、今は落ち着いて見ることが出来た。この三人はこの世界の鈴花とその両親なのだ。彼女は片手で写真に軽く触れる。

「何故こんなことが起きたの。」

鈴花は写真の中に居るもう一人の自分に問う。この世界で何かが起こつたのだ。けど、彼女は何も知らない。知ることができない。

鈴花は机の引き出しに背中をつけて座つた。

「私は誰のために戦っているんだろう。」

見上げた天井には、ただ鈴花のために光を放つ照明だけがある。

彼女は軽く首を横に振ると立ち上がった。誰も教えてくれないのだ。誰も。

鈴花は紙に数式とその答えを書いていく。基本的な問題でも解法が分からなければ解けない。忘れていた解き方を思い出していく。

まるで実力テスト前の状態だ。広範囲の数学を勉強して、試験に挑む。違うのは間違えればただでは済まされない点だ。何故敵を倒すために数式を解かなければいけないのか疑問である。このことはハルも黒い本も教えてくれない。ただ、そうであると理解したほうがよさそうだ。

「もうだめ。疲れた、寝たい。」

鈴花はソファにもたれかかり、薄目で天井を見上げた。時計を見ていないがそろそろ明るくなる頃かもしれない。

鈴花はゆっくりと立ち上がりカーテンを開く。瞬間、太陽の光が目に入る。彼女は強烈な光に目を背けた。ゆっくりと目を開くと明るい朝が見えた。

「休んだほうがいいだろう。」

背後からハルの声が聞こえる。鈴花はゆっくりと振り返った。

「部屋で眠ってくる。消しといってもらえる。」

鈴花はテレビの画面を見た。今も画面には数式が表示されている。鈴花は大きくあくびをすると彼女の部屋に戻ってベッドに倒れこんだ。カーテンを少し開けると部屋の中に差し込んでくる朝日。彼女は疲れたためかそのまま眠ってしまった。

第十五話 物資調達

第十五話 物資調達

鈴花が起きたのは午後だった。太陽の光によって部屋の温度が上昇したためだ。暑さに起こされたためかまだ周りがぼやけて見える。再度眠りたいがこの暑さでは難しいので仕方なく起きた。部屋の中を見ればエアコンらしきものも見えるが、使えるかどうか分からないのでやめておいた。

鈴花は階段を下りてリビングに入った。カーテンは開けられ、部屋の中に光が入ってきている。しかし、この部屋は何故か涼しい。まさかと思つてハルに聞いてみた。すると案の定エアコンが稼働中のように。ハルも暑いのは苦手なのだろうか。これならば自分が眠っていた部屋もお願いすれば良かったと思う。少し汗ばんだ体が冷たい風によつて一気に冷やされていく。科学の力とは恐ろしいものである。このような冷たい空気や暖かい空気を部屋の中に送ることが出来るのだから。

鈴花はソファに座るが、すぐに冷蔵庫に向かった。こんなときは何か飲み物が必要である。確か冷蔵庫の中に麦茶があつたはずだ。昨日の食事時に飲んだのだから。

鈴花は冷蔵庫の扉を勢い良く開けた。しかし、中には麦茶なんて入っていない。それどころか食材も残り少ない。

「ねえ、麦茶無いの。」

鈴花はリビングに居るハルに聞く。返答は「無い。」とのことだ。新しく作っていないらしい。何か飲みたい。何か飲み物を。

「のど乾いたわ。どうにかならない。」

鈴花はダイニングからリビングに居るハルに聞いた。必要なものがあつたら聞けと言つたのはハルである。だつたら聞こうではないか。

「蛇口をひねってみな。」

鈴花はハルの言う通りに台所の蛇口をひねってみると水が出てきた。生ぬるくなく適度に冷たい。彼女はコップに水を汲んで飲んだ。体に水がしみこんでいく。もう一度水を汲むとリビングのテーブルに置いて、ソファに座った。

「水はどうかなるが、食べ物が無いんだよな。それに……。」

ハルはそこで、鈴花の服を見る。今はまだパジャマのままである。鈴花は彼の視線を感じて逃れようとする。彼は腕を組んで一点を見つめた。

「着る服も無いしな。よし、買い物に行くか。必要なものを揃えよう。」

ハルの言葉を一瞬理解できなかった。今この世界には鈴花たちしかないのだ。なのに買い物なんて出来るのだろうか。それとも、品物がそのままスーパー等に残ったままなのだろうか。彼女自身よくわからない状態だ。

ハルは夕方になったら出かけようと言った。それまで、彼女はこの涼しい部屋でテレビを見ることにした。映し出されるのは数学の式では無く昔話の世界である。本のように自動的にページがめくれ、文字と音とアニメーションが画面に表示されていく。見るこの出来る作品は、一話完結ものから複数話に分かれた長編まで様々である。鈴花はそれらを見ながら外が涼しくなるのを待った。

午後の日差しが弱まった頃。ハルの声で鈴花は買い物に行くための準備を始めた。

「他に誰も居ないんだからそのままでも良いんだぞ。」

ハルの声を背後に、鈴花はパジャマのまま二階の彼女が眠った部屋へと向かう。そこで、タンスの中やクローゼットの中を見た。良さそうな服を出して着てみるが大きくて似合わない。なんとか体に合うサイズの物を探してみる。見つかったものの、自分の好きにな

れない服だった。しかし、他に選択肢はないため仕方なく着ることにした。パジャマに入ったチヨークを取り出して服のポケットに入れる。その服のままリビングへ戻った。

ハルは鈴花の服にコメントしようが無いようで何度も見るが何も言わない。

「さてと、行くか。」

鈴花たちは玄関から外へ出た。太陽の光が弱まったためかあまり暑くない。

「建物が同じだとしたら。駅前に行けばすべて揃うわね。」

鈴花たちは駅前へ向かって歩き出す。歩いていると所々地面が変形していることに気がついた。何か重いものがこの道の上を通ったのだろうか。そこで、昨日の敵を思い出した。岩が転がればこんな風に変形するかもしれない。彼女たちは変形している地面を避けながら歩いた。

鈴花たちは住宅街をぬけてさらに歩く。駅前の大通りに入った途端、彼女の背筋に何か走った。普段は車も人もひっきりなしに通る大通り。しかし、今は彼女たち以外動くものは見えない。それにとどの店も閉まっているように見えた。「世界の終わり」という言葉が見事に当てはまってしまう光景だ。彼女はしきりに周りを見ながら大通りを歩いた。

「びくびくすんな。俺たち以外誰も居ないって言っただろ。」

鈴花はハルの言葉を聞くも、それでもやはり周りを見る。居ないからこそ怖いのだ。駅が見える位置まで来ると目の前に大きな建物が見えた。巨大な専門店だ。ここに入れば衣料品や雑貨が一通り揃う。それに地下一階には食品売り場もある。しかし、今は他の店と同様に閉店しているかのような状態だろう。誰も居ない店内は気分の良いものではない。それに品物を勝手に持っていくのも良くないように感じた。

「この大きなお店よ。ここで全部揃えるわ。」

専門店の入り口に着くと、案の定明かりは無く寂しい状態であっ

た。まるで閉店したあとのようだ。鈴花は太陽を見た。まだ明るく辺りを照らしているが、彼女がこの店から出てくる頃も辺りを照らしているのだろうか。

鈴花は入り口のドアを開ける。ハルとともに中に入った。

入った途端、中にある照明が手前から順に点されていく。彼女は驚くがすぐに黒い本がしたのだと理解した。それ以上は気にせず歩き出すと、目の前に複数の半透明の白い物体が現れ始めた。それは人の形をしていて、次第に白から違う色に変化していく。

「ど、どういうこと。」

色が実際の人の色に到達すると、その物体は人として動き出した。鈴花は驚きハルを見る。彼は驚きもせず動き出した人々を見ている。まさか、これも黒い本が見せているのだろうか。彼女は再度現れた人々を見た。ある人は店の従業員。またある人は店の客。まるでここだけ人の居る世界であるように思えてしまう。

「さてと、さっさと買い物するぞ。」

ハルは店の奥へ向かって移動を始めた。鈴花もその後を追って歩き出す。彼は器用に人と人の間をすり抜けながら進んでいく。まるで、人とぶつからない最適なルートを知っているかのようだ。

「ハルちよつと待つてよ。」

鈴花はハルに追いつこうとして正面から歩いてきた女の人にぶつかってしまった。彼女はすぐに謝ると、相手も軽く謝ってどこかへ行ってしまった。見せているものといえども相手は形あるもの。彼女はすぐにハルを追いかけた。彼女はその途中でよく服を買う店を見つけた。

「ハル。こっち来て。」

鈴花の声にハルはすぐに戻ってきた。ハルが何処まで行っても、物を買いたいのは彼女のほうだ。勝手にどこか行かれても困る。

「悪いな。こんなところ初めてだから気になってね。」

鈴花は何も言わず店へ入った。中には店員と数人の客。どれも黒い本が見せているのだろうか。彼女は早速良さそうな服を選ぶ。ハル

を見れば彼女の後ろで黙って見守っている。そういえば、ハルは男か女かと言えば男なのだろうか。

鈴花は気に入った服を見つけては試着してハルに見せていく。数回の試着後、ハルのやる気の無い視線が彼女に向けられた。正直彼にとつてはどれでも良いのだろう。

鈴花は最終的に決めた服を着て試着室を出てきた。それは上が橙色と黄色が混じったＴシャツ、下はデニムのショートパンツ。パンツにした理由は動きやすさを重視した結果だ。彼女は他に色違いのブリーツスカート二着とＴシャツ三枚を持ってハルの前に立つ。

「おまたせ。どうかね。」

鈴花はハルの前で軽くポーズを取ってみる。その姿を見たハルは呆れ顔で何度か頷いた。彼女は店員に、今着ているものはこのまま着て帰ると伝える。すると、服から値札類を取り外し、着てきた服を袋に入れてくれた。二人は会計を済ませるためにレジに向かう。しかし、ここで問題がある。そもそも彼女はお金を持っていない。それでは誰が出すというのだろうか。

「これをお願いします。」

店員が会計を伝えるとハルがお金を出した。鈴花はすぐにそのお金を見て本物かどうか確認する。紙幣にはしっかりと透かしが入っていて、どう見ても本物だった。彼は感嘆する彼女の手からお金を取り上げると店員に渡した。金額ちょうどで支払い、レシートと袋に包んだ商品ももらう。そして、二人は店を出て歩きだした。

「なんで、どうやってお金を出したの。」

鈴花はハルに聞く。彼女にとってハルがお金を出すこと自体が不思議でならない。何故お金を持っている。何故それがここで使える。いや、お金までも黒い本が見せているものなのかもしれない。

鈴花は次に別のお店で下着類を選んだ。やはりまわりがあつても中身が無ければ意味が無い。選んだ下着類をレジに持っていく。今回もハルがお金を出した。選んだ下着を彼に見られるのは恥ずかしいが、この際仕方が無い事とした。彼女は新たな袋を持って店を出

た。対象が服のためか、体積が大きい割に重さはほとんど無い。そのため、複数持っていても気にならなかった。

鈴花たちは次に地下へと降りて食品の調達を開始する。ここでも周りには主婦や子供が沢山居た。彼女は保存の出来るものを中心にかごに入れていく。少なめに購入して、またあとで買いに来るなど面倒だ。彼女が新たな品物を入れたとき、彼女の手の上に沢山のお菓子が投下された。彼女はびっくりして手をひっこめる。見れば、ハルがお菓子を持ってきたようだ。

「菓子類は賞味期限が長めだからな。それに甘いものは必要だ。」
鈴花はハルが持ってきたお菓子を見るとスナック菓子やクッキー類があつた。小腹が空いたときに食べるのには良さそうだ。しかし、その中に乾パンが無い。非常食ならこれは欠かせない。彼女は菓子類のコーナーに向かう。そして、缶入りの乾パンをかごに入れていった。

鈴花は改めてかごを見てみた。今や二つのかごがほぼ満杯となっている。缶類、麺類、菓子類といったところだ。

「そうだ。飲み物も。」

鈴花はカートを押してペットボトルが置かれているコーナーへ向かった。食品が重いためか、カートを押すために力を使う。普段の母親との買い物でもここまででは買わないだろう。ハルが先に向かい、適当な清涼飲料水を箱ごと持ってきた。箱を軽々と持つ姿はなかなか頼もしい。

鈴花たちはレジで会計をした。ここでもハルが取り出すお金を用いて支払いを済ませる。ふと彼女は気になった。ハルが使えるお金はいくらぐらいなのだろうか。

鈴花はかごに入った品物をビニール袋に入れていく。缶類がぶつかって金属音を響かせる。品物を全部袋に入れて手に持とうとした。しかし、持ち上がらない。缶類ばかりが袋に入っているためか、彼女の筋力では持ち上がらないようだ。

「じゃあねえな。」

ハルはそれだけ言うと、食品の袋を軽々と持ち上げる。次の瞬間には、彼の手にあった袋はどこかへ消えてしまった。

「黒い本と一緒に保管しといてやる。ほら、それもだ。」

ハルは鈴花が持っている服が入った袋も一緒に消してしまった。彼の話では黒い本と同様に必要なときは出してくれるらしい。全く、ハルの体は何で出来ているのだろうか。興味深いところだ。

鈴花たちは手ぶらで食品売り場を後にする。そして、階段を上って店の外へ出た。

鈴花は歩き出したが、ハルがついてこないことに気がつき振り返った。彼はじつと空を見ている。彼女はハルの横に立ち、彼の見る方向を見た。しかし、特に変わったものは見えない。

「来るぞ。」

ハルは黒い本を取り出し、鈴花に差し出した。彼女はすぐに本を開く。自動的にページがめくれ、何も書かれていないページに絵が現れ始める。絵が完全に表示されると、横に文字列が表示された。絵はヒトデのような星型の姿をしている。ネビュラとは違い、まるで空飛ぶ円盤のようだ。円形では無く星型である点が違うが。

鈴花は空を見る。ビルの影から、絵と同じ物体が現れた。

「^{タニス}Tanithだ。」

タニスと呼ばれた星型の物体、その下部の一点が光り始めた。

鈴花は何かと思い、よく見ようとした。すると、ハルは彼女の腕を思いつきり引つ張る。彼女はその力でバランスを崩し、そのまま地面に倒れた。その直後、彼女が居た場所に光の線が走る。光の線が走った場所はまるで大きな電動カッターで切ったかのように綺麗に線が入っていた。彼女は目を見開く。

「私を真つ二つに切ろうつていうの。」

鈴花は立ち上がり、タニスを見る。その下部が再び光り始めていた。

第十六話 切り刻む光

第十六話 切り刻む光

タニスの下部から再び光の線が発射される。鈴花は横に避けると走り出した。走りながら黒い本を見る。ページには既に倒し方が表示されていた。そこには数式とその式と答えを書く場所が記されている。

「掲示板。なんで掲示板なのよ。」
式と答えを書く場所は掲示板。何故かはわからないが、とにかく掲示板に書けということらしい。

鈴花は道路を渡って近くの駅へ向かう。駅なら掲示板があるはずだ。

鈴花は駅へ続く階段を上り始めた。橋上駅のためか階段を上った先に駅がある。すると、光の線が目のある階段と通路の境目を勢い良く切った。このままでは階段が切り離される。彼女は必死に階段を上った。

あと少しで階段は終わる。そう思った直後、鈴花の体が降下する感覚を味わった。階段が落下し始めたのだ。彼女はそれを脳で理解すると反射的に目の前のある通路へジャンプした。ハルは彼女の手を引っ張り、通路上へ着地させる。ほぼ同時に背後で大きな音がした。彼女が振り向けば地面に砕けた階段があつた。一緒に落ちたら怪我は免れなかつただろう。上空を見ればタニスがこちらに近づいてきている。彼女はすぐに駅に向かって走った。

鈴花はタニスから放たれる光線を避けながら駅構内に入った。通路の片側は壁になっていて、もう片側はガラス張りになっている。ここには大きな掲示板がある。それにタニスが通路と同じ高さに降りてこなければ何処にいるかはわからないはずだ。掲示板の前に着くと、張られたポスター類を引き剥がす。ポスターの上から書いて

は掲示板に書いていたとは言えない。破く行為に罪悪感を覚えたが、そんなことはみんな後回しだ。

鈴花は早速ポケットからチョークを取り出し、本のページに書かれた数式とその答えを書いていく。今回は足し算、引き算と掛け算だ。このままだと割り算も出てくるだろう。なぜ計算をさせるのだろうか。

数式は前回同様十個ある。定数は一桁から三桁。それに加えて足し算、引き算と掛け算が使用されている。掛け算はある数を何倍かするものだ。故に、掛け算の式では足し算や引き算に比べてさらに計算時間がかかると予想される。

鈴花は二問目を終えて三問目の式を書き始めた。その視界の端、通路の出入り口付近に光の線が見えた。彼女はその方向を見るが、線はすぐに消えてしまった。見間違いだろうか。鈴花は一呼吸の後、再度掲示板を向いて式と答えを書いた。

「書きながら聞け。あいつは俺らごとく輪切りにする気だぞ。」
ハルの声が背後から聞こえてくる。再度光の線が見えた方向を見ると、天井から床に向かって光の線が降りていく。まるで巨大なホールキーを切り分けるが如く、ゆっくりと通路を切っていく。しかし、二箇所以上を切っても通路は落下しない。構造上切っても落下しないようになっていられるのかもしれない。

「ふ、ふざけないでよ。」
鈴花の叫び声が通路に響く。光の線はコンクリートを容易く切る。人間なんて容易く真つ二つだろう。彼女はすぐに残りの式を書き始めた。

鈴花が五問目を書き終わるころには光の線がすぐ目の前まで来ていた。彼女は答えを書き終わると、近くまで来た光の線をじつと見た。

鈴花は光の線が床に消えると切れ目を飛び越えて既に切られた方へ移動する。ハルも一緒に移動した。振り返り反対側の通路を見ると、目の前に光の線が降りてくる。単純な行動だが、これで光線を

避けることが出来た。よく見ると、光の線が通路を切る速度は遅く、切る間隔は広い。彼女は反対側の通路を未だ輪切りにする光の線を横目に問題を解いていった。

六問目を書き終え、七問目の式を書き始める頃には光の線は反対側の出入り口に到達していた。

「ハル。タニスの攻撃見といて。」

鈴花は数式を書きながら言う。相手はさっきの攻撃方法で彼女を倒すことはできなかった。さて、次はどうするのだろうか。

「分かってるよ。俺だって無駄に居るわけじゃないんだ。」

鈴花は背後から聞こえる声に押されて、数式の解答を早める。七問目は三桁の掛け算。別途計算しなければ解けない。鈴花は素早く空いている部分に計算式を書いていく。

「鈴花。来たぞ。」

鈴花はハルの声で周りを見た。窓の外に見える大きな物体。タニスだ。その下部が光り始める。彼女はすぐに残りの計算をして答えを書く。早く書き終わらそうとしたためか最後は殴り書きになると、書き終わるとほぼ同時に体が浮く感覚を覚えた。驚き周りを見ると、足元を光の線が通っていく。縦で駄目なら横に切ろうということだろうか。そこで初めてハルが彼女を抱えて飛んでいることに気がついた。

「お前が死んだら困るんだよ。」

ハルは鈴花を重そうにしているわけではなく、どちらかといえば光の線に気がつかなかった彼女を怒っているように思えた。ハルは光の線が通り過ぎると彼女を床に降ろす。タニスを見れば、再び光の線を出そうと下部を光らせていた。彼女は反対側の出入り口に向かって走り出した。ここにこれ以上居ては不利だ。どこか別のところが無いか考えた。そこで、ふと彼女は思い出す。ここは駅前、だとしたらすぐ近くに大学がある。大学があるなら掲示板もあるはずだ。

「大学に行くわ。」

鈴花は背後に居るはずのハルに言う。彼女は光の線を避けながら階段を駆け下りた。道路を渡って、正門から大学内に入る。

「あつたぞ。掲示板だ。」

目の前に掲示板があつた。しかし、外からみえる場所にあるため、安心して計算できない。

「他、他に無いの。」

鈴花はそう言いながら素早く周りの建物を見る。しかし、良さそうな掲示板は見当たらない。周りの建物に近づき中を覗いてみるも掲示板らしきものは無い。彼女たちは仕方なく木々が囲む広場を抜けてコンクリートで固められた大きな建物に入った。入った理由は他の建物に比べて窓が少なく、外から見えづらいつつ思ったからだ。

決してこの中に掲示板があると確信したわけではない。ただどこかタニスに見つかりづらいつつ入ったところに入らただけ。中に入ると二階天井部分に天窓が見えた。すぐに振り向き、外を見る。広場の木々のせいかわりに地上近くにタニスは見えない。

「おい、ここに掲示板があるぞ。」

鈴花はハルの声のする方向へ向かう。すると、複数の掲示板が見つかった。この建物の中にも掲示板があつたのだ。しかし、すべてガラスで覆われている。これでは書けない。どうしようかと考えたとき、再び体が宙に浮く。ハルが抱えていることはすぐにわかった。足元を光の線が通っていく。ただの光の線ならば特に何も無く地面に降り立てる。しかし、降りられない。降りられないほどの速度で光の線が移動しているのである。先ほどの光の線の移動がロールケークの切り分けならば、今回はハムを水平に薄く、しかも高速に切っているようなものだ。彼女はハルに抱えられたまま上昇していく。しかし、天窓がある位置までしかいけない。周りに各階の通路と部屋が見えるが、それさえも光の線は切っている。

鈴花とハルはついに天窓に到達する。彼女が天窓を叩いてもびくともしない。簡単に割れるような窓では実用面で困る。

「お願い割れて。助けて。」

下からは光線が建物をスライスしてきている。触れれば彼女やハルも見事スライスされてしまうだろう。通路に入ってから階段を上ることが唯一助かる方法。しかし、今からでは階段に到達する前に光の線に触れることは確実だ。

「仕方ないな。突破するぞ。」

鈴花はハルの声が聞こえた瞬間、体が重力に従って落下する感覚を覚える。落下してはスライスされてしまう。彼女は叫んだ。その体を何か不透明なものが包み込む。直後、体に激痛が走った。

体の痛みが引くとともに視界が開け、鈴花は建物の一階に倒れている事が分かった。見上げれば光の線がさらに上に向かって建物をスライスしている。再び激痛が走った。すぐに体を見る。しかし、どこか切れたわけでは無いようだ。光の線を突破したのに何故切れていないのだろうか。

「痛みは感じただろうが、怪我はしてないはずだ。」

鈴花の前にハルが現れる。ハルが守ってくれたのだろうか。まさか、どうやってやったのだろうか。しかし、今はその質問をしている暇は無い。鈴花は掲示板に向かう。光線でガラスもスライスされたためか、何かで軽く叩けば割れそうだ。彼女は周りを見る。すると、金属製のゴミ箱があった。ゴミ箱をひっくり返して中身を出すと、掲示板のガラス目掛けてゴミ箱を振り下ろす。直後、ガラスが粉々に割れる。何度か叩くとガラスの破片が周りに飛散る代わりに掲示板からガラスの部分が除かれていく。残りの数式を書けるぐらいにガラスが割れると、鈴花は黒い本を見て残り問題を書き始めた。頭上では未だ光の線が建物をスライス中だ。

「痛い。」

鈴花は勢い余って、未だ取り除いていないガラスの部分に触れて手を切ってしまう。手から血が流れ出すが、それさえも今は気にしていられなかった。ガラスを割った掲示板で書いたのは二問。彼女は残り一問を書くために他の掲示板のガラスを割ろうとした。その体が宙に浮かぶ。再びハルの登場だ。今回はどんな状況かと周りを

見れば、彼女の目が大きく開かれる。タニスが天窓を光線できり貫いているのである。直後一階に落下する天窓。周囲に飛び散るガラスの破片。上空からゆっくりと降りてくるタニス。もう笑いたくなるほどの状態だ。

ハルは彼女の体を抱えたまま、建物から素早く出た。それを光の線が追いかける。彼は鈴花を抱えたまま広場を抜けて来た道を戻った。そして、見えてきたのは外から見える掲示板。その掲示板にまっすぐ進んでいく。

鈴花は近くにあったゴミ箱を掴むと、宙に浮かんだままガラスに力いっぱい叩き付けた。ガラスは音を立てて割れる。本を見て式を書こうとしたとき、新しい式がページに浮かび上がった。それは他の式に比べれば凄く簡単な計算式。良くわからないが素早くその式書いて答えを書いた。直後、タニスが現れる。そのタニスの下部が光り始めた。しかし、すぐに光は消えてしまった。まさか、攻撃してこないのだろうか。

「タニス見といて。」

鈴花はゴミ箱でさらにガラスを割ると最後の問題を解いた。時間がかかったが、邪魔されること無く解くが出来た。彼女はタニスを見る。近くに居るものの。未だ下部は光らない。まるでガス欠のようにも見えた。ガスを使っているとは到底思えないが。

鈴花は黒い本を見た。すべての数式と答えを書いたのだ。あとは最後の指示があるのなら従うまでだ。しかし、書いた数式のうち一つが光らず、一番下に赤字で「光の無い式について、再度式と解答を記述せよ」と表示される。つまり答えを間違ったということだ。光っていないのは七番目の式。すぐに計算をしなおす。三桁の掛け算など小学生以降あまりしていない。これ以上間違うと脳が暴走しそうだ。

「これで、おわり……。。」

鈴花が答えを書き終わった直後、ハルが彼女の体を抱えて飛ぶ。タニスを見れば光の線を彼女たちに飛ばしている。今や光の線は縦

横無尽に移動している。

鈴花は飛びながら黒い本を見る。赤い文字は消え、すべての数式が青白く光った。その後、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かび上がる。

それは、本を空に投げろという事だった。

鈴花は本を閉じると、勢いをつけて空に投げた。黒い本は空中で静止して、黒く丸い塊へ変化する。その後、黒い塊はタニスに向けて黒い何かを飛ばし始めた。黒い何かは柔らかく、タニスの体に次々とくっ付いていく。ただくっ付くだけでは無く、黒い何かはくっ付くとタニスの体に付きながら移動を始めた。まるで意思を持った生物に見える。見ていると気持ち悪い光景だ。ついには光線を出す下部を黒い何かが覆ってしまった。彼女たちは光線が止まったため、地面に降り立つ。しかし、目の前の光景から目が離せない。黒い塊を見れば先ほどよりも小さくなっている。タニスを見れば既に本体の色が見えなくなり、黒い物体と化していた。タニスが暴れているのか激しく動いている。

すべての黒い塊が黒い何かとしてタニスにくっ付くと、少しずつ黒く覆われたタニスが小さくなっていく。最終的には元の黒い塊に戻り、消えてしまった。

鈴花の目の前に黒い本が出現する。彼女は本を手にとると開いた。自動的にページが移動してタニスの絵が描かれているページになる。そして、右側にある文字列の一番下に赤い文字が表示された。つまり、倒したということだ。

「倒せたみたい。危なかったわ。」

鈴花が黒い本を見れば自動的にページがめくれて何も無いページが表示される。これは敵を倒した後に必ずする事なのかも知れない。鈴花は大きく息を吐くとその場に座り込んだ。緊張の糸が切れたのかも知れない。

「この本。一体何なんだろう。」

黒い本は何も言わない。いや、何も言えないのかも知れない。

第十七話 水攻め

第十七話 水攻め

ドアを閉める音と共に鈴花は玄関に倒れこんだ。何時来るか分からない敵をいちいち気にしていたら身が持たない。タニスは倒すことが出来たが、途中で問題を一問間違ったのは失敗であった。

「ほら、ソファにでも倒れこんでろ。」

鈴花はハルの言葉でゆっくりと起き上がる。足取りがおぼつかないままリビングにあるソファに倒れこんだ。正直もう動きたくない。ハルはため息をつきながら取り出したのは複数の袋。これは服が入った袋である。彼女は頭だけ上げて袋を受け取ると再び頭をソファにくっつけた。彼女の位置からは見えないが、今ハルは冷蔵庫に食品類を入れているようだ。

ハルは人間のようで人間では無い存在。タニス戦の後、鈴花は建物を高速にスライズする光線をどうやって避けたのかについてハルに聞いてみた。しかし、彼は教えてくれなかった。ただ、「お前は知らなくていいんだ。」と言うばかり。

鈴花はハルに空腹を訴えながら足をばたつかせる。彼女はハルがどんな物が食べたいかと聞いてきたので、冷たい物と言った。すぐにダイニングで物をあさる音が聞こえてくる。冷たい物。さて、どんなものが出てくるのだろうか。

しばらく待つと、ハルの声がダイニングから聞こえてきた。鈴花は彼の声でダイニングに移動する。横になっていたためか少しは動けるようになっていた。テーブルの上にはそうめんとツナを載せた皿があった。ツナは今日買ってきたものだ。しかし、そうめんは購入していない。何処から出てきたのだろうか。彼女は座り、そうめんの出所を彼に聞いた。答えはこの家に残っていたとの事だ。去年の分が残っていたか、今年のために購入しておいたものだろう。そ

ここで彼女は思った。だとしたらそうめんもお店に売っていたのではないだろうか。ハルに聞けば、多分売っていたとの事だ。今回購入した分で終わればよいが、終わらなければ今度はそうめんを探してみよう。

鈴花は挨拶をして、冷たい麺とツナを食べ始めた。冷たくて細い麺はすぐに胃の中に納まる。食後の挨拶を済ませるとリビングに戻った。しばらくするとハルが後片付けを済ませてリビングに来る。

「何する。また勉強でもするか。」

ハルの言葉に鈴花は首を振る。お腹がいつぱいの状態ではあまり物事を考えたく無い。彼女はしばらくこのままで居ると告げた。ハルもソファにもたれかかる。

しばらくの後、鈴花はソファから勢い良く起き上がった。

「お風呂入ってくるわ。」

鈴花は服が入った袋を持って階段を上り、二階の彼女の部屋に入る。机にチヨークを置くと、昨日来たパジャマと新しいパジャマと下着類をもって脱衣所に向かった。昨日来たパジャマは今日着た分と合わせて洗濯物にまわす。お風呂から出るとリビングに戻った。

「洗濯物が溜まっただろ。洗って乾かしといてやる。」

鈴花はハルの発言に少々恥ずかしさを覚えた。しかし、ここでは彼以外に見られることも無いので良いと考えることとした。

彼女はハルに就寝前の挨拶を言うのと二階の彼女の部屋へと戻る。

そのままベッドに倒れこんだ。彼女は昼間の疲れからかそのまま眠ってしまった。

どこかで声が聞こえる。誰の声だろう。何度も聞くと思い出してくる。これはハルの声だ。ハルの声、ハルの……。

そこで鈴花は目を覚ました。すぐ横にはハルが居る。険しい表情だ。

「寝ている間に現れやがったぞ。さっさと準備しろ。」

ハルの言葉では敵が現れたということらしい。けど、歯磨きぐら
いはしたい。私は立ち上がると部屋を出て階段を下りた。背後から
ハルの声が聞こえたような気がしたが、何を言っているのか聞き取
れなかった。

鈴花が階段を何段か降りたとき、足に激痛が走る。

「い、痛い。」

鈴花は突然の痛みに叫びながら足を引っ込めた。そのまま体のバ
ランスを崩して階段に座り込む。良く見ると、階段の途中まで水が
はっている。つまり、浸水しているのだ。しかし、先ほどの痛みは
どこから来たのだろうか。彼女は水に触れようとする。

「やめろ。水に触るな。」

鈴花はハルを見るが、手は水に触れてしまう。その瞬間、彼女の
手に衝撃が走りすぐに手を引っ込めた。水に触れたときの感覚では
無い。まるで、凄く強い静電気に触れたような感覚だ。水なのに電
気のような感覚。全くもってよくわからない。彼女はふと違和感を
感じて水面をよく見る。少しずつだが、水面が上昇していることが
わかった。

鈴花は部屋に戻ってすぐに着替えた。

ハルの話では、彼でも知らないうちに来たらしい。彼は水が普通
の水で無いことを確認すると、昨日買って来たものや必要そうなも
のを全部自分の体の中に保管したとの事だ。昨日洗濯した服につい
ても同様らしい。もし、回収していなかった場合、現状では取りに
行くことができない。

鈴花は先ほどまで着ていたパジャマと今後着る服をハルに投げる
と、机の上に置いたチョコレートをポケットに入れる。机を見るとそこ
には家族の写真があった。彼女自身が写っているわけではない。し
かし、このまま水にのまれるのも良くない。彼女は写真を写真立て
から取り出すとチョコレートとは別のポケットに入れた。

鈴花は窓を開けて外を見る。家の中と同様に他の家も浸水してい
た。ここは今や浸水した町だ。道路を見れば見たことの無い魚が泳

いでるのが見えた。よく分からないが、この水とともに現れたものに違いない。

「来たぞ。」

ハルの声に部屋のドアを見れば、ゆっくりと水が流れ込んできている。もうすぐ、ここも水の中なのかもしれない。すると、彼女の背中にハルがくっついた。すぐに体が浮かび上がり、部屋から出て屋根へ上る。

ハルは鈴花を一旦降ろすと、黒い本を渡した。彼女はすぐに本を開く。新しいページには既に絵と情報が表示されていた。

「^{ヴェニス}Veniceだ。」

ハルが名前を読み上げる。鈴花はヴェニスという名前について考えてみる。ヴェニスというとヴェネツィア、水の都。彼女は町を見渡す。家々が水に浸り、まるで大洪水の後のようだ。しかし、水は濁っておらず澄んでいる。おかげで見たことの無い魚が水の中を泳ぐ様が良く見えた。

「今ここは水の都なのね。」

鈴花は本のページをめくる。そこには敵の倒し方が書かれていた。これが、触れることのできない水と見たことの無い魚を消す方法だ。

第十八話 浸水する世界で

第十八話 浸水する世界で

鈴花が本に書かれた文章を良く読もうとしたとき、背後で何か音がした。鈴花はすぐにその音のするほうを振り向く。その体に、水の塊がぶつかる。直後彼女の体に衝撃が走り、その場にうずくまった。

ハルは彼女の体を抱えて飛ぶ。彼女が屋根を見るとそこには水が飛散っていた。同じものをもう一度撃ってきたようだ。しかし、何処から撃ってきたのだろうか。周りを見てもそれらしいものは無い。水の中を泳ぐ魚が水の塊を飛ばしてきたのだろうか。とにかく、今はどこか安全なところで休みたい。

「おい、しつかりしろよ。」
ハルが鈴花に声をかけてくる。彼女は無言で頷く。あまりしゃべりたくない。

鈴花は家から近い四階建てのビルの屋上に降ろされた。他の建物よりも高いため、水面からの距離もある。彼女は屋上に寝転がり、空を見た。今日は晴れていて、太陽も出ている。太陽の光でこの水がみんな蒸発するのなら本当に楽なのと思った。

「そんな事している暇は無いぞ。早くしろ。」
彼女は頷きながらゆっくりと立ち上がり、本の倒し方のページを見た。今回も十個の数式が書かれている。前回に割り算を加えた四則演算のようだ。割り算が加わった点が前回よりも厄介な点だ。しかし、書く場所を指定していないため、今回は楽かもしれない。なぜなら、水面から距離のあるここですべて書いてしまえば良いのだ。鈴花は早速一問目から順に間違わないようにしつかりと書き始めた。足し算、引き算は何度も計算しているためか、素早く答えを出せるようになっていた。慣れとは面白いものだと思う。掛け算、割

り算についても単純な計算は早く解くことが出来た。

鈴花が四問目の答えを書き終えたとき、どこからか声が聞こえてきた。

「だれか、誰か助けてくれ。」

鈴花は立ち上がり、ビルから周りの建物を見る。近くに居るのなら、ここから見えるはずだ。案の定、少年が近くの家の屋根に居た。周りを水に囲まれて動けなくなっている。よく見れば先ほどよりも水位が上昇しているようだ。彼女はすぐにハルを見る。

「本が見せてるわけじゃない。本物だ。」

鈴花はハルに彼を助けるように言っていると、式の計算に戻った。一問を解き終わる前に、ハルは少年を屋根の上に連れてきた。彼女は答えを書きながら礼を言う。すぐに背後から声が聞こえたが、気にしないようにした。彼女はそんなに暇じゃない。

鈴花は六問目の式を書き始めると、すぐに手を止めた。そういえば、ハルはこの世界にはもう誰も居ないと言っていた。しかし、すぐそばに一人の少年が居る。この世界の人間が居たのだ。これはどういう事なのだろうか。

「おい、そいつの邪魔はするな。」

鈴花はハルの声に振り向く。すると、目の前に少年が立っていた。彼女よりも少し年上のように見える。見たことの無い顔で、誰なのかさっぱり分からない。

「荒谷さんじゃないか。」

少年はうれしそうに近づき、その場にしゃがみこむ。鈴花は彼に首をかしげる。何故彼は彼女の名字を知っているのだろうか。

「あなた、誰。」

少年は鈴花に必死に自分の名前を言う。彼は真部宗太と言うらしい。彼女は今まで生きてきた中でそのような名前の人物と知り合ったことは無い。

「あの、人違いでは。」

鈴花はそう言つと書きかけの式を書き終わらせた。宗太は彼女の

言葉にさらに返してくる。彼女は反応せず、代わりにハルが彼を止めようとす。背後から聞こえてくる声。計算に邪魔で仕方が無い。「二人ともちよつと黙つてて。」

鈴花は二人を見ず、計算しながら言った。声が大きかったのかすぐに静かになる。彼女は六問目を終えて七問目の式を書き始めた。式を素早く書き写し、計算を始める。しかし、背後の宗太がしゃべり出した。慌てふためく声、それを黙らせようとすハル。慌てるのは構わないが、邪魔はしないで欲しい。彼女は軽く頭をかきながら答えを書く。彼女はそこで一呼吸する。あと三問だ。

鈴花はチョークを持ち直し、黒い本を片手に持つ。そして、八問目の式を書き始めた。その直後、彼女は自分の体が浮く感覚を覚える。すぐにハルが抱えているのだと理解した。しかし、何も言わずに飛ぶほど緊急だったのだろうか。彼女は周りを見る。すると、ビルにくる前よりもかなり水位が上がっていた。そしてビルの周りには見たことの無い魚が居る。

「あの魚が水を飛ばしてきやがった。」

ハルの話では、鈴花が計算に集中している間に魚たちが集まり、水を飛ばしてきたらしい。そのため、ハルは急いで彼女を抱えてビルを離れたとの事だ。彼女は屋根の上で受けた水の塊も魚が飛ばしてきたのだらうと理解した。宗太はというと、ハルの両足を必死に掴んでいるようだ。彼女の背後にハルが居るために宗太は見えない。そこで、ふと彼女は思った。ハルの足を掴んでいるということは、彼女のスカートあたりに顔があるのではないだろうか。ためしに足を後方に曲げてみる。すると彼にぶつかった。彼は何か言っているようだ、聞かないようにした。

「ハル。真部って人が変な動きをしたら、そのまま蹴落として良いから。」

鈴花はあえて冷たく言い放つ。変なことをしたら彼女も蹴落とすだらう。彼女の言葉に宗太と何度か言い争う。結果彼は納得し、名前を宗太と呼ぶように言ってきた。よく知らない相手の名前を呼ぶ

気にはなれないが、呼んで欲しいのなら呼んであげよう。

「鈴花。これからどうする。昨日のビルに行くか。」

ハルは駅前に向けて進む。昨日洋服や食品を買ったビルだ。しかし、もつと近くに高いビルがある。

鈴花は西を見る。そこにある高いビル。大学にある二十階建ての校舎だ。この地域ではもつとも高い建物だと思われる。彼女はハルに行き先を告げる。ハルは進路を変えて、一直線に大学へ向かった。大学の敷地内に入ると、昨日走り回った校舎が見える。原型をとどめているが、地震があつたら簡単に崩れてしまうだろう。その隣に二十階建ての校舎がある。ハルは屋上に向かって高度を上げていく。

「うわ。高い。」

地上を見れば遠く。落ちたら即死だろう。さらに高度を上げて、校舎の上に到達する。屋上に降りると、周りを見渡した。遠くに山が見える。あれは方向からして富士山かもしれない。空を見上げれば太陽が手に届く近さに感じた。

「悪いがそういうのは終わってからにしろ。」

鈴花はハルの言葉を聞いて我に返ると、早速残りの三間を書き出した。どう書いたとしても水位は上昇を続ける。水位が彼女たちの居る高さに到達するまでに書き終わらなければさらに高い建物を目指すしかない。しかし、これ以上高い建物はこのあたりには無い。他の地域に行くとしても時間がかかる。ここで終わらせなければならぬのだ。コンクリートの上に音を立てながら白い線を付けていく。九問目の問題を書き始めたとき、手に振動が伝わってきた。

「おいおい、魚どもが集まってきやがったぞ。」

ハルの声が聞こえる。彼の姿は見えないが、屋上から地上を見下ろしているのだろう。しかし、魚が集まったからといってこのような振動を発生することが出来るのだろうか。

手に伝わる振動に邪魔されながら、式と答えを書いていく。振動はさらに強くなり、建物が揺れだす。ここまでするとまるで地震だ。

高い建物は地震の時の揺れ方が気持ち悪い。今もそのような状態だ。揺れが苦手な彼女は吐きそうになりながらも最後の式を書き、答えを計算する。彼女は自分の呼吸が荒くなっているのがわかった。

鈴花は最後の答えを書き終えると、堪らずその場に寝転がる。ハルや宗太が駆け寄ってくるのが分かったがそれ以上気にしていられない。その状態で黒い本のページを見た。すべての数式が青白く光る。その後、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあがった。今回も空に投げるというお達しだ。

鈴花は起き上がり、黒い本を両手で空に投げた。投げた本は空中に静止する。そして、黒い本は黒く丸い塊へと変化した。その直後、黒い塊は弾けて細かい粒となり、周囲に広がっていった。彼女は立ち上がるうとする。しかし、あまり体力が残っていないのなかなか立たない。その体を宗太が支える。ハルも彼女の前に来た。

「大丈夫か、鈴花。」

鈴花はハルの言葉にただ頷くだけだ。今彼女を支えている宗太という人間はよく知らない。しかし、彼女の名前を知っているということはこの世界の彼女を知っているということなのかもしれない。彼女はポケットから写真を取り出す。家を出る前に持ってきたものだ。それを彼に見せた。

「あなたが知っているのはこの子なんですよ。」

鈴花は宗太に写真を渡すと、彼から離れて周りを見ようとすると、彼女の背中になにかが付いた。首だけそちらを向ければ、ハルが体を支えているようだ。

「ここからI can flyされたら困るからな。」

鈴花は英語の部分だけ妙に発音の良いハルに力なく笑う。彼女はそのまま手すりまで移動した。

屋上から見える世界に彼女は何も言えなくなる。見渡す限りすべての地面が黒いのだ。真っ黒い地面の上に校舎や商業ビル。元は触れることのできない液体だということはすぐにわかった。しかし、あえて黒くしなくてもと思う。敵を吸い込むときや取り付くときは

何時も黒い。たまにはもつと明るい色にならないのだろうか。
鈴花は手すりに体重をかけながら、元に戻る世界を眺めた。

第十九話　この世界の人間

第十九話　この世界の人間

鈴花を呼ぶ声が背後から聞こえてくる。彼女は振り返り、声の主を見た。

「何か用。」

声の主は宗太であった。鈴花は手すりに寄りかかりながら彼を見る。彼の手には先ほど彼女が渡した写真がある。

「さつきは焦っていて良く見ていなかったけど。よく見れば写真の荒谷さんと君は別の人みたいだ。」

宗太は写真の子と鈴花を区別することが出来たようだ。彼女はその点に安心した。彼がもしこちらの鈴花と仲良しならば今後色々面倒なことが起きるに違いない。いや、既に起きているのかもしれない。彼女は宗太から写真を受け取るとポケットにしまいこんだ。

鈴花はその場に座り込み、宗太を見る。そして、彼女は口を開いた。

話した内容は、鈴花の名前と、彼女がこの世界に元から居た人間ではないこと。ハルが人間では無いこと。彼は彼女が持つ黒い本の番人であり、彼女を守る者であること。この世界に居る敵と呼ばれる対象を倒すには彼女と黒い本が必要であること。そのために別の世界から彼女が呼ばれたこと。彼女はハル、黒い本や自分をこの世界に連れてきた者のことはよく知らないということ。彼女がすべての敵を倒せば帰ることが出来るということ。敵の数は把握して居ないこと。困ったときはハルがなんとかしてくれること……。

「あまりべらべらと喋るな。こいつはこの世界の人間だ。外部の俺たちと会ってちゃいけないんだよ。」

ハルの言葉が鈴花の口を塞ぐ。彼女はそれ以上何も言わないことにした。すると、目の前に黒い本が現れた。彼女は黒い本を開いて

敵を倒した事を確認する。確認が終わると本を閉じてハルに渡した。ハルは受け取るとすぐに本はどこかへ消えてしまう。その点に宗太は驚くが、彼女はこれが当たり前なのだと言った。いちいち驚いていても疲れる。彼女はすぐに家に帰ることにした。

ハルは鈴花に近づき、彼女の背中に付いた。彼女は宗太を見る。

「あなたも私と一緒に来たほうがいいわ。一人で居たら今度こそ死ぬかもしれないから。」

鈴花の言葉に宗太は目を伏せた。ハルを見れば彼を連れて行きたくないと言う。しかし、このまま置いていけばどこかで敵に殺されるかもしれない。未だ、元の世界に帰ることが出来ないのだ。今後もし敵は出てくるのだらう。彼女がハルを見れば、彼はじっと宗太を見ていた。

「……仕方ない。」

ハルは鈴花を抱えたまま浮かび上がり、宗太に近づく。彼がハルの足を掴むと、家へ向かって移動を始めた。

鈴花たちは彼女の家に到着する。

「早く入りましょう。外は暑いし、お腹空いたわ。」

鈴花は玄関のドアを開けて、ハルと一緒に中に入ろうとする。そこでふと振り返る。宗太は何も言わず彼女の家を見ている。

「どうしたの。入らないの。」

宗太は鈴花の声に我に返ると、玄関に居る彼女を見た。宗太は彼女の家に入ったことが無いらしい。知っている相手の家だけに入りづらいのかもしれない。

「入りたくなければ、好きにすればいいわ。」

鈴花は宗太にそれだけ言うつと玄関のドアをしめようとした。彼女がドアを締め切る前に宗太の手がドアを掴む。彼はドアを開けて体を家の中に入れてきた。彼が家に入ると天井につるされた照明に驚く。

「なんで、灯りが。電気なんて通っていないはずなのに。」

その点について鈴花は宗太に説明する。これもハルと黒い本の力

だ。

鈴花は家の中を見渡す。どこをどう見ても先ほどまで水に浸かっていたとは思えない。水に見えて水じゃなかったのだ。

鈴花はリビングに入り、ソファにダイブした。目を瞑り、ゆっくり息を吐く。ハルの声を聞くと、ハルは宗太を彼女の反対側のソファに座らせたらしい。その後、ハル自身は食事を作るために台所に行ったようだ。

「荒谷さんの家なのに彼女は居ないんだね。彼女も他の人たちと一緒に消えちゃったのかな。」

鈴花は目を開けて、宗太を見た。

「ねえ、彼女と宗太の関係って何なの。それと、消えちゃったってどういうこと。」

宗太は少し考えるそぶりを見せた後、ゆっくりと口を開いた。まず、彼とこの世界の彼女は友達同士らしい。それは彼の言葉を信じればの話だ。

宗太は次に、この世界の人々が消えた理由を話し始めた。ある日、巨大な生物がいくつも現れて、人々を次々に殺したらしい。殺した人間はすぐに跡形もなく消えてしまったそうだ。彼自身はその中を必死に逃げ続けたようだ。気が付けば、自分以外誰も居なくなり、生き延びた人を探して動き回っていたところを彼女たちに助けられたらしい。

「自分だけじゃなく、荒谷さんも一緒に連れて逃げればよかったのに。」

宗太は鈴花の言葉に少し声を荒げる。声に気づいてハルがリビングを覗いてきたが、彼女はなんでもないと返して返した。宗太は落ち着くと、彼女を見た。

「僕だつて一緒に逃げたかった。あいつらが現れたとき、彼女を探しにこの家に向かったよ。だけど、敵が僕の目の前に現れたんだ。なんとか避けて向かおうとしたけど無理だった。だから、僕は諦めて逃げたんだ。必死に逃げて、気が付いたら誰も居なくなっていた

んだ。」

鈴花は起き上がり宗太を見る。彼も彼女をじっとみた。先ほどの敵と戦っている中、彼は彼女を見つけたと思ったのだろう。彼が一緒に逃げたかった彼女を。

「飯が出来たぞ。」

ハルの声で二人はダイニングに向かう。テーブルの上にあるのはそうめん。昨日とは違って麺はザルに、汁は小さな器に入っている。三人は椅子に座り、挨拶をすると食べ始めた。二日連続そうめんであるがわがままは言えない。食事らしい食事が出るだけ良しとしたほうが良い。三人は食事を食べ終わると、ハルは食器の片付けを始める。鈴花が手伝おうかと尋ねるも、休んでいると言っただけだ。彼女と宗太はリビングのソファに座る。お互い何も言わず、結果彼女は横になって目を瞑った。

「隣座るぞ。」

気が付けば鈴花の隣にハルが居た。彼女はそれを確認すると再び横になる。ただ、今は休みたいと思った。もうあんなことはしたくない。まるで自分自身が単純な計算機になったような気分。そう、計算機みたいな。だけど、それをしないと彼女は元の世界に戻れない。良く分からないし、やりたくない。しかし、今はやるしかないのだ。彼女は起き上がり、頭を軽く掻く。

「勉強するわ。ハル映しといて、問題。紙とペンを取ってくる。」

鈴花は立ち上がり、二階に紙とペンを取りに行く。彼女の部屋は朝のままだった。水から急いで逃げたままだ。彼女は紙とペンを掴むとそのまま一階のリビングへ戻った。

しばらく続くペンが紙の上を滑る音。鈴花が宗太を見れば、実に暇そうにしている。

「家の中を探して面白そうなものを探してくれば。だけど、私が使っている部屋は入らないで欲しいわ。彼女の物があるし。」

宗太はゆっくりと立ち上がる。彼は鈴花から彼女が使っている部屋の場所を教えてもらうとリビングを出ていった。彼女はそれを確

認すると再びペンを走らせた。

それからどのくらい経ったか分からない。鈴花が顔を上げればいつの間にか目の前に宗太が居た。彼は何処からか持ってきた本を読んでいる。

「おい、こつちを見る。」

鈴花はハルの言葉ですぐに勉強を再開する。正直中学数学を数時間、数日ですべてまとめようなんてこと自体が間違っているような気がした。それですべて理解できたというならば彼女が天才か内容が薄いかのどちらかだろう。

変数と定数の入り混じる式をこの世界に来てからずっと見ている。そのためか、何時か夢の中に数式が出てくるのではないかと考えてしまう。彼女は自分が心配になった。

「今日はこれぐらいにしてよ。」

ハルはテーブルに張り付いた鈴花を見て何度か頷く。そして、テレビに映る問題を消した。

それから三人は夕食を済ませ、ハルの映し出す昔話を見る。時間はあつというまに過ぎて、お風呂に入って眠る時間となった。

「お風呂入って寝るわ。服出して。」

鈴花はハルが出した袋を受け取ると宗太を見る。そういえば、彼はどうしたらいいんだろう。彼女はハルを見た。

「ハル。宗太の事をお願い。」

鈴花はそれだけ言うのと脱衣所に向かおうとした。彼女はそこで立ち止まり、再度ハルを見る。

「宗太が覗き込もうとしたら縛り付けといて。」

鈴花はそれだけ言うのと脱衣所に入る。服を脱ぎ、お湯に触れた。鈴花にとって良く分からない事だらけだ。壁にもたれかかりながらも温かいお湯が体の表面を流れていく。何故、彼女はこんな事をしなきゃいけないんだろう。

「この世界って、何なんだろう。私って何なんだろう。」

そんな言葉がふと鈴花の口から出てくる。正直に思ったことだ。

なんで彼女がこんなことをしているのだろうか。教えてくれる相手が居ないことが辛い。

鈴花はお風呂から出ると、着替えて脱衣所を出た。すると、宗太が着替えを持って向かってきた。

「ちようどよかった。」

宗太はそのまま脱衣所に入る。鈴花はそれを確認するとリビングに戻った。

「宗太の着替えってどうしたの。」

ソファに寝転がっていたハルは起き上がり鈴花を見る。

「予想外だからな、この家にある男物の服を探して渡した。次に買い物に行くときはまともな服を買ってやったほうがよさそうだ。」

ハルの言うとおり、宗太が再びリビングに来たときの格好は見るからに中年。多分こっちの鈴花のお父さんの服なのだろう。突然来たのだから仕方がないと言えば仕方が無い。

鈴花は熱いお風呂に入ったためか、眠気がどこかに消えてしまった。これでは眠ろうにも眠れない。宗太もソファに座り、そのまま動かない。

三人がそれぞれソファに座ったまま、無言の時間が流れる。無言に耐えかねたのか、ハルが何かテレビに映すかと言ってきた。しかし、鈴花がそれを止める。これでは戦うか買い物以外はずっと家の中に居るようになってしまう。

「決めた。散歩に行く。」

鈴花は勢い良く立ち上がり、チヨークを持っていくか確認する。

もし、外に出ているときに現れてもこれなら焦らないで済む。正直相手は何時出てくるか分からない。それも察知するのはハルであって彼女では無いのだ。

「おいおい、こんな時間にか。構わないが。」

ハルもソファから立ち上がる。宗太を見れば、彼は座ったまま鈴花を見ている。彼だけ置いていくのはどうかと思った。

「宗太。一緒に行きましょう。」

鈴花は宗太に手を差し伸べる。彼は返事をするとその手を掴んで立ち上がった。

第二十話 平和な時間

第二十話 平和な時間

鈴花が玄関のドアを開けると、月の光が辺りを照らしていた。夜のためか涼しい。続いて宗太が靴を履いて出てくる。彼はしきりに自分の着ている服を気にしているが、彼女たちしかいないと考えられるのでそれほど気にすることも無いと思った。最後にハルが家の中の電気を消して出てきた。

ハルはドアを閉めると鈴花たちの上を飛ぶ。彼女は久しぶりにハルが飛んでいるように感じた。しかし、良く考えれば家の中でも良く飛んでいる。彼女たちの頭上を飛んでいるから「飛んでいる」と感じたのだろう。

鈴花はジャンプしてハルを捕まえようとした。ハルは彼女の手を避けると捕まらないようさらに上昇する。

「ちょっと。卑怯でしょうが。」

鈴花はハルを捕まえようと何度かジャンプしたが諦めた。ハルは彼女が諦めた事を確認するとゆっくりと降りてくる。

「こんな所に突っ立ってないでどこか行こうよ。」

宗太は既に歩き出していた。鈴花も追いついてその隣を歩く。ハルを見れば彼女たちの後方を飛んでいる。

鈴花たちはしばらく歩くと近くの公園に着いた。大きな木々が月の光から守るように公園を覆っている。覆っていることは構わないが、灯りが無いためか公園の中は真っ暗で何も見えない。この状態で踏み込むには度胸が必要だと思った。

鈴花はハルに明かりを点けるよう言う。ハルは彼女に面倒だと言いながらも公園の前に立った。すぐに公園内に明かりが灯る。彼女は公園に入りながらハルに礼を言った。

鈴花は夜の公園というのは一人で来るには危ない気がして一度も

来たことが無い。公園内は静かで虫一匹さえ居ないと感じた。暑い時期だというのに蚊も居ない。

鈴花は何か無いかと辺りを見回す。ここに来て何も無ければ家に居るときとあまり変わらないと思った。そこで、近くに砂場を発見した。道具も転がっていてすぐにでも遊べそうだ。

「そうだ。砂遊びしようよ。」

鈴花はうれしそうに砂場に走る。砂場に着くと宗太を見た。彼は戸惑っている。彼はこの歳で砂遊びなんて思っているのだろう。彼女は彼に近づき手を掴んだ。

「ほら、いいじゃない。私たち以外見てないんだし。」

宗太はしぶしぶ砂場まで来た。鈴花は砂場に置かれているスコップを彼に渡す。彼女も自らスコップをもって砂場を掘り始めた。特に何かを作るといいうわけでもなくただ砂場に大きな穴を作っていく。その時、ふと昔実家の砂場で穴を掘って居たことを思い出す。

「俺はその辺に居るからなんかあったら呼んでくれ。」

鈴花は夢中で掘るその合間になんとかハルの声が聞こえた。動作を止めてその声に反応する。ハルがどこかへ行った事を確認すると再び掘り始めた。掘り進めると湿った砂が現れる。手を入れればひんやりと冷たい。

「宗太。ここに手を入れてみて。」

鈴花は宗太に掘った穴に手を入れてみるように言った。彼はスコップを置いて、何かを探るように片手を入れた。すると、彼の表情に変化が起きる。

「冷たくて気持ちいいや。」

宗太は穴から手を引っ込めると自らのスコップで勢いよく掘り始めた。もっと深く掘って冷たさを感じたいのかもしれない。

掘るほどに増える砂の山。鈴花たちは両手が埋まるほどの穴を掘り終えた。それから掘り出した砂を使って山や町を作り出した。小さい頃とやっていることは同じだが、さらに細かく作っていく。奥から彼女たちが掘った穴を繋げた谷、砂の山、余った砂で作った町。

砂場一面すべてを使って出来た作品は破壊するには勿体無いものだった。

「砂遊びって意外と疲れるわね。」

鈴花は砂場の端に座る。砂や土が少々付くが、雨に濡れているわけではないので払えば大丈夫だ。

宗太は作業を止めて鈴花に手を差し伸べた。

「こんな所かな。ほら、そのベンチに座ろうよ。」

鈴花は宗太の手を取って立ち上がる。彼を見れば何かうれしそうだ。

鈴花たちはベンチに座り、出来上がった砂の作品を眺める。照明が適度に明暗を作り、彼女たちが作った物では無いように感じた。

「どうだいお二人さん。ほれ、お土産だ。」

そこへハルが戻ってくる。ハルの手にはビニール袋。鈴花がそれ何かと問えば、中にあるのはアイスバー。触ればひんやりと冷たい。ハルが黒い本を使って買って来たのだろう。

ハルが彼女と宗太の間に座ると、それぞれが袋からアイスを取り出して食べた。

「それで、何してたんだ。」

ハルの言葉に鈴花はアイスを口を含みながら砂場を指差した。ハルはアイスをくわえながら砂場を一周する。一周し終わると再び彼女と宗太の間に座った。

「砂遊びか。悪くないな。」

鈴花はハルの言葉に相槌を打ちながらアイスを食べる。彼女は最後の一口を飲み込むと立ち上がり背伸びをした。彼女はそのまま宗太と作った砂の作品を見る。彼女は作品の出来に我ながら上手く出来たと感心した。そうしている間に、ハルと宗太もアイスを食べ終えて彼女の元に来る。

「壊すの勿体無いわ。写真で残したいくらい。」

鈴花は周りを見て次の遊びを探す。見れば近くにブランコがあった。彼女は走りよりブランコに乗る。金属が擦れる音が聞こえてき

た。子供用のためか座るところが低く設置されている。彼女にとつては足が地面にぶつかりやすく面倒だ。それでも彼女はこいだ。宗太もブランコに座って一緒にこぎはじめた。ハルは近くのタイヤ椅子に座って二人を見ている。宗太を見れば同じく彼女を見て笑っている。彼女もそれに釣られて笑顔になった。

その時、鈴花は視界の端でハルが何かを感じ取った事を確認した。すぐにブランコを飛び降りてハルの傍に向かった。宗太もどうしたのかと彼女の後に続く。

「来たみたいだ。」

ハルはすぐに黒い本を鈴花に差し出す。彼女は黒い本を受け取り、本を開いた。ページは自動的にめくられて新しいページになる。そのページにゆっくりと絵が現れ始めた。彼女はポケットに入れたチョコに触れる。持ってきて良かったと本当に思った。そして、現れる絵をじつと見た。

「あの、僕はどうしたら。」

鈴花ははっとした。そういえば、宗太が居たのだ。ハルと彼女の二人ならどうにかなるだろうが、彼が居ては色々と面倒だ。

「悪いけど、先に家に帰っておいて。」

宗太は鈴花の言葉を拒否する。帰る途中に敵と会ってしまったらどうするんだと言って来た。つまり、一人で帰るのが怖いらしい。仕方なく三人は急いで家に帰ることにした。家までの道のりを三人は走る。絵が現れ始めたということはもうすぐ本体が現れるということだ。彼女は早めに彼を家に戻して戦いに専念したいと思った。

「っ、着いたわ。」

鈴花と宗太は少々息を切らしながら玄関前に到着した。彼女は彼に隠れているようにと言って黒い本を開く。絵は完全に現れていた。その姿はまるで戦車のような。それも複数。

「デスフェリアDeathferriaだ。」

鈴花は背後からハルの声が聞こえるものの目の前の絵から目を放すことができない。これまでと違って妙に生々しい敵だ。見たこと

があるからかもしれない。ページがめくられて倒し方が現れ始めた。彼女はそれを確認すると周りを見ようと顔を上げた。

その時、鈴花の体が真横に飛ばされた。ほぼ同時に、背後で爆発音がする。気がついた時には、ハルが彼女を抱きしめていた。真横に移動させたのもハルだろう。そして、爆発したのは彼女の家だった。立ち上る煙の中で家は崩れかかり壁のかけらが散乱しているのが見えた。すぐに爆発した場所とは反対側を見る。そこにデスフェリアが居た。その姿は戦車としか言いようが無い。主砲が左右に動き、獲物を探している。照準が合えばすぐに撃ってくるだろう。まともに当たったら体は粉々に砕けて幸せな人生の終りを迎えられると思った。

「仕方ないな。ほれ、俺の手を掴め。」

鈴花はハルに言われるままに彼の手を握った。彼はその手を掴んだまま勢い良く塀を越えて道路に出る。彼女のすぐ近くを弾が飛んでいく。再び近くで爆発音がした。戦車は人間では無くもっと大きな物が相手じゃないのかと思った。

鈴花はハルから手を離すと黒い本を開く。自動的にめくれたページには既に倒し方が表示されていた。

「兵器に殺されちゃたまらないわ。」

鈴花はチョークを握り直すと、目の前にある道を走り出した。

第二十一話 真夜中の戦争

第二十一話 真夜中の戦争

前方の丁字路から現れる戦車。慌てて逃げようとする鈴花。主砲から放たれる弾。空気を切り裂く音。背後で聞こえた爆発音。

鈴花が戦車から逃げて別の道へ出ても、そこには待ち構えたかのように戦車が居る。落ち着いて倒し方を見ることも出来ず。彼女は暗い道を走った。気が付けば街灯は点いておらず、月も雲に隠れてしまっている。

「早く、隠れないと。」

鈴花は近くにあった他人の家の敷地内に入る。無論敵に見つかっているが、塀があるためにそれを破壊しなければ追ってこない。彼女は出来るだけ通りから離れたところに移動した。彼女が隠れた場所は植物の鉢が沢山ある。どれも、最近雨が降っていないためか土が乾いてしまっていた。家主が居れば、この植物たちも水不足に悩まされないだろうにと思う。

家が塀を破壊する音はするものの影響は鈴花の位置まで及ばない。通りから何度か弾を撃つ音が聞こえたが、それ以降音は聞こえなくなった。戦車が何処か別の場所に移動したのだろうか。

鈴花は敵が遠ざかった事を確認すると黒い本を見た。自動的にページがめくられて倒し方が書かれたページへと移動した。そこには何時もの通り十個の数式が書かれている。式は一次方程式のようでは求めればよいようだ。書く場所は……。

「なんで、なんで戦車に書かなきゃいけないのよ。」

倒し方には数式は書かず、代わりに答えを敵本体のどこかに書くようにと書かれていた。数式を書く手間が省けるのは助かるが、危険度が増している。しかし、それでも書かれたことをしなければ倒せない。今回の問題が一次方程式であるため、暗算で答えを導き出

せるのがせめてもの救いか。

鈴花は一問目の答えを覚えると、敷地内から道路へと出た。すると、左右に一台ずつ戦車が居た。こちらに気がついてすぐに主砲から弾を飛ばしてくる。彼女は一旦敷地内に戻り、戦車が近づいてくるのを待った。その間に二問目の問題を解いて答えを覚える。何度か復唱していると二台の戦車が近づいてきた。先ほどと同じように敷地内に主砲を入れて目標を探している。

鈴花はチョークを握り締めて、戦車の主砲の下にもぐりこむ。答えが書けそうな部分があったため、すぐに書き始めた。戦車は彼女が自らの下に居ることに気がつき、自らを回転させる。彼女はそれにもなつて自らも一緒に回転した。回転しながら、もう一台が近づいていることに気づく。すぐにもう一つの答えを目の前の戦車に書き込み。回転の途中で再び他人の家の敷地内に転がり込んだ。直後背後で聞こえる爆発音。近づいてきた戦車が撃つたのだと思った。鈴花は三問目と四問目を見て答えを覚える。二台が近くに居ては前の出入り口からは出られない。

「裏口から出られるかな。」

鈴花は家の裏に回る。そこには道路への出入り口があった。出る前に周りを見ようと道路に首を出したとき、近くで何かが破裂する音がした。反射的に首を引っ込めると目の前で爆発が起きる。とっさに腕で顔を覆うものの何かが腕に襲い掛かった。

鈴花は腕の辺りに痛みを感じて腕を見る。爆発で飛んできた破片が突き刺さっていた。近づいてくる戦車の音。一旦出入り口から見えない位置に逃げた。

「い、痛い。と、取らなきゃ。」

鈴花は腕に突き刺さった破片を一つずつ抜いていく。流れ出る血や痛みはやけに生々しくてやっぱり生きているんだと実感した。

「俺が手伝つてやる。」

先ほどまで何も言わずに付いてきたハルは鈴花の腕を持ってゆっくりと破片を外していく。彼女は腕の痛みに低く呻いた。

すべての破片を取り終わった頃には腕がほとんど赤く染まっていた。鈴花は腕を上げようにも痛みで上手く上げられない。

「じつとしてる。」

ハルは両手を鈴花の両手首に当てる。ハルが彼女の心臓に向かって手を動かしていくと、何故か痛みは消えていった。血は残ったままだが、止まったようだ。彼女はハルが手を離すと、腕を動かしてみた。

「痛くない。大丈夫みたい。」

血に染まったチヨークを握りなおし、再度問題を見た。早めに終わらせないと次は命が無いかもしれない。こんなところで死ぬ気は無い。

鈴花は答えを確認すると、勢いよく本を閉めて走り出す。塀から道路を見て戦車がいるか確認した。案の定、先ほどの戦車がうろついている。彼女は戦車が背中を向けた瞬間に出入り口から道路に出た。そのまま戦車に近づく。

「後ろから来たぞ。」

鈴花が振り返ればもう一台近づいていた。前を向けば主砲をこちらに向けようと回転する戦車。主砲を向けられる前にその下を抜けて側面に答えを書く。暇も無いので殴り書きだ。戦車の背後に回ると四問目の答えを書いた。

「背後見という。」

戦車は再度回転せずに前進を始めた。戦車が進む先にはもう一台戦車が居るので彼女も一緒についていく。戦車の幅は道の半分以上を占めている。つまり、二台が通り過ぎることは出来ないはずだ。彼女は本を開き問題を見る。答えが出るとすぐに目の前の戦車に書いた。

鈴花が七問目を書こうとしたとき、目の前の戦車が小さくなっている気がした。それとともに別の戦車が近づいてくる音が聞こえる。そして、二台の戦車がすれ違う。そのとき、やはり戦車が小さくなっているんだと理解した。何故であるかを考えている暇は無い。対

向車線から向かってきた戦車は鈴花たちを発見すると主砲を向けてきた。彼女はすぐに目の前の戦車に飛び乗り、すれ違う戦車の主砲から逃れる。その状態で七問目の答えを書き込むと、塀に足をかけて別の家に飛び込んだ。すぐに塀から離れて隠れる。爆発音と何かが崩れる音が聞こえた。家にそって歩き、庭を見た。

「あれ、何。何なの。」

暗闇の中に見える高い建物。まるで角を生やしたお城のような姿の建物はこの町に存在すること自体異様だ。

鈴花はその建物に近づこうと一歩前に進んだ。ハルはすぐに彼女の腕を掴み引つ張る。彼女はバランスを崩しながらも家の壁にくっ付いた。直後、目の前にある家の外壁が吹き飛ぶ。つまり、戦車が敷地内に入って撃つてきたのだ。彼女は目の前で破壊された壁を見て震える。先ほどの痛みが思い出された。

鈴花はゆっくりと壁から庭を覗き込む。案の定戦車が一台見えた。しかし、見えないところに戦車が何台か居るかもしれない。彼女は残りの問題を見て答えを出そうとする。しかし、残り三問であるためか難しい式になっていた。

「ハルは戦車を見てて。」

ハルは庭に居る戦車と塀を越えた先にある道路を注意深く見ている。

鈴花は本を見て家の壁に計算式書いた。幸い家の壁はチョークで文字を書いても分かる程度の色をしていた。彼女は計算から求めた答えを壁に書いていく。書くという行為は暗算より面倒であるものの、今回の問題では素早く答えを導き出すことが出来た。しかし、最後の問題を解こうとしたとき、ハルが彼女を捕まえた。体が宙に浮かんだ後、近くを熱い塊が素早く通り過ぎた。地上を見れば戦車の主砲がこちらに向けられていた。結果、戦車に見つかってしまったようだ。しかも、空に出たために、地上にいるすべての戦車に見えているだろう。もう、こそこそと逃げている暇は無い。

「どれでも良いから戦車に近づいて。」

鈴花は先ほど解いた二問の答えを覚えていたうちに書きたかった。忘れてしまつてはまた計算しなければならぬ。ハルは彼女の言葉に応えると、地上に急降下した。地面すれすれまで降下するとまっすぐ戦車に向かつていく。戦車を真正面から向かつていく形になり彼女は戸惑う。戦車は返り討ちにしようとする主砲を彼女たちに向けて撃った。ハルは彼女を抱えたまま飛んできた弾を避けてさらに戦車に近づく。背後から主砲が撃たれた音がしたが、ハルはそれを確認すると難なくかわした。

鈴花たちが戦車の真横をすり抜けて真後ろにて停止する。彼女はすぐに先ほど解いた問題の答えを殴り書く。彼女が九問目の答えを書こうとしたとき、ハルは彼女を抱えたまま一度戦車から離れた。近くにまた他の戦車が近づいてきたからだ。戦車の主砲が彼女たちを向いていないうちに元の位置に戻ると残りの答えを書いた。あと一問だ。彼女が本を開いて最後の問題を見ようとしたとき、目の前にいる戦車の主砲が回転して彼女たちに照準を合わせてきた。

「ひとまず逃げるぞ。」

ハルは鈴花を抱えたまますぐそばにある他人の家の敷地内に入る。そのまま敷地内を横切つて別の道に出た。道には戦車は見えない。彼女たちがあまりに一箇所に居たために吸い寄せられるようにみんな寄つていつてしまったのだろうか。

鈴花が背後を見た後、正面を見ると先ほど見た城が見えた。しかし、何か様子が変だ。

「角が、角が無いわ。」

先ほど確かにあつた城に生えた角はどこかへ消えてしまつていた。今やただ大きな城がそこに存在するだけだ。

鈴花は黒い本を開いて最後の問題を読んだ。ハルが周りに注意を払う中で扉に計算式を書いていく。まるで三桁の割り算を解いているかのような状態は何時かを思い出す。彼女は答えを求めると、頭に叩き込んだ。今回は扉に書いても意味が無いからだ。

そこへ、鈴花から少し遠い位置から爆発音が聞こえてくる。彼女

は聞こえた方向を見ようと体ごと向きを変えようとした。すると、ハルが真正面から彼女にぶつかってきた。そのままハルは彼女を抱えて道を移動しはじめた。ハルの背後から来る赤い弾。先ほどまでの弾とは何か違うような気がした。彼女の体は進行方向とは反対に向いているため、飛んでくる弾を直に見ることとなった。先ほどまでは背後にあったためにそれほど恐怖は無かった。しかし、近づいてくることが分かる今となっては迫りくる恐怖からなんとか逃げようと抗う。

「ハル、速くして。追いつかれちゃうよ。」

ハルは無言でスピードを上げる。幾つかの角を曲がり、相当な距離を移動してもまだ追いかけてきた。

「なんで追いかけてくるのよ。角を曲がる弾なんてまるで誘導ミサイルじゃないの。」

鈴花はそこで口を抑える。後ろ向きに凄いスピードで移動しているためか気持ち悪くなってきた。

「おい、大丈夫か。」

ハルの言葉に顔を上げると、赤い弾が先ほどよりも近づいてきていた。鈴花は言葉が出ず、唸るだけしかできない。異変に気が付いて振り返るハル。その時、突如赤い弾が破裂した。ハルはすぐに目の前でゴムのような液体に変化して彼女の体を覆う。

直後、爆発の煙の中から鈴花たちを襲う無数の破片。それは、彼女を覆うハルの体に突き刺さっていく。

煙が晴れたとき、鈴花たちは地上に立っていた。彼女から剥がれ落ちるハル。それは一瞬ハルではないと思うほどの姿だった。無数の破片が食い込んでいる。彼女は自分の体を確かめた。痛いところはない。全部、ハルが受け止めてくれたのだ。彼女はしゃがみこんでハルに触ろうとする。

「ハル、ねえハルってば。」

鈴花はハルが再び元の姿に戻って動き出すことを心の中で思いながらも、多くはもう二度と動き出さないうという思いが心の中

を占めていく。もう動き出さないと思えば思うほど、空へ向かつて泣き叫びたくなる。

その時、背後から聞こえる戦車の音。鈴花はチヨークを握り締め立ち上がる。ここに留まることはできない。まだ、彼女にはするべきことがある。すぐに近くにある他人の敷地内に入り、塀を挟んだ位置から戦車を見た。

戦車は鈴花に気づき、主砲を向けてくる。彼女はすぐに塀から離れた。直後、主砲から撃たれた弾が塀を破壊する。戦車は一部破壊された塀に向かって再度主砲を撃つ。広く破壊された部分から戦車は敷地内に侵攻してきた。

鈴花はそれを確認すると塀をよじ登り道路に出る。そのまま戦車へ背後から飛び乗った。戦車は気が付き主砲を回転させるが、彼女が戦車に乗っているため撃ちようにも撃てない。

鈴花は覚えておいた最後の問題をチヨークで書き込む。主砲が塀とは反対を向いたとき、彼女は塀に向かってジャンプした。塀に片足をかけると、そこからさらにジャンプして他人の家の敷地内へと飛び込む。

鈴花は着地すると黒い本を開きながら塀から離れた。本を見ればすべての数式が青白く光る。その後、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあがった。

「そ、そんな。出来るわけ無いでしょ。」

最後にすべきことを見た鈴花は立ち止まり、思わず大声を出してしまった。それほど面倒なことなのだ。最後にすべきこと。それは、先ほど見た城の一番上にこの本を置くこと。ハルが居れば飛んでいけるだろうが、彼女一人で幾つもの戦車が居る中を通って行くのは難しい。

「どうすれば良いのハル。私だけじゃできないよ。」

鈴花は途方に暮れた。手に持った黒い本は自動的にページがめくられて、あるページを開いた。右のページには何も書かれておらず、左のページにハルらしき生物が書かれている。すると、絵が光だし、

絵の中から立体的な物体が浮かび上がってきた。彼女は予想外の出来事に驚き黒い本を地面に落としてしまう。光るページ、その中から現れる物体。完全に本から離れたそれはハルそのものだった。

「ハル、どうして。どうしてそこに居るの。」

先ほどまで一緒に居たハルは目の前でゴムのような姿になって動かなくなってしまった。では、今目の前に居るハルはなんなのだろうか。ハルが黒い本から出ると、光は収まり、本は自動的に閉じられた。

「おう、鈴花。大丈夫か。」

鈴花からすれば口調も今まで通りのような気がした。特に変わらないが、先ほどの状態からか違和感を感じる。それをハルに問えば、驚くべき言葉が返ってきた。

「俺はさっきのハルじゃない。」

先ほどのハルでは無いということは今目の前に居るハルはまた別のハル。だけど同じ姿と口調。鈴花は現状が良く分からなくなった。「まだ、倒してないんだろ。さっさと倒すぞ。」

ハルは鈴花を抱えると移動を始めた。目的地を伝えると知っているようだった。先ほどまで黒い本の中に居た。その事実が、ハルが目的地を知っている理由になるような気がした。

鈴花はハルの移動スピードが速いためか、顔面にぶつかる風によって目を開け切ることが出来ない。薄目でみる世界の中で、敵が撃つ弾を避けながら飛んでいることだけは分かった。彼女は黒い本を両手でしっかりと抱きしめる。

鈴花が薄目からしっかりと目を開けようとしたとき、目の前に数台の戦車が見えた。その奥には目的地の城が見える。

次の瞬間、各戦車がほぼ同時に主砲を撃ってきた。ハルはその弾の中を器用に避けながら抜ける。そのまま城へと向かうと、城の周りに幾つもの対空砲が現れた。もちろん、鈴花たちを打ち落とすためだろう。すべての対空砲が目標を捕らえ弾を撃ち出す。誘導式のためか彼女たちからなかなか離れない。ハルは沢山の弾を避けるこ

とに必死で城の一番上に到達することができない。

城を上から見ると、平らな円形になっている。まるで先ほどまで何かあったかのように平らで何も無い。

「二人揃っては無理だ。お前だけ行け。」

ハルはスピードを上げて一気に城の一番上に近づく。急にスピードを落とすと同時に、その反動で鈴花を城の一番上にある円形部分に放り投げた。彼女は投げ出され硬い床の上を転がる。

「い、痛い。何で出来てんのよこれ。」

鈴花は痛めた部分を片手でさすりながら、もう片方で床を叩いた。何で出来ているかわからないが硬いことは分かった。周囲を見ればハルが今も弾に追いかけている。ここには弾は向かってこないようだ。

鈴花は手に持っている黒い本を円形の中心に置いた。彼女は立ち上がりその後の展開を待つ。黒い本の表紙にある模様が一瞬光ると、本自体が光りだした。あまりに強い光のためか彼女は本から目を逸らした。光が収まったとき、周りを飛んでいた弾は消えていた。

「うまくいったみたいだな。」

ハルが鈴花の元に来る。彼女は頷き本を見た。本は床の中にゆっくりと沈んでいった。直後まるで地震でも起きたかのように大きな揺れが起きる。彼女はハルにつかまって城から離れた。

鈴花が上空から城を見れば、城の周りに増える戦車の数。城は戦車を吸い寄せ交わり自らも小さくなっていく。遂には自らが存在する土地よりも小さくなりやがて消えてしまった。

鈴花たちは城があった場所に降り立つ。何も無い更地。周りの建物がえぐられているといった中途半端な影響は無く、更地になった場所にかつて存在したであろう建物だけが消えてなくなっている。そして、黒い本が宙に浮いたまま現れた。

鈴花は黒い本を取り、本を開いた。デスフェリアのページに移動すると何時もの通り赤文字が浮かび上がる。倒せたということだ。彼女はチョークをしまつとハルを見た。

「帰りましょう。宗太も見つけないと。」

ハルは鈴花の言葉に応える。彼女を抱えると家へ向かった。

東の空が明るくなり始めていた。夜を越えてもう朝になるのだ。

上空から見える町は所々破壊されていた。それらは鈴花と敵が戦った場所だ。

鈴花はもう少し破壊せずに終わらせることが出来なかったのかと自問する。知っている町並みだからだろう。昨日まであったものが突然消えるのは悲しい。

第二十二話 短い休息

第二十二話 短い休息

鈴花たちは彼女の家に到着した。とは言っても、家は敵に破壊されて見るも無残な姿になっている。中に入れるかも怪しい状態だ。「もう、住めないなこりゃ。俺が中に入って必要なものを取って来てやる。何か必要なものは。」

ハルの言葉に鈴花は彼女の部屋にあるものを口に出して並べていった。これから必要そうなもの。そこで、ふと写真の事を思い出すとポケットの中に手を入れる。昨日から入れたままの写真があった。面倒なので着替えた服に入れておいたのだ。

「それだけか。じゃあ、宗太を探しといてくれ。その辺に居るだろ。」

ハルの言葉に鈴花は頷く。ハルは家の中に、彼女は宗太を探し始めた。彼女たち以外に自ら音を発するものは無いため、声を出せば遠くまで広がっていく。

「おーい。ここだよ。」

少し遠くから声が聞こえてきた。宗太の声だ。鈴花が声のする方向へ走ると、彼がこちらに駆けて来るのが見えた。彼女の前で立ち止まり荒い呼吸を整えようとしている。顔は下がり、少々辛そうだ。「無事だったみたいね。良かった。」

鈴花の言葉に宗太は顔を上げて頷いた。

「荒谷さんも。無事で良かった。」

鈴花はその姿を確認すると頷き、彼女の家のほうを見た。

「家に戻りましょう。早く寝たいわ。」

鈴花と宗太は並んで彼女の家へ続く道を歩いた。彼は敵が現れたとき、しばらくはその場に隠れていたようだ。近くに敵が寄ってきたので別の場所へ移動したらしい。いくつか敵と出合ったらしいが、

どうにか攻撃を受けずに逃げたそう。実際のところ敵から見たら彼女が目標だと思うので彼を積極的に追いかけないのかもしれない。鈴花たちが家に着くと、ハルは庭に座って家を見ていた。

「おう、二人とも大丈夫だったか。」

ハルの言葉に鈴花と宗太はそれぞれ頷く。ハルは立ち上がり家を指差した。

「ご覧の通りこの有様だ。もう住めないだろう。」

鈴花の住んでいた家は傾き、今にも音を立てて崩れ落ちそうな状態だ。中で眠れば起きる前に家の下敷きになっているかもしれない。ハルはいつの間にか上空に上り、周りを見渡している。すぐに、彼女の元に戻ってきた。

「この町も破壊されてきているな。もうここを離れて別の場所に行つたほうが良さそう。」

鈴花は変わり果てた家を見て納得した。これまで住んでいた家にはもう住めない。それにこの町も所々破壊されてしまった。

鈴花が別の場所とは例えばどこかとハルに尋ねる。

「ここからだとも東京かな。あそこはここよりも色々なものが揃うだろう。」

他に移動する先を考えていないためか、鈴花はハルの提案を採用した。東京ということは移動手段は電車だろうか。

「そうか。ここを離れて移動するんだね。」

宗太を見れば道路に出て辺りを見回している。自分の育った町だから、離れたくないのかもしれない。彼女は宗太の言葉からそんな答えを導き出した。

「家が壊れたんだから仕方ないだろ。」

宗太の言葉にハルが対応する。実際のところまだこの町に残ることとは出来る。しかし、住んで居た家が壊れたことでこれ以上この町で戦う理由が無くなってしまった。それにこれ以上この町が破壊されるのも気分が悪い。

鈴花はあくびをしながら両腕を思いつきり空に向けて背伸びをす

る。まだ睡眠をとっていないためか眠い。

「東京に移動する前に駅前のホテルで休むか。」

ハルの提案で駅前のホテルに泊まることにした。朝からチェックインなどどうやって出来るのかと思う。しかし、ハルの提案なので何かあるのだろうと思つて三人は駅前へ向かつた。

駅が目の前に見えるホテルは外見に比べて建物内は意外と綺麗で広い。黒い本は何時ものとおりのホテル内に存在するスタッフや客人たちを映し出す。動きが嫌に生々しくて本当に居るように錯覚してしまう。宗太を見ればパジャマ姿のためか周囲の視線を気にしていた。相手が生身の人間では無いことがせめてもの救いだらう。

フロントに聞けば泊まる事が出来るらしい。鈴花とハルで一部屋、宗太一人で一部屋を使うことになった。彼女は三人それぞれの部屋が良いのではと提案した。しかし、ハルはそれを拒否して彼女と一緒に部屋にするように言つて来た。ハルがそばにいればすぐに黒い本を取り出すことが出来る。だから、ハルは彼女と一緒に部屋のほうが良いのかもしれない。

「それじゃあ。三時にロビーに集まりましょう。」

鈴花の声でそれぞれが自分の部屋へ入る。彼女は部屋のベッドに倒れたい衝動を抑えつつハルから着替えを受け取つてシャワーを浴びた。眠いためか立つて居ることが出来ず、その場に座り込む。すると、誰かが部屋に入ってくる音が聞こえてきた。ハルと話をしてるので宗太だろう。服が無いとかそういう話かもしれない。着替えて部屋に戻ると、ハルがベッドの上に座っていた。

「東京に行く前に宗太に服を買うことにした。ホテルを出たら前回鈴花と一緒に行った店に行こう。」

前回行った店は今居るホテルから駅をはさんだ反対側にある。東京へ向かう電車にパジャマを着て乗るのはさすがに辛いかもしれない。鈴花自身もそれは避けたいと思う。

鈴花はカーテンを開けると、先ほど出来なかったベッドへのダイブを実行する。そして、やわらかい感触を肌で感じながら夢の中へ

入っていった。

第二十三話 邪魔された上京

第二十三話 邪魔された上京

鈴花が目覚めたのは強い日差しを感じた午後だった。隣を見ればハルがベッドに寝転がり天井を見ている。ハルは彼女が起きたことを確認すると、起き上がった。

「起こす手間が省けたな。ちょうど午後二時半を過ぎたところだ。」
鈴花は半分眠った状態で洗顔や歯磨きをこなしていく。習慣というのはこういう時に役立つ。

鈴花とハルは準備を終えるとロビーへ向かった。朝と同様にスタッフや見知らぬ客人がそれぞれの行動をしている。

鈴花とハルは空いている椅子に座って宗太を待った。しばらくして宗太が来る。相変わらずパジャマ姿だ。

「飯でも食おう。昨日の夜から何も食ってないだろ。」

鈴花はハルの言葉にいまさら空腹を思い出す。眠かったためか忘れていたのだ。

ハルは椅子から立つと歩き出した。鈴花と宗太もその後が続いた。着いた先はホテル内のレストラン。彼女はハルに導かれるままにレストランの中に入る。そして、三人で一つのテーブルについた。すると、ウェイターがメニューを持って登場する。

鈴花はメニューを開いてもどれが食べたいとも思わない。食べないことには空腹は満たせず動くことが出来ないのは分かっている。しかし、選べない。

「ハルに任せるわ。」

鈴花はメニューを閉じてハルに渡した。ハルはメニューを見ながら料理名をウェイターに告げていく。結果、宗太も同じく食べたいものを言わなかったためにハルの独断で料理が選ばれた。

ウェイターはすべての注文を復唱するとその場を離れて厨房へ下

がる。周りには鈴花たち以外居ないため、まるで貸切のように思えた。

しばらくするとウェイターの手によって料理がテーブルの上に並べられていく。その量は三人には多いような気がした。少なくとも鈴花からみれば多いような気がした。

「よし、食べるぞ。いただき……あれ。」

鈴花はハルの声に彼を見たが、すぐに目の前の料理に視線を戻した。

「鈴花は最近軽いものしか食ってないだろ。だから、戦いから帰ってくる時何時間もぐったりしてんだよ。」

ハルは目の前にある料理を取って鈴花の前に差し出した。料理はご飯ものようだ。しかし、彼女はなかなか受け取らない。

「さっさと受け取って食え。食わなきゃ死ぬ、食っても死ぬ。だつたら食って死んだほうが良いだろ。」

鈴花はハルから皿を受け取る。目の前に見える料理の山。何時だったか、このぐらいの量の料理を食べたことがある。そのときはしっかり食べていたような気がする。その時と今と、何が違うんだろうか。

鈴花は皿にのった料理を一口食べた。すると、まるでまだ何も食べていないような感覚になる。彼女はもう一口食べる。彼女の食べたものが底の無い胃袋に落ちていくような気がした。彼女は底の無い胃袋を完全に満たすようにゆっくりと食べ進める。彼女の姿を見たハルや宗太もそれぞれ食事を始めた。

ハルが頼んだ料理の山は次第に崩れ始め、遂には新しい料理の山を呼ぶことになってしまった。

テーブルから皿が無くなると、三人はそれぞれ膨らんだお腹をさする。鈴花にとっては久しぶりにいっぱい食べたような気がした。

「さてと、払ったら次は買い物に行こう。」

ハルが席を立つと、つられて他の二人も席を立つ。レストランの勘定とホテルのチェックアウトを済ませてホテルから出た。

鈴花は先ほどまで居たホテルを見る。そこには、明かり一つ無い建物があった。

「ほら、行くぞ。」

鈴花はハルの声に応えると、ハルと宗太の横に並んで歩いた。駅を越えて一昨日訪れた専門店へ入る。すると、あの時と同様に人々が現れた。

鈴花は店内のカフェで一人お茶を飲む。宗太は男物のコーナーをハルと回って色々買っている。彼女と一緒に居たからといって何かアドバイスできるわけでもなく、彼自身も彼女の同行を嫌がったので付いていかなかった。彼女は周りを見る。他にもお茶を飲んでいる人が何人が居た。中には仕事をしている人も居る。本当に忙しそうだ。彼女はこんな状況まで再現しなくても良いのと思った。

しばらくしてハルと宗太が戻ってきた。動きやすそうな短パンにTシャツ。鈴花とは男物が女物かの違いだけだ。

「さてと、準備も出来たし、東京に行くか。」

三人は店を出て駅構内へ入る。ここでも人々が行き来している。

「東京までの切符を買わないと。」

鈴花たちは券売機で切符を買う。彼女はハルをどれに区分するか少し迷ったが、大人と考えて購入した。改札機に切符を通すと階段を下りてホームへ出る。周りに何人が電車を待つ人が居る。彼らが居なければ寂しいホームが彼女たちを迎えていただろう。

しばらくして電車が来る。鈴花たちはそれに乗ってよく知る町から東京へ移動を開始した。乗客は時間帯のためかまばらで簡単に座ることが出来た。そこから外の景色をじっと見る。彼女は特にすることもなくただただ景色を見た。彼女が見る外の景色には一人居ない。ハルは当たり前前だと言うが、それでも本当にみんな居ないんだと彼女は思った。映っているはずの大型スクリーンは何も映さず真っ黒い。見る人間も映す人間も居ないのだから仕方ないと思う。

鈴花は外から目を離して深呼吸する。朝寝たためか体がおかしい。彼女は目を閉じて到着するまで待った。

不意に電車が止まる。鈴花が東京に着いたのかと思えばそうでは無かった。電車は橋の上で止まっている。橋を渡っているということは一応東京都には入ったらしい。辺りを見回してみるとハルが居ない。

「ハルどこ。ハル知らない。」

宗太に聞いても良い答えは得られない。鈴花は彼を連れて車内を移動した。行ったり来たりしたもの見つからない。

「ハル。ここに居たの。どこか行っちゃって心配したわよ。」

東京側の先頭車両にハルは居た。車掌と何か話している。こちらに気づくと寄ってきた。

「まずいことになった。ここからは歩きだ。」

電車のドアが開いた。すぐに外の空気が中に流れこみ室温を上げようとする。その中をハルは何も言わず車外に出て行った。

「ちよつ、ちよつと待つてよ。」

鈴花と宗太はハルを追って車外に出た。車外に出た途端に熱風が身体にぶつかってくる。陽が傾いてきたとはいえ未だ暑い。真下を川が流れているからそれでも涼しいほうだろう。川を流れる水の音だけが聞こえてくる。

「あの、先に行っちゃったけど。」

鈴花は宗太の声で現状を確認する。ハルは既に橋の上を飛んでいた。置いて行かれたらまずい。彼女は宗太とともに走りだした。

鈴花がハルにもう少しで追いつきそうになったとき。ハルは振り返った。その顔に元気がない。

「よりもよつてこんな場所で敵が現れたぞ。」

鈴花は本を受け取ると開いた。自動的に新しいページがめくれる。そこには新たな敵が表示されたいた。毎度のとおり文字は読むことができないが姿は確認出来る。

「これは、サイコロ……なの。」

そこには正六面体の物体が表示されている。線だけで表されており、色は無い。あえて色を付けるなら紙と同じ白だろうか。

「Soliquidだだよ。ほら、鈴花。ぼさつとするな。」

気がつけばハルに片手を引つ張られて宙に浮いていた。宗太も同じく。何故なのかと周りを見ればすぐにわかった。

白いサイコロの形をしたソリキッドが橋の上を転がってきたのだ。鈴花たちが乗ってきた列車はもう無い。代わりにソリキッドが何個も列をなして橋の上を転がっている。高さは列車よりも少し高いくらいだろうか。そのまま橋の上に居たら押しつぶされていただろう。そういえば昔サイコロを転がすゲームがあったような。

「鈴花ぼーつとするな。早く本を見る。」

「かつ、片手じゃ無理だつてば。だったらどこか下ろして。」

片手をハルに掴まれている状態では気軽に本も開けない。何処か陸に下ろしてもらわないと駄目だ。

ハルはすぐに川を渡って東京駅側の街中に降りた。振り返れば今も橋の上をサイが転がっている。何個も何十個も。橋を渡り街中に入っていく。地面が小刻みに揺れる。ソリキッドが転がっているためだろうか。

「ど、どうするのあれ。大丈夫なの。」

心配そうに鈴花を見る宗太。

「知らないわよそんなの。やるしかないの。」

鈴花は地面が小刻みに揺れる中、本を見る。そこにはいつもの通り倒し方が書かれて……いない。ページは真っ白のままだ。彼女は驚きハルを見る。

「まだ倒し方が分かかっていないってことだな。こいつも万能じゃない。」

「少しづつ揺れが大きくなっていく。ソリキッドが近付いてきているのだ。」

「じゃあ、どうすれば良いの。」

「とにかく今は、逃げる。」

ハルは鈴花と宗太を掴んで飛び始める。今は何も出来ない。ならばハルに付いて行くしか無い。

何度か角を曲がって一本道を真っ直ぐ行くとひらけた場所に出た。
「ここは駅前か。」

電車が停まっていなければ着いたであろう駅前の広場に着いた。
ここは高架駅らしく駅の入り口が二階部分にある。

「さてと、丁度いいな。」

ハルはそのまま駅の改札口前に鈴花と宗太を下ろす。

「あなたはここに居てくれ。高さも十分あるし、敵もここまで登ってこないだろう。」

ハルは宗太を降ろすと再び飛び始めた。

「ちよ、ちよつとこんな所に置いていつていいの。」

鈴花はハルに抱えられながら駅構内を出て駅前広場に戻る。そこで、ハルは彼女を地上に下ろした。広場は大きめのモニュメントがあるが意外と広く四方をよく見渡せる。

「鈴花。敵はお前を狙っているんだ。あいつじゃない。もしあいつを狙っているんだつたらデスフェリアの時に木っ端微塵に消し飛んでいたさ。」

鈴花はその光景を想像して身震いした。ハルにそんな事を言っただけなのに彼女自身も宗太が居ては行動しづらい。彼は高いところに居ることだし、大丈夫だと思うことにした。

再び地面が揺れ始める。最初は小さく、しかしゆっくりと揺れは大きくなっていく。

ちらりと黒い本のページを見るとやっと倒し方が浮かび上がっていた。

「倒し方。今度は……。」

「鈴花、上だ。」

その時、ソリキッドが勢い良くビルを飛び越えて広場に転がってきた。とっさのことに彼女は動けずハルが抱えて飛ぶことでなんとか交わす。他のソリキッドもビルの間を通り抜けて来ている。

「まさかこのサイコロって、跳べるの。」

ソリキッドは結構高い建物を飛び越えて来た。やろうと思えばど

んな高さでも跳び越えられそうだな。それだけ広場へ登場したときのインパクトは強い。地面を走っていたら押し潰されていただろう。

「ハル、助かったわ。早く倒さないと。」

黒い本のページには何時もの通り十個の数式が書かれている。

「えつとxとyが入っていてイコールが無いから単項式と多項式の計算かな。xやyをそれぞれ計算しろってことよね。」

書かれていたのは単項式と多項式。四則演算と分数の式が各二問ずつ計十問ある。

「書く場所はビルの壁ならば何処でも良いと。ふふ、高い所なら安全ね。」

振り向けば広場で一際大きな音をたててソリキッドが転がっている。数は増し、広場を埋め尽くそうとしていた。しかし、先のサイコロジャンプの件を除けばサイコロである以上簡単には高いところに到達しないだろう。

「今回は簡単ね。なんとかなり……あれ。」

ソリキッドたちの動きがおかしい。広場に集まりすぎたためなのかまるで敷き詰められたブロックのように綺麗に並んでいる。そして、どのソリキッドも動かなくなった。

「どういうこと。ハル、ちょっと近づいて。」

鈴花は目をこらす。ソリキッドの表面が微妙に波打っているように見える。いや、錯覚だろうか。彼女はもう一度良く見る。ソリキッドの表面は確かに波打っていた。

「まさかこいつら、サイコロが本来の形じゃないのかもな。」

ソリキッドの表面の波は大きくなりやがてソリキッド同士の波が同期していく。大きな一つの波になったとき、すべてのソリキッドは一つの大きな物体に変化した。

その時、鈴花の真横のビルに何か粘着質の物体がぶつかる音がした。ビルを見れば確かにジェル状の何かがかくつついている。広場のソリキッドに視線を戻すと、自分自身を小さく切って周りのビルの壁目がけて飛ばしている。固体が駄目なら液体ということか。

「これは危ないぞ。鈴花さっさと解くんだ。」

ビルの壁に付いた液状のソリキッドが、鈴花たち目がけて飛んでくる。なんとか交わすものの彼女のすぐそばを通り過ぎる液体状のソリキッドは後を絶たない。高いビルも多いこの地域ではどこから飛んでくるか分からないためにどうしようも無い。それでビルの壁に書けなんてどうしろというのだ。

「俺があいつらに当たらないようになんとかするからお前は計算に集中しろ。」

鈴花はページを凝視する。幸い四則演算の八問は単純な問題が続いているので壁にかけさえすれば大丈夫だろう。それにしても壁にチヨークで書けるのだろうか。

隙を見てハルが壁に近づけてくれた時に答えを書く。不思議とどこでもチヨークで書けた。本当に不思議なチヨークだ。

次の問題の答えを書こうとしたとき、彼女は真横から感じたことのない強い衝撃を受けた。直後体が重力にしたがって地面に向かって落ちていく。風を切り、支えるものがないまま落ちていく。鈴花はただただ絶叫する。今はそれしかできない。彼女が地面に到達する直前で落下は止まった。ハルが受け止めたらしい。

「だ、大丈夫か。生きてるぞ。生きてるからな。」

鈴花の目と鼻の先に地面があった。それだけに本当に死ぬと思っただ。彼女は恐怖で何も言えず荒く呼吸するだけだ。ただただ涙が出てくる。死を眼の前になると人間ってこうなるんだろうか。

「あいつら真横からぶつかってきやがった。ふざけた真似を。」

ハルは語気を強めて言った。ハル自身も衝撃で落下したのだろう。とにかく持ち直して鈴花を捕まえてくれて良かった。

「鈴花。書くときはさっさと書くんぞ。止まっていると狙い撃ちされるぞ。」

この状況では悠長に壁に途中の計算式なんて書けないということだ。出来るだけ頭で考えるしか無い。

戦闘でいうヒット&amp;アウェイという戦法だろうか。見渡

せる場所で答えを出すと、そのまま近くのビルの壁に移動。壁に到達するとすぐに答えを殴り書きしてすぐに離れる。これを繰り返すと、最初のような真横からの強い衝撃を受けることも無くなった。それでもソリキッドたちは縦横無尽に飛び回っている。時には答えを書いているビルの壁に張り付いていて、そこから鈴花たち目がけて飛んでくることもあった。

四則演算を終えると最後は分数の単項式と多項式だけになる。しかし、この二問が厄介だ。ぱっと見ただけでは答えが分からない。分数といっても加算減算が加わった式でなんか見るからに面倒そう

だ。
「分数だってようは分子の式と分母の式の割り算だ。落ち着いて考えてみる。出来るはずだ。」

ソリキッドの攻撃を避けながらもハルが言う。このままの状態をハルに強いていては、また地面に落下するかもしれない。

「割り算。わりざんね。」

鈴花は頭を掻きながら再度式を見た。まず、式の分数部分を定数と変数部分で分ける。分けた分数を加算減算すればよいのだが分母を揃えるという面倒な事が起きる。分母を揃えるために同じ分だけ分子に数を掛けるのだ。紙に書いて計算するなら簡単に解けるのにと本当に思った。出した答えを腕に書く。チョークで書けるかなんて考える暇は無い。ただわかる範囲で後が残れば良いのだ。その状態でもう一つの式を計算する。

鈴花は低くうめき声を挙げた。解けないのではない。気持ち悪いのだ。

ソリキッドのせいでハルは縦横無尽に動きまわる。故に、頭が揺らされ続けて気持ち悪い。

「終わらせる。終わらせるんだから。」

酸素を補給しようと思が荒くなっている。視点はせわしく動きつづけた。

「解けたわ。早く書かせて。」

鈴花は最後の問いの答えを出すと、弾かれたように叫んだ。腕に書いた答えと今頭の中にある答え。これらを書けば後は最後の仕上げだ。

ハルはすぐに壁に近づく。鈴花は素早く二つの答えを書き殴るとその場を離れた。安全な地点まで戻ると再度倒し方のページを見る。すべての問題が光り、最後にすべきことが現れた。そこには「本を閉じて空に差し出す」と書かれていた。

鈴花は本を閉じて空へ差し出した。太陽の光が当たっている黒い本の表紙が黒い墨で覆われていく。完全に覆われると何度か形を変形させた後、丸い玉となつて周囲にはじけ飛んだ。はじけ飛んだ黒い液体はソリキッドに付着していく。液体が付着すると徐々に黒くなり、まるで干からびたように動かなくなった。彼女たちに近づいてくるソリキッドも、逆に黒い液体がかかって地面に落ちていった。すべての敵が黒くなつたとき、その全ては消滅し代わりに黒い本が鈴花の前に現れた。彼女は念のため黒い本を開いて確認する。確かに倒した事を表す赤い文字が書かれていた。

鈴花は大きく深呼吸すると同時に全身の力が抜けてしまった。ハルがあわてて支える。

「手ごわいわね。敵も、倒すための計算も。」

鈴花はつぶやく。何時来るか、どんな敵なのか分からない中で対処しなければならぬ。この戦いは何時終わるんだろうか。

第二十四話 甘くない資格

第二十四話 甘くない資格

鈴花はぐったりと疲れたままハルに連れられて駅に戻った。駅構内に着くとその場に座り込んでしまう。

「ほら、立つんだ。座るなら電車に乗ってからだ。」

鈴花は丁度来た宗太に支えられながら改札を通って再度電車に乗った。東京までの数十分間。彼女は宗太の肩にもたれかかる。宗太が嫌そうにしていけないのでそのままにした。ハルには寄りかかれないうのだから丁度良い。

鈴花たちは東京に到着すると、電車を降りてエスカレーターと階段を含んだ長い道のりを歩いた。駅構内は表示しなくても良いほど人は溢れ、ごちゃごちゃして気持ち悪い。眠って回復した体力を使つて人ごみを器用にすり抜ける。彼女たちは駅を出るも、先をどうするかは考えて居ない。辺りは陽が落ちて暗くなっていた。

「今日はもう遅い。どこかに泊まろう。どこが良い。」

ハルにどこと言われても鈴花は東京にあまり来たことがないので思いつかない。今日の朝泊まったところはビジネスホテルで正直微妙なところだった。泊まるならもっと高級なホテルでサービスが良い所。特にこれまで泊まったことの無いところに泊まりたい。彼女はそんな事をハルに伝える。

「そうだな。この辺りで高級で歴史があつてサービスが良い所というところ……。」

鈴花の要望にいつの間にか歴史云々が加わり目指すホテルが導きだされた。

「新帝都ホテルか。ちょっと遠いけどな。」

新帝都ホテル。鈴花も名前ぐらいは知っている。国内で五つの指に入る有名なホテルだ。とはいえ、それ以上にここから遠いことが

気になった。

「そこで構わないけどさ。これ以上歩くの。もう休みたいんだけど。」

鈴花はその場にしゃがみこんだ。ホテルの場所は知らないがここから歩くのならそんなところに行きたくない。

「構わないなら大丈夫だ。俺が連れて行ってやる。ほれ、宗太も足掴めよ。」

ハルは鈴花を抱えると飛び始めた。慌てて宗太もハルの足を掴む人が居ない東京は恐ろしいほど静かで真っ暗だ。しばらく飛ぶと真っ暗な中にぽつんと明かりが点いた建物が見えた。これが目的地だろう。ハルは建物の前で下ろしてくれた。「新帝都ホテル」は外見も、入り口から見えるホテル内も立派に見えた。何階のホテルなのか数えられない。館外にはドアマンが二人居る。

「なんか凄いホテルだね。名前は知っているけど初めて見た。」

宗太がホテルを見上げている。ホテル自体大きく立派だ。こんなホテルなんて鈴花は生まれて以来泊まったことが無い。

「ここで良いな。このホテルで一番高いところに泊まるぞ。」

ハルは鈴花が止める間も無くホテル内に入るうとする。ドアに近づくとドアマンが両開きのドアを開いてくれた。鈴花と宗太も後を追ってホテルに入る。

ハルの動きは早く、手短に手続きを済ませて戻ってきた。買い物をしたときと同じような事をしているのだろうか。

「部屋取ってきたぞ。スイートは無理だったがその一個下のランク二部屋に三人だ。同じランクの部屋が二つあって本当に良かったよ。分け方は前回と同じで良いよな。」

ハルが一気に説明したので、鈴花たちは困惑しながらも頷いた。ハルが凄く嬉しそうにしているのは気になったが、男女一つの部屋という意味があるだろうと納得した。そういえば、ハルに性別はあるのだろうか。

すぐに二人のホテルマンが来て部屋に案内してくれる。途中で宗

太とは別々に別れて部屋に着いた。

「こちらがお客様のお部屋です。」

部屋に入るとさすがに良い部屋だと直感的にわかる。鈴花は自然と感嘆した。当たり前なのは分らないが自分の部屋の倍以上の広さがある。大型のテレビがあり、ソファとバスルームもしっかりしている。

その間にホテルマンは丁寧に必要な情報をハルに案内してから戻っていった。

ハルはホテルマンが出て行くとベッドにダイブした。

「スイートに泊まれなかったのは本当に残念だ。資格がある奴をハードコーディングしてやがる。」

ハルのつぶやきは聞こえたが何を表しているのか鈴花には検討がつかなかった。ハードコーディングってなんだろうか。

そんなハルを見ていると素早く起き上がってこちらを見た。

「よし、飯食いに行こう。宗太の部屋行くぞ。」

早速動き出すハル。鈴花も黒い本をテーブルに置いていこうとした。すると、ハルは黒い本を彼女から受け取って目の前で消した。しばらく預かるということだろう。

宗太の部屋は別の階にあった。同じランクの一人部屋だからなのか狭いながらもしっかりした部屋だ。

鈴花たちは宗太と合流するとエレベーターで地下一階に降りた。

この階には食事処が沢山ある。通りを歩くと各店から良い匂いが漂ってきた。客は居ないが店はやっているという状態だろうか。どこでも選び放題なのは異様だがもう鈴花たちにはおなじみだ。

その中の一つにはいつか食事を済ませると明日の朝まで解散となった。

鈴花とハルは自室に戻るがテレビがやっている訳でもなく昼間も戦ったので非常に眠い。

「私眠るわ。おやすみ。」

鈴花は半ば無意識にお風呂に入るとそのままベッドに倒れこんで

しまった。頭は朦朧として立っていられないからだ。
布団をかぶるとすぐに眠りについた。

第二十五話 業火の中へ

第二十五話 業火の中へ

何時か見た夢の中、遠くからハルの声が聞こえてくる。その声は徐々に大きくなってきた。鈴花は耐えかねて楽しい世界から現実世界へ戻る。案の定ハルは鈴花の真上に居た。

「あう、何よ邪魔しないでよ。」

鈴花はハルを払うと、夢の続きを見ようと再び眠ろうとした。

「邪魔しなさいけないんだよ。」

ハルの大声とともに今度は体を強く揺さぶられ、鈴花は仕方なく起き上がった。彼女はぶつぶつを不満を漏らしながら目をこする。

良い場面であっただけに凄く悔しい。そんな状態の彼女をハルは容赦なく引つ張った。

「やめてよ。何があっただっていうの。」

鈴花はハルの腕を払う。はつきり言ってまだ頭が起きていない。

体が暑い、エアコンを切っているのだから室内の温度が高い。

「なんでこんな暑いだよ。エアコンは、エアコン……。」

ベッドから降りたとき、ハルが鈴花を揺さぶってまで起こそうとした理由がわかった。部屋が燃えている。燃えているのだ。ハルはあわてふためく彼女を強引に引つ張る。

「いいから逃げるぞ。次が来やがったんだ。」

ハルに引つ張られて部屋を出た。普段着を着た状態で眠っていて良かったと思う。次が来たということは敵が来たのか。エレベーターに向かったが作動していないようで動かない。そうだ、宗太は大丈夫だろうか。

「階段どこ、階段。宗太のところに行きましょう。」

今度は鈴花がハルを引つ張って走りだす。周りも燃えていて本当に熱い。

ドアを開けて非常階段に出る。突然体に当たる冷たい風と予想を超えた惨状に何も言えずドアを閉めた。ホテルだけじゃない。見える範囲の建物すべてが燃えているのだ。

宗太を探さなければ。鈴花は金属製の階段を音を立てながら降りる。宗太が泊まった階に着くとドアを開けて突入した。非常階段からの眺めは見たことがないためかまるで迷子になった感覚を味わいながらもなんとか宗太の泊まっている部屋に着いた。しかし、ドアが開かない。いや、開かないのは別段珍しくないがこういう時はどうしようもない。

「ちよつとどいてる。」

ハルはドアに触れるとかちゃりと金属音がなってドアが開いた。ハルに言いたい事があったが今は部屋に入った。

「宗太。宗太、大丈夫。」

鈴花は半ば叫びながら部屋に入った。宗太は寝ていたようで飛び起きて驚いている。彼女はハルが説明するよりも早く宗太の腕を掴んで非常階段へ向かって走った。

非常階段に出ると地上に向かってひたすら降りた。非常階段がまるで筒のようになっていて外に出られないため地上まで降りるしかないのだ。

地上に降りると建物から出来るだけ離れるとともにハルから黒い本を受け取った。本のページには既に次の敵が表示されていた。

「インフェルノ (Inferno) だな。」

インフェルノは地獄を意味する。真っ赤な炎とその中から伸びる複数の手が鈴花を地獄に誘いこもうとするのだろうか。次のページには倒し方が載っていた。数式は……。

「へいほうこん。平方根って何。」

ハルがあきれる。手短かに説明を始めた。

「手が、手が伸びてきた。」

ある一点を見つめながら、宗太は怯えている。先ほど居たホテルから無数の手が現れたのだ。いや、周りの火の中からも手が伸びて

きている。火のあるところならどこでも手が現れるのか。

鈴花は本の問題に集中した。さっさと解かなければこちらの身が危ない。

「鈴花、危ないぞ。」

誰かの叫び声。鈴花は次の瞬間には空高く飛んでいた。ハルが彼女を抱えている。しかし、宗太は居ない。

「ねえ、宗太は。宗太はどこ。」

鈴花の質問にハルは首を振りながらも答えた。

「お前が本に集中している間に、伸びた手が宗太を火の中に連れていつちまった。他の手も伸びてきたから空に逃げてきたんだ。」

鈴花はすぐに宗太を助けようと体を動かす。それを制止するハル。宗太を掴んだ手は大きな真つ黒い口に吸い込まれたらしい。

「宗太は死んだの。ねえ、そうなの。」

鈴花は現状が掴めず頭が混乱している。彼女が本を見ていたときに宗太は連れて行かれた。まるで実感が無い。

地上から炎に包まれた玉が飛んでくる。地上から敵が飛ばしているのだろう。ハルが器用に避けてくれている。

「いや、違うよね。宗太は私の邪魔になるからってどこかに逃げたのよね。そうよね。」

ハルは否定する。何度も。ハルの話では黒い本に聞いても、死んでいるか存在しないという回答しか得られないそうだ。本当に死んでしまったのだろうか。

「私が本を読んでいる間に。そ、そんな一瞬に……。」

「荒谷鈴花。」

ハルの大声に体が大きく波打つ。今まで聞いたことのないほどの声の大きさだった。彼女は思わず返事をした。

「あいつらはお前らを殺せるんだよ。今までもこれからも。ぐずぐずしてるとお前も俺も殺されるんだ。さっさと倒せ。」

ハルの言葉に弾かれるように黒い本の倒し方を見た。しかし、数式が消えている。

「もつと近づかないと無理か。遠すぎるんだな。」

ハルは急降下して燃え盛る街に戻った。数式も表示される。書く場所は黒い本のページ。各ページに問題が載っている。そこにチヨークで書こうとしたが書けない。

「手だ手を使い。指で書くんだよ。」

ハルは火の中から突然伸びてくる手を避けながら叫んだ。ハル自身どこから来るか分からない手に集中しているためか他の事にかまっていられないようだ。

鈴花は指で本のページをなぞってみる。なぞった軌跡が黒く色づいた。これなら書ける。彼女はすぐさま問題を解き始めた。たしか平方根は x を二乗すると x になるというものだったはず。

問題は全部で十問。記された数の平方根を求める問題（変数を含む場合は変数は0以上）が二問。 6 がついた数を 6 の無い数にする問題が二問。平方根同士の計算問題（四則演算）が四問。示された式を有理化（平方根を含む分数式の分母または分子、から根号を取り除く）する問題が二問ある。各ページ二問ずつ記されている。

ハルが縦横無尽に飛び回っているためかどこが地上でどこが空なのか分からなくなってきた。気持ち悪くなってきたがやるしかない。

まずは数の平方根を求める問題だ。この問題は記された数の二乗が何かを調べれば良い。その数字に 6 を付けたものが答えになる。二問目も二乗にして 6 をつければ良いので簡単だ。

すぐさま答えをページに記す。次のページにある問題にとりかかった。次は逆に 6 がついていない数をついていない数にする。これは例えば 36 なら 6 内は 6 の二乗になり答えは 6 になる。この要領で二問を解いた。特にここでは地味に九九が役立った。小学生のころの算数は意外と大事だと思う。

次に平方根同士の計算問題四問。これは加算減算は 6 の中が同じなら 6 前の数字が増減するだけ。乗算除算はそのまま 6 内の数字を計算してそのあと 6 をとるなりする。なんというか頭が痛い計算だ。

さつさと四問解いてそれぞれのページに書き込む。

最後は分数式の有理化が二問。有理化は分母にある のついた数に同じ数をかけて分母から平方根を取り除く事だ。分母にかけたものは同時に分子にもかける必要がある。かけた後はこれまでの問題のように 内の数字を小さくする。それを二問解くことですべての問題を解き終えた。

気持ち悪くなり、吐きそうになりながらもなんとか最後の二問をページに書き込んだ。勝手にページがめくれると順に問題が光っていく。すべての問題が光るとそれぞれのページが破けて鈴花の周りを回り始めた。

「ど、どういうことだ。なんなんだ。」

ハルは困惑している。何が起きているかハルにも分からないのだ。そのページたちは襲いかかる手を払いのけていく。それに気がついたハルは跳び回るのをやめて地上に降りた。

黒い本は独りでに空に浮かんでいく。それは黒い塊になり伸びてきた敵の手と炎を吸い込んでいった。ページが鈴花たちを守り、本が敵を破壊しているのかもしれない。

黒い本が手を吸い込めば吸い込むほど周りから炎が消えていく。

最後の手と炎を吸い込んだ時、そこには元通りの街があった。

「建物が燃えていない。すべて敵のせいだったのね。」

燃えていたのは敵本体であり、建物には影響をあたえていないようだ。鈴花は再び現れた本を受け取り、敵を倒したことを確認した。戦いが終わって安堵する鈴花。考える事が戦い以外の事になっていく。そのなかでふと宗太を思い出した。

「そなた、宗太は、宗太はどこ。見つけないと。」

思い出したように鈴花は辺りを探した。大声で名前を呼ぶ。徐々に声が叫び声に変わっていく。最後には泣きながら叫んだ。

「ハルちよつと飛んで。上空から探したいの。ねえ、お願いだから。」

ハルは鈴花に気押されて彼女を連れて空を飛ぶ。空から力いっぱい

い叫んだ。だけど、いつこつに見つからない。暗く静かな東京が彼女たちの眼の前に現れた。それが本当に彼が死んでしまった事を証明しているように思えた。

しかし、それでも彼女は叫んだ。宗太がどこかで生きていると信じて。

第二十六話 欠けたもの

第二十六話 欠けたもの

鈴花が目覚めたのは昼過ぎだった。彼女の頬にはまだ涙の跡が残っている。泣きつかれて眠ったあとにも泣いていたらしい。ゆっくりと起き上がった。どこかの部屋だ。いや、ここは昨日泊まった新帝都ホテルの部屋か。彼女はベッドから起き上がる。

「起きたか。ずっと泣いているからどうしようかと思ったよ。」
隣のベッドにハルが居た。ハルは鈴花の傍に来ると肩を軽く叩いた。

「宗太の事は残念だと思う。だが、仕方ない。ここはそういう世界だ。」

「そういう世界だつて言つたつて。この世界つてなんなのよ。なんで私じゃなきゃいけないのよ。」

鈴花は力なく反論する。何もかも分からなくなりそうだ。

「戦うのはお前だ。何故私なのなんて思っているだろ。選ばれたんだから仕方ない。俺とこいつは全力でお前を助けるだけだ。」

ハルは黒い本を取り出して見せた。全てはこの本なのだ。必要な情報も無いままただ何も分からず敵と戦っている。なんのために戦っているのだ。

「深く考えるな。さあ、チェックアウトして街に出よう。東京観光でもしようぜ。」

鈴花は身支度を済ませてホテルを出た。朝食も済ませた。一人の食事は寂しい。ハルは人間じゃないから数えていない。

「せっかく東京に来たんだ。観光でもしよう。どこか行きたいところはあるか。」

ハルに連れられて東京駅に戻る。突然観光と言われても鈴花には考えもつかない。それにそんな気持ちじゃない。

それでもハルはどこかに行こうと言う。どこか、行ってみたいところ。しばし考えた後、鈴花はまっすぐ西へ歩き出した。彼女の後をハルが付いてくる。車も人も居ない広い道路の真ん中を歩く。普段は車や人が沢山居るこの場所も、今は彼女とハルだけ。他に誰も居ないという怖さと居ないがゆえの清々しさが混ざり合う。

歩き続けると皇居が見えた。

「生まれて二度目だわ。まあ、それだけ。」

鈴花が再び歩き出そうとしたとき、ハルが彼女を抱えて上昇を始めた。地面が遠のいていく。

「ほれ、しっかり見てみな。」

地面ばかりを見ていた鈴花は、そこで上空から皇居を見ることが出来た。写真ではなく自らの目で。

地上にもどると鈴花はまたふらりと歩き出す。どこに行くかとハルに聞かれても答ええない。

東京駅から電車を乗り継いで着いたのは浅草。雷門をくぐれば人だかりの仲見世通り。左右には店が並び、沢山のものが売っている。直進して本堂で祈ると再び仲見世通りに戻った。

ハルに祈りの内容を聞かれると。

「早くこんな世界から抜け出したいってね。まあ、既に神様や仏様だつてこの世界には居ないかもね。」

鈴花はせんべい、雷おこしや人形焼を食べながらも、宗太と一緒に食べたかったなと心の中で思った。

「次はどこ行く。何も言わずに行かれるとこつちも困るんだよ。」

ハルは人形焼を口の中に放り込む。鈴花はハルの大きな口にどんどん食べ物を取り込みたくなった。しかし、放り込むものが無い。

鈴花はふざけるのを止めて次の目的地を考えた。既に陽は傾き次の場所に着く頃には外は暗くなっているだろう。

「せっかくだから港の赤い塔へ行こうよ。」

東京にせっかく来たのだから東京タワーに上るのが良いと思う。

だつて、こんな状況はもうこの先無いだろうから。彼女たちは東京

タワーを目指して移動を開始した。

東京タワーに到着した時には辺りは暗くなりタワーはライトアップされていた。

鈴花たちはエレベーターで展望台へ入った。せっかくなのでハルが特別展望台も見られるようにしてくれたい。それに他の客は表示させず必要な人だけ表示させている。貸切みたいでちょっと贅沢な気分になった。

鈴花は展望台に入ると、フロアを回って周りの景色を見た。

「ほお、面白いところに立っているな。足元見てみる。」

鈴花はハルの声で床を見る。直後彼女の背中に嫌なものが走った。床が透けて真下が見えているのだ。これはどう見ても反則技だろうと思う。底が抜けたら落ちる。

鈴花はゆっくりと透けている床から離れた。ハルが彼女のそんな姿を見て笑っている。そんなハルを置いて彼女は二階に上がり一階との差を比べ、特別展望台へとさらに上がった。地上を見れば足がすくむほどの高さ。高いところが好きなら良いと思うが、こんなに高いと怖い。この高さから落ちたら命が無いと想像するからだ。外は暗くなり、真つ暗な世界で星だけが光っている。タワーから見えた星は綺麗だった。

「安心して星が見られる世界なんて、何時来るのかしらね。そのために私は……。」

鈴花はそれ以上言わず踵を返すとエレベーターに向かって歩きだそうとした。背後に居たハルの表情に彼女は歩みを止める。ハルは黒い本を素早く取り出すと彼女に差し出した。

「敵さんが来たぞ。」

鈴花は本を受け取りゆっくりと開いた。開いたページにゆっくりと絵が表示されていく。ただ白い何かページを埋めていく。これが今度の敵だろうか。

「おいおい、なんか危なくなってきたぞ。鈴花、外を見る。」

鈴花はハルの声で外に視線を移す。地平線の辺りが白く光りだし

ている。その白い部分は徐々に大きくなっているように見えた。夜だというのにこの光は何だろうか。彼女が再度本を見ると絵は完全に表示され、情報が表示された。絵はただただ白いもやが描かれているだけだ。

「blankだ。」
ブランク

鈴花は本から目を離すと地平線に見える敵を見た。先ほどよりも明らかに白い部分が多くなっている。滲み込むように暗い夜の空を白く染めていくその様は世界のすべてを真っ白にしようとしているように思えた。

「白だけで埋め尽くそうって考えなのね。」

鈴花はエレベーターに向かって走り出した。

敵は世界を白く染める。出来上がるのは、昼も夜もない世界。

第二十七話 白い世界の中で

第二十七話 白い世界の中で

鈴花がエレベーターに乗り込むとハルも乗り込んだ。一階に着くと薄暗く誰も居ない。敵が現れたために表示されなくなったのだろう。彼女たちはすぐに外に出る。今は夜なのに何故か明るい。見上げれば白に染まった空が見えた。

「ハル、上空から見たいの。」

ハルは鈴花を後ろから抱える。彼女たちは高いビルを越えて空高く上った。建物よりも高い位置まで来ると、周囲が良く見渡せた。

遠くからこちらに移動してくる十個の白い物体が見える。それらは彼女を囲むように向かってくる。物体から地上へと何度も細い光線が出されている。何なのかわからない。しかし、良くないことだけは分かった。

鈴花は黒い本のページを見た。既にすべきことが表示されていた。問題は二元連立方程式が十問。何時もの通り式と答えを書けという事らしい。一問に二式なので半分にして欲しいぐらいだ。書き込む場所は地面であって床では無い。地面に書くなら書きやすい道路が良い。

「地面に書けて。ハル、すぐに降ろして。」

鈴花の言葉でハルは地面に降りる。彼女はハルから離れると、チヨークを取り出して問題を地面に書き写した。二元連立方程式は解き方として代入法や加減法がある。分数にならない式ならば代入法のほうが計算時間は少ないはずだと彼女は思った。ざらざらした道路の真ん中でチヨークが音を立てて削れていく。

「な、なんだこりゃ。鈴花気をつける。」

鈴花がハルの声に周りを見れば建物や地面が真っ白くなっている。白く染まった建物と地面の境界はあいまいでまるで一つの物体のよ

うに見えた。そして、その上から現れた敵。丸く白い物体。彼女はそれを見ると今解いている問題を急いで解き終えようとする。本能が囁いているのだ。これまでとは比べものにならないくらい危ないと。

ハルの声が聞こえたと同時に体を掴まれて別の場所に移動していた。元居た場所を見れば地面が白くなっている。まるで白いペンキを撒いたような状態だ。その中でも一部地面が見えていた。そこは先ほど自分が式と答え書いた場所だ。

鈴花はすぐに周りを見る。遠くに見えていた丸く白い物体。それらが細い光線を放ちながら彼女たちに向かってくる。よく見れば物体から出る細い光線は当たった場所を白く染めるようだ。

「と、とりあえず逃げないと。」

鈴花はハルに体を掴まれたまま自分だけ白い物体から遠ざかろうとする。直後、体に衝撃が走った。ハルに掴まってすぐにその場から離れる。よく見れば白く染まった部分に触れていたらしい。

「なんなのこれ。白い部分に触れられないわ。」

そこで鈴花は思い出す。この白い部分はヴェニスの水と同じものなのかもしれない。だとしたら、かなり厄介なものだ。

「白い部分を避ければいいんだろ。行くぞ。」

ハルが動くことによって実際に遠ざかることが出来た。敵とほぼ同じ高さまで上昇すると改めて敵を見た。数えてみれば九体で、一体はどこかへ行ってしまったようだ。九体すべてがこちらに向かって近づいてくる。

「こんな沢山の敵が居る中で、どうやって倒せって言つものよ。」

鈴花はどうしようかと考える。この数の中で地面に降りれば囲まれて自分も白く染められてしまうだろう。染まったらどうなるのだろうか。良いことはなさそうだ。

鈴花たちは敵を見ずにひたすら突き進む。しばらくして背後を見ると、五体の敵が見える。半分はどこかに行ってしまったようだ。それとも相手は五体だけで済むと思っっているのだろうか。

「馬鹿にして。絶対に倒してやる。」

鈴花ははすぐに地面に降りて、問題と答えを書き始める。ハルは敵を見ていると言って彼女の背後についた。

焦る気持ちが脳を高速に回転させる。頭が熱くなるのを感じながら二問を解き終えた。我ながらなかなかだと感心する。

「来やがった。離れるぞ。」

鈴花はハルに背後から掴まれて上空へと上る。彼女が背後を見ればすぐ傍まで白い物体が近づいていた。まだ五体、いや六体に増えている。解いても効果が無いのか。いや、解いても何も無いはずはない。何かあるはずだ。

鈴花たちはさらに別の方向へ移動を始めた。すると、目の前に白く染められた地区が現れた。既に敵に染められているらしい。他の方向に行こうにも、同じく染まっていて行くことが出来ない。二人は白く染められた地区の手前で降りた。

「鈴花は書いてる。俺は逃げ道を探す。」

ぐるぐると辺りを回るハルを背後に鈴花は地面に問題と答えを書いた。彼女は自分の呼吸が荒くなっている事に気付くが気にしないことにした。気にしたところで何も変わらない。

「来たぞ。書き終えたか。」

鈴花が最後の一文を書いた後、敵を見ると六体のうち一体がその場で消滅した。そして、新しく一体出現する。やはり問題を解けば消えていくのだ。減っていないと思っただのは残りの敵が追加されて再び六体になったからだろう。四問解いたのでこれで残り六問。今眼の前に居る敵で全部だ。

ハルに掴まって上空へあがる。直後、ハルはまだ白く染まっていない部分に突入した。つまり、敵が居る方向だ。

「ちょ、ちよつとどうする気よ。」

ハルは鈴花の言葉を聞かずに降下する。建物の中に伸びる道を飛んでいく。彼女はその間に次の問題を見た。地面をさがしてからでは時間が勿体無い。頭で解ける分は解こうと思った。

上空に見える敵。放射される細い光線。白く染まる地面や建物。ハルは無理やり光線を避けながら飛んだ。振り回される鈴花はハルから落ちないようにしっかりと掴まる。ある地点まで行くとハルは速度を落として地面へ降りた。

「嘘だろ。この辺はさつき……。」

ハルは目の前の状況に驚愕する。それを尻目に鈴花は問題を解く。解けば解くほどこっちが有利になる。いや、解かなければ負けるのだ。

「鈴花速く書くんた。このままだと俺たち動け無くなるぞ。」

ハルの言葉が鈴花に襲い掛かる。白で囲まれたらおしまいだ。まるでリバーシのようである。彼女は頭が痛くなるが気にしない。無理してでも終わらせないといけないのだ。

先ほどの敵たちが現れた。鈴花は敵を見るが早いか、敵から細い光線が放たれた。放たれた先は彼女が数式を書いた部分。光線が到達した部分がゆっくりと液体が染み込むように白くなっていく。彼女は殴り書きで答えを最後まで書き終えた。彼女は逃げるようにその場から離れようとする。しかし、急な吐き気にその場にうずくまった。

ハルは彼女を背後から掴んで上空に上る。彼女は吐き気で泣きそうになった。なんでこんなことしているんだらうか。

鈴花は上空に上りながらも先ほど書いた式を見た。一部少し白くなっているところに問題と答えを書いてしまったが、その部分はすぐに白さがなくなり元の色に戻った。六体のうち一体は消えて残り五体になる。あと半分だ。この敵を倒せば帰れるのだからか。それに値する凶悪さを持ち合わせている。

「残り五問。早く終わらせないと。」

鈴花はすでに余裕が無かった。落ち着いていたら囲まれる。ハルは彼女を抱えると白く染まっていけない部分を選んでまた移動した。しかし、すぐに先に進めないことに気がつく。

「駄目だ。どうしようもない。」

ハルはひどく落胆している。その場に下りた。

鈴花はここで書くしかないと思つて本の問題を見る。すると、一問増えていた。その式は赤く表示されている。彼女はすぐに地面にその問題と答えを書いた。背後から五体来ているのだ。囲まれるならその前に解きたい。必死に赤く表示された式を解いた。

「嘘だろ。元の建物に戻つていく。」

見上げればハルの言うとおり周りの建物が白から元の色に戻つていった。鈴花は再度本を見る。赤く表示された式は消えて代わりに残り時間が表示されていた。

「残り時間つてどうということ。」

それを聞いたハルはすぐに鈴花を抱えて移動を開始する。彼女が残り時間の上の行を見ると、内容が理解できた。

「五分間だけ正常な世界に戻すつて。敵からの攻撃も止めてもらえらうしいわ。」

鈴花はそこで考えた。五分で五問。敵からも少し離れたから、なんとか解けるんじゃないだろうか。彼女はすぐにハルに言つて地面に降ろしてもらつた。問題を見て書き始める。既に残り時間が四分近い。この時間に終わらせればこちらの勝ちだ。

しばらくして彼女は何か気配を感じる。しかし、気にしないで書き続けた。今はそんなことに気を配っていられない。

「さっきの四体が来たぞ。早く答えを書いてくれ。」

鈴花はハルの声で一瞬見上げる。すると、残り四体が彼女とハルを囲んでいる。追いついてきたのだ。四体も居て大丈夫か。いや、大丈夫じゃない。

「倒す、倒すわよ。絶対倒してやる。」

鈴花は自分に言い聞かせるように言つた。こんな所で終われない。終われないのだ。すべての敵を倒すまで立ち止まらない。宗太のために、自分のために。書かなきゃ終わりだから。すべて終わっちゃうから。

鈴花は宗太の事を思い出して泣きそうになる。彼は敵に殺された

のだ。これ以上そんな真似はさせない。彼女は濡れた瞳で再び問題を解き始めた。

鈴花が最後の問題を見たとき、残り三十秒だった。彼女はなんとかしても時間内に終わらせるべく問題を解く。体から汗が噴出す感覚を味わいながら片方の変数を出した。

「まずい。元に戻り始めたぞ。」

鈴花はハルの声を聞きながら残りの答えを求め。その答えを書いているとき、眼前に敵の細い光線が放たれた。光線はこちらに向かってくる。彼女は最後の答えを素早く書くと横に転がりながら避けた。敵を見ると最後の一体がゆっくりと消えていく。

鈴花は完全に消えたことを確認すると黒い本を見た。敵の表示されたページが現れて赤い文字が表示される。倒したということだ。そこで彼女は一度深呼吸をするとハルを見た。敵を倒したのだ。良かったと思っているだろう。しかし、ハルはうれしそうには見えな。彼が見る先は先ほどと同様に白い世界のままだ。彼女はそれについて発言しようとして口を開くが声を発する前に彼の声によって遮られた。

「来たみたいだぞ。最後の敵が。」

ハルの言った「最後」という単語が気になった。やっと次の敵が最後であると同時に先ほどの敵が最後ではなかったということだ。

鈴花が黒い本を見れば、ページが自動的にめくられて何時もの通りに敵の情報ページに移動する。そして、敵の絵が表示され始めた。しかし、何か様子が変わる。絵は表示されず、代わりに「Acquisition failure」と出ている。この文についてハルに聞こうとしたとき、彼はある方向を見て驚いた。

「嘘だろ。どうしてお前が。」

鈴花もすぐにハルと同じ方向を見た。その先に見えたのは宗太だった。

「宗太。無事だったんだね。」

鈴花はうれしくなり近づこうとする。宗太は生きていたのだ。し

かし、それをハルが制止する。彼女は彼の手を振りほどいて、ハルを見た。

「どういうことよ。良いじゃないの。宗太なんだよ。」

鈴花の言葉に宗太は笑い出す。これまで聞いたことの無い気持ち悪い笑い方だ。その姿に鈴花の体は固まり、動けなくなった。ハルは彼女の手を掴んで自分の隣まで引き戻す。宗太はひとしきり笑うと二人を見た。

「先に断っておくが、私は宗太では無い。」

うつむき上目使いでこちらを見る宗太は明らかに別人に見えた。

鈴花は黒い本のページを見る。ハルも同じくページを見ると、宗太を見た。

「奴が^{ヌル}nurだ。」

ヌルと呼ばれた宗太は何度か頷くとこちらを見た。

「正確にはこの宗太という対象に宿る存在を操るのが私であり、この世界そのものなのだ。」

ヌルは良くわからない事を言いながら両手を広げて空を見ている。人間なら変な人確定だ。それに空は今も気持ち悪いほど真っ白いままだ。ヌルは手を降ろすとこちらを見た。

「ハルよ。君がこの世界の生存者を気安く仲間に入れた事が仇になったな。お前は知っていたはずだ。こいつが感染者であることを。」

鈴花がハルを見ると、彼は何も言わずヌルを睨んでいた。彼女はこの状況では「感染者」という言葉について聞くにも聞けないと思っ

た。「宗太という男は今私の中に囚われているよ。何も出来ずただ私たちを見ているだけだ。それとこの機会に話しておくべきことがあるな。」

ヌルは肩を微かに揺らして笑う。真っ白い世界に存在する姿のためか、遠くから見ても動きが見えた。

「私はこの世界に侵入してから、世界の混乱の内にこの男を操り始めた。簡単な事さ、仲間に寄生させてそれを介してこいつ自身の行

動を制御する。ただそれだけだ。こいつが生き残ったのは何故だか分かるか。こいつが自分の周りに居る人間を全員殺したからだよ。」

又ルの予想外の言葉に鈴花は言葉を失う。生まれてくる怒りに身を任せて又ルを睨み付けた。又ルは彼女の視線を気にせず続ける。

「そういえば、この男は荒谷鈴花という人間を探していると聞いていただろう。その女なら、私がこの男を操っている時に殺したよ。すぱっとね首を切ったんだ。綺麗に胴体と首がお別れしたよ。」

又ルはその時の状況を身振りて表す。その行為は先ほどの発言に上乘せするように鈴花に衝撃を与えた。しかし、発言している又ル自身は楽しそうだ。彼にとってはまるで楽しい遊びであるかのように見える。そして、彼は突然笑い出した。

「今私の中で君の知る宗太が暴れているよ。仕方ないだろう。自分が殺した人間を必死に探していたんだからな。」

又ルの笑いはなかなか止まらない。気持ち悪い笑いが白い世界に広がっていく。彼はしきりに叫べ泣き叫べと自分に言っている。つまり宗太に言っているのだろう。鈴花は彼の行為に、もう一人の自分の結末に体の中から言葉が溢れ出てきた。

「あんだ、最低だよ。なんのためにこの世界の人を殺したのよ。」
鈴花の口から出てきたのはこれだけだった。まだ他にも言いたいにもう出てこない。わめき散らしたい衝動を抑え込んだ結果かもしれない。

「君は別の世界の荒谷鈴花だろう。この世界に来てからずっと見ていたよ。私は君と同じように別の世界の人間に創られてここに送り込まれた。この世界を破壊するためにね。」

又ルはそこで笑いながら首を横に振る。自分は何をやっているんだということだろうか。笑い終わると、鈴花を見た。

「まあ、話はこれぐらいにして始めようか。」

又ルは両手をいっぱい広げる。すると、先ほどの敵によって白く染められた部分から物体が現れ始めた。それは木々の生長のように伸びだし完全な姿となる。現れたのは様々な兵器だ。

「そして決めよう。どちらが本当の破壊者かを。」
又ルの言葉で火器類の銃口が鈴花に向けられる。無数に聞こえる
撃鉄を起こす音。

鈴花が周囲を兵器で囲まれた今。最後の戦いが始まる。

第二十八話 本当の破壊者

第二十八話 本当の破壊者

周囲の火器類すべてが鈴花へ向けて弾を発射する。直後、彼女の眼前を半透明なものが覆う。前にも同じものに覆われたことがある。これは、ハルだ。

体に伝わる衝撃とともに体のまわりに無数の弾が食い込む。弾は鈴花の体には到達せず、すべてハルの体が受け止めた。止まらない攻撃。彼女はハルに包まれたまま移動を開始する。どこか、先の戦闘で白くなっていない場所に逃れたい。又ルは彼女が走る間も容赦なく弾を撃つ。彼女は衝撃に耐えつつ走った。

鈴花は先の戦闘の時に同時にすべての敵が現れなかった。これは東京中を白くするためだったのだろうか。いや、範囲はもっと広いかもしれない。さてどうする、どうする。

鈴花はただ海の方へ走った。特に深くは考えていない。ただ、ごちゃごちゃした町並みを走って探すよりは良いと思った。

直後、激しい揺れが鈴花を襲う。大きな地震だ。見上げた高層ビルがぐらぐらと揺れ、ビルに亀裂が入っていく。これは危ないと彼女は立ち上がるうとするが激しい揺れで立ち上がれない。このままでは下敷きになる。

「た、立てない。どうしたら……。」

徐々に揺れが収まってくる。すぐに立ち上がりおぼつかない足取りでその場を離れた。背後で何かか軋む音がする。振り返ればビルの亀裂が入った部分から折れ曲がり上層部分が地面に向かって落ちてきた。

直後、地震のような揺れと煙が鈴花を襲う。なんとか無事な建物に隠れてやり過ごした。

「もっと、離れないと。」

鈴花は、揺れが収まり煙が舞う中を走りだした。こんな状態では命が幾つもあったても足りない。

鈴花の背後で何かが発火する。鈴花は衝撃で前方に転がった。立ち上がりながら周囲を見ると、再び遠くから弾が飛んできた。

「私が何したって言うのよ。」

弾は地面に落下すると爆発音とともに地面をえぐる。破裂とともに直後周囲に広がる破片の混じった爆風。まともに当たったら鈴花の体は無くなる。今は何も言わないハルが守っているから生きていくといるだけだ。彼女は必死に逃げた。

「さあ、何をしているんだい。逃げてばかりじゃ楽しめないじゃないか。」

又ルの気持ち悪い笑い声が背後から聞こえてくる。鈴花は声が近づけば近づくほど遠ざかろうと懸命に走った。なんとしても又ルから離れないといけない。

鈴花は息が荒くなりながらも、なんとか白くなっていない地域に入った。彼女が背後を見れば又ルは遠くからこちらを見ている。又ルは彼女の居る地域に入ることなく自分の陣地に居座るようだ。彼女は適当な位置に倒れるように座り込んだ。すると周りを覆っていたハルは剥がれ落ち、いつの間にか消えてしまった。

「ハ、ハル。私一人で戦ってというの。ど、どうしょ。お願いだから助けてよ。」

鈴花はハルが居た場所を見て叫ぶも彼が帰ってくることは無い。泣きそうになりながらも、一人で戦うことを決意して本を開いた。すると、自動的にページがめくれる。何も書かれていないページが開き、その次のページが開いた。そこにはハルの姿がある。その絵が光りだし、絵の中から立体的な姿が浮かび上がってきた。ハルが再びこの世界に現れたのだ。

「ちよつと、ハル小さくない。」

本から出てきた三体目のハルは先ほどの彼の半分ほどしかない。これまでの大きさを見ると頼りなさが十分ある。小さなハルは自分

の体を何度か見ると鈴花を見た。

「俺まで出るなんてどれだけ面倒な奴らなんだよ。」

ハルは大きいため息をつきつつ羽を飛ばたかせて飛び始めた。小さくなくても飛べるようだ。

「おい、ぼさつとするな。ここが安全だなんて誰が保証してくれるんだ。」

黒い本のページには倒し方が表示されていた。問題は二次方程式の解を求めるということらしい。問題は全部で五問のようだ。インフェルノの時と同様に問題と解答欄が一箇所になっている。チヨークは役目を終えたということか。

「チヨーク要らないみたい。返しとくわ。」

鈴花はハルにチヨークを投げるとすぐに問題を解き始めた。今はただ二次方程式を解くしかない。因数分解はある程度の形は決まっているものの、どの形になるかがなかなか分からない。その点が厄介だ。

鈴花が三問目を解きおわると、一度深呼吸しようと思いをあげた。

その時、前方の光景に固まる。

「なんなのあれ。人がいっぱいいる。なんで、ここに居るの。」

鈴花が指差す先には沢山の人々。何も言わずこちらに向かって歩いて来る。一見正常な人間に見えるが、虚ろな目で無言の行進を続ける彼らに底知れぬ恐怖を覚えた。

「あいつらまさかここまでやる気かよ。仕方ない。鈴花、本を空に投げろ。」

鈴花はハルの言葉に意味が分からなかったが、人々はさらに彼女たちに近づいてくる。よく分からないが、囲まれる前に出来ることはなんでもするしか無い。彼女は計算途中の本を閉じると思いつきり空に投げた。

空中に投げ出された黒い本は丸い物体に変わり、細長い棒状の物になって落ちてきた。鈴花は落とさないように受け止める。触れると色が付き武器であることがわかった。これは刀というやつだろう

か。

「鈴花、あいつらに向かって振れ。振って振って振りまくれ。」

「いや、無理よ。私と同じ人間なのよ。こんな武器で斬れる訳ないじゃない。」

近づいてくるのは鈴花と同じ人間だ。無言で行進してくるので正直怖い。それ以外は普通に見える。彼女はこんな人々を斬れるほど割り切れていない。これまで戦えたのは相手が人間では無いからだ。

「早く斬るんだよ。あいつら人間じゃない。殺されたいのか。」

ハルの怒声が響き渡る。人々はついに鈴花たちを囲み、手を伸ばしてきた。刀を持つ手に力がこもる。

誰かの手が鈴花の首を掴みゆつくりと力を加えていく。他の人間も腕や首に爪をたてる。鋭い痛みが走った。彼女はそれらの手を振り払う。このままでは彼女自身が殺されてしまいかもしれない。殺されるくらいなら殺すしかない。

「やるわよ、やってやるわよ。殺せばいいんでしょ。わかったわよ。」

鈴花は近づいてくる人々に向かって刀を振り下ろした。振れば抵抗なく叫び声とともに人が消えていく。その様に何か大変な事をしている気持ちがあつたが、今はそれどころでは無い。迷いを断ち切るように何度も振り下ろした。思ったほど刀は重くなく、何時か見た時代劇のシーンを真似て必死に振った。

「なんでこんな事しなきゃいけないのよ。」

鈴花は叫びながら向かってくる人々を斬っていく。人々が目の前で簡単に消えていく。こんな事を何も感じずに続けてはいつか人じやなくなりそうだ。泣きそうになるのをこらえた。だけど、それも無理な話だった。

「あ、あなた。まさか。」

眼の前に現れたのはこの世界の荒谷鈴花だった。隣には見知った母親が居る。

鈴花は嫌々と言いながら後退する。流石に知っている人間を斬れない。しかもこの世界の自分を斬るなんてそんな度胸は無かった。

「駄目。私にはもう、無理。」

鈴花は逃げた。ただ逃げたかった。こんな事もう嫌だ。ハルの声が背後から微かに聞こえたが聞き取れない。聞き取りたくない。

走りたどり着いたのは東京湾だった。ついに海に来てしまった。けど、ここからどこに行く。

「鈴花。こっち見る。」

振り返った鈴花の頬に鋭い痛みが走る。ハルがビンタしたのだ。痛みでその場に倒れこんだ。

「なんなのよ。なんで私を殺さなきゃいけないの。なんで私にそんな事させるのよ。わからないわよ。」

鈴花は頭を抱えて泣き叫んだ。この行為は駄目だ。彼女にはできなかった。自分を殺すなんてそう簡単に出来るわけじゃない。

「だが、誰も待つてくれないんだよ。」

ハルの視線の先には先程の人々。もう追いかけてきたのだ。先頭にはこの世界の荒谷鈴花が居る。もう、見たくもない。

「じゃあ、俺がお前を殺してこよう。」

ハルが刀持って向かおうとする。鈴花は彼の腕を掴んで静止した。「殺さなきゃ先に進めないの。」

ハルはなにも言わず頷いた。鈴花は刀を受け取って人々に向かって歩き出す。決心は着いてない。逃げていたら元の世界に帰れない。しかし、この世界の彼女をこの手で殺すことはできない。

立ち止まった鈴花にこの世界の彼女と他の人々は近づいてくる。彼女は近づいてくる人々をどうにか斬っていく。この世界の彼女と母親以外を斬ってきた斬りまくる。

案の定、最後には二人だけ残った。何もしないで居ると二人の腕が体に絡みついてくる。その腕を振りほどくと二人と対峙した。

鈴花はゆっくりと刀を振り上げる。

「母親殺しと自分殺しか。これもある意味自殺なのかな。」

鈴花は笑うしか無かった。笑わなければ耐えられない。

鈴花は思い切り二人に刀を振り下ろした。

直後響き渡る悲鳴。鈴花の悲鳴か。いや、違った。この世界の彼女と母親の悲鳴だった。二人は血を流しながら彼女を見ている。その目ははつきりとしていた。

「や、やめて。おねがい、助けて。」

初めて聞いたこの世界の鈴花の声。彼女はしてしまったことの重大さに絶叫した。それでも止められない。彼女は最後までやろうと絶叫しながら刀を振り上げた。

「お願いだから死んで。」

鈴花は絶叫の中、二人に再度刀を振り下ろした。もう一度振り下ろそうとしたとき、二人は既に事切れていた。

血だらけになった二人の亡骸はゆっくりと消えていく。

鈴花はその場に座り込んだ。自然と涙がこぼれた。彼女は殺したのだ。この世界の彼女と母親をこの手で。

鈴花の気持ちをぶった切るようにヌルの笑い声が聞こえてくる。

刀は再び黒い本に戻った。まだ、何も終わっていないのだ。唇を噛みながら残りの二問を解き始めた。

「初めてだわ。ここまで相手を憎んだのは。」

鈴花にとっては初めてのことだった。無論無差別殺人者も憎いが、自分を殺させる奴はその上をいく。だって、普通じゃありえないから。

「あと、一問。」

あと一問で終わるうれしさが鈴花の体を満たす。あと少し、あと少しで終わるんだ。

そして、最後の問題を解き終えた。すべての数式が青白く光る。すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあがった。

「最後はヌルに叩きつけろと。そういうこと。」

鈴花は笑みを浮かべながら勢い良く黒い本を閉じる。事情を理解

したハルは鈴花を掴んで又ルの所まで移動を始めた。幾らか移動速度が遅い。それに今度のハルは小さいので片腕しか掴めない。

再び敵の陣地に到達する。案の定、沢山の弾が飛んできた。ハルはなんとか弾を避けていく。直後、鈴花の体に激痛が走る。彼女の異変に気がついたハルは、彼女を連れてすぐにビルの間に隠れた。

激痛と熱い何か鈴花の胸の辺りにある。彼女は胸を見てぎよつとした。胸を撃たれて血を流しているのだ。あ、これは死ぬなと本気で思えた。気づけば息苦しくなっている。

「ねえ、わたし、死んじゃうのかな。」

鈴花はハルに手を伸ばす。ハルはその手を握ってくれた。

「馬鹿、死なせるわけ無いだろ。仕方ない、最後の手段だ。」

ハルは鈴花の体の上に乗る。何をしようというのだろうか。すると、ハルの足元から見えなくなっていく。半分までいったときに、はじめてハルが彼女の体の中に吸い込まれていることに気がついた。「う、うそでしょ。」

ハルは完全に鈴花の体の中に入ってしまった。驚く彼女をさらに驚かせるように胸の所から弾がひとりで飛び出し、傷が跡形もなく消えていった。ハルの声が体の中から聞こえてくる。

「俺だ。もう、お前の傷を癒すことはできない。だから、俺ごとお前の中に入ることで傷を癒した。もう、飛べないし傷も癒せない。ここから先は死ぬ気で行け。それと、追加の問題がお待ちだ。」

鈴花は起き上がり黒い本を開いた。そこには追加で五問の二次方程式の問題がある。またかと思いつつも早速解き始めた。

解き始めたものの問題を見ても答えが分からない。解けないのだ。どうしたものだろう。どうしようかと思っていたら。ハルが話しかけてきた。

「二次方程式つていつたら解の公式があるだろ。」

ハルの声で黒い本に式が表示される。ハルに説明されるとどこかで見ただことがある程度であった。きちんと習っていないのかもしれない。そんな事を考えていると、ハルが怒鳴ってきたので早速解の

公式を用いて解きだした。すると、不思議なことに簡単に解ける。その勢いのまま最後の問題まで解いた。解の公式さえ分かれば簡単な問題なのかもしれない。

問題が光ると次にすることが表示された。敵陣に黒い本を投げ込めということらしい。今いる通路の角から五メートルぐらいで敵陣だが、その前に撃たれるだろう。どうにかできないものか。通路にある建物に入ってそこから投げようとしたが扉と窓はどこも開かない。

「これは確実に撃たれるわね。死なない程度に避けないと。」

鈴花は意を決して角から飛び出した。勢いをつけて敵陣に本を投げ込む。すぐに角に戻って隠れた。痛いと思ったら何発か体に食い込んでいる。胸に当たらなかつただけ良かったと思うことにした。再度角から敵陣を見れば、黒く大きな玉が周りの武器や弾を吸収していた。彼女の体から痛みとともに弾が飛び出して同様に吸い込まれていく。痛みは消えないが、弾を取り出せただけ良かった。すべての武器と弾を吸い込むと黒い本は地面に落下した。

鈴花は痛みを我慢しながら黒い本を拾い上げる。本を開くと、再び光り輝くは又ルに叩きつけるとの事。やっと又ルに辿りつけそうだ。

撃たれた箇所をかばいながら歩き出そうとすると、眼の前に又ルが現れた。

又ルの体は震え、腰が少し引けているように見えた。そこで、鈴花が小さく笑うと、又ルは首を左右に何度も振った。何かを追っ払っているのだろうか。

「君たちは本当に強いね。ここまで強いとは思っていなかった。その力を使えばこの世界も自由に扱えるよ。どうだい、憎しみ合うのは止めて母さんや私と一緒に新しい世界を作らないか。みんな人間たちの……。」

鈴花は堪えきれず笑い出した。笑い声が世界に広がっていく。「馬鹿じゃないの。あんたはここで死ぬの。そんな話に付き合っ

られないわ。」

鈴花は黒い本を持ち直すと、又ルに近づく。後退する又ルに黒い本を思い切り叩きつけようとした。しかし、又ルに当たる寸前で彼女の手から体へ衝撃が走る。彼女が又ルに本を押し込もうとするが一定以上近づかない。

間近から又ルの気持ち笑い声が聞こえてくる。

「この世界の自分を殺した気分はどうだい。」

鈴花は先ほど殺したこの世界の彼女と母親を思い出す。その光景に沸々と怒りがこみ上げてきた。彼女は又ルの笑い声をかき消すように叫んだ。

鈴花はなんとしても本を又ルに叩きつけようとさら力を加える。力を加えても動かない。それでも力を加えていく。すると、突如ハルが彼女の体の中から出てきて、次に黒い本へ入っていった。黒い本が一瞬光ると、押し返されていた力が突然消える。

鈴花は加えていた力をそのまま本に託して又ルへ叩き付けた。頬にビンタをするように黒い本をぶつける。彼女は力を加えたために音がするかと考えたが、何も音はせず叩き付けた本は又ルの中へ消えていった。

鈴花は一步後退して今後の展開を待つ。

「終わりだ。すべての終わりだよ。」

又ルはそれ以上は何も言わず地面に倒れた。直後ひどい揺れが彼女を襲う。しゃがみこみ周りを見れば世界が揺れているようだ。

鈴花が又ルを見れば眠りから覚めたかのように目を擦っている。

元に戻ったようだ。彼女が宗太に近づこうとしたとき。

「もう俺とお前の仕事は終了だ。帰るぞ。」

ハルは鈴花の手を持って引っ張り上げようとする。彼女はその手を振り解いて宗太に近づいた。

「宗太、ねえ宗太ったら。」

宗太は鈴花の声が聞こえているのか、ゆっくりと目を開いた。彼は笑顔で彼女に手を差し伸べた。

「助けてくれて、ありがとう。」

ヌルは消えて元の宗太に戻ったようだ。しかし、鈴花は彼にありがとうと言われる事なんてしていないと思った。彼女は必死に首を横に振る。

「違う、違うわ。私はただこの世界を破壊しただけよ。」

結局彼女が世界を破壊することですべて終わったのだ。ヌルが言った言葉が彼女の頭に響く。

『そして決めよう。どちらが本当の破壊者かを。』

本当の破壊者は鈴花だったのだ。彼女はうずくまり力の限り叫んだ。この世界の彼女を殺してまで得たかった結果がこれなのか。彼女の言葉にならない声が世界に響く。彼女は大切なものを破壊した。それらはもう二度と戻らないのだ。

鈴花は叫び続けていると、ふと地面に足が付いていないように感じた。目を開ければ地面が遠くにある。

鈴花は辺りを見る。彼女を掴んでいるのはハルだ。彼女が上空に上がるとともに幾つもの黒く丸い円が上空に現れた。それはすべてものを飲み込むには十分な大きさだった。

「ちよつと、待ってよハル。宗太も一緒に連れてってよ。このままじゃ危ないじゃないの。」

鈴花は暴れるが、今度はしっかりと掴んでいるためかハルから離れることは出来ない。彼女は無駄な抵抗を止めて地上にいる宗太を見た。彼も立ち上がり彼女を見る。

さらに鈴花の体が上昇する中で、彼女は宗太に手を伸ばす。決して届かなくても彼女は手を伸ばし続けた。

鈴花が次に気がついた時には、真っ白い世界に居た。何も無い真っ白い世界だ。先ほどの世界とのつながりを示すのは彼女が着ている服だけ。

「目覚めたようだね。お疲れ様。」

白い世界のどこからか男の声が聞こえてくる。鈴花は辺りを見回す。それでもどこから聞こえてくるのかはわからない。その声は嫌に落ち着いていて気分が悪い。

「お疲れ様って何よ。此処から出してよ。宗太に会いたいだよ。」
鈴花は白い世界へと叫ぶ。どこに居るのかわからないならどこにでも聞こえるように大声で言うしかない。

「駄目だ。奴は感染者だ。助けることは出来ない。」

鈴花は体の力が抜けるとともに地面にひざと両手を付いた。感染者とは何か。ヌルも宗太を感染者と言っていた。

「感染者って何よ。宗太を早く助けて、お願いだから。」

彼女は白い空を見上げて懇願する。彼を見捨てることはできない。ただ、それだけだ。短い間であったが、記憶が蘇ってくる。

「鈴花。君を選んだばかりに辛い思いをさせてしまったね。本当に済まない。」

瞬間、鈴花の体の中を何かが突き抜けた。男の言葉。呼ばれた「鈴花」という名前。彼は何故彼女の名前を知っているのだろうか。

彼女は頭の中で彼の声と言葉を繰り返す。この声を何処かで聞いたことがあるような気がした。

「この声を昔何処かで聞いたことある。けど、どこで聞いたのか思い出せないわ。ねえ、あなたは誰なの。私とあなたはどこで会ったの。」

鈴花の中に疑問が膨らんでいく。その膨らみは際限を知らない。

そのとき、ふとポケットに入っている写真を思い出した。写真を取り出して見る。そして、白い空を見た。

「まさか、私のお父さんじゃ、ないよね。」

鈴花がその言葉を言った後しばらく男は沈黙する。その沈黙が長引けば長引くほど彼が彼女の父親であるように思えた。彼女は再度彼に聞こうとする。しかし、それは彼の言葉によって遮られた。

「そうだ。君に黒い本を返そう。中を見ると良い。そこに宗太と言う男を助ける方法やお前の知りたい事が書いてある。」

男の言葉の後、鈴花の目の前に黒い本が現れた。又ルに消えた黒い本だ。彼女は宗太を助けるために黒い本に触れた。すると、手が触れた瞬間本が一瞬光る。彼女は嫌な予感がしたために手を離そうとしたがどうやっても離れない。

「どういうことよ。手が離れないわ。まさか、嘘をついたのね。」

鈴花の手はまるで強力な接着剤で張り付いたようにまったく取れない。無理に取れば腕が壊れるんじゃないかと思うぐらいだ。

「済まない、こうするしかなかった。君はこの世界に居てはいけない存在なんだ。それに、少々世界というものを知りすぎた。」

鈴花の体がゆっくりと光りだす。突如強烈な風が彼女に吹き、指先、頭から細かい粒が風につれて流され始める。彼女は自分の手を見る。その光景に現実を受け入れたく無いと首を横に振り顔を遠ざけた。彼女の体が先端から良く分からない粒に変化して風に流されているのだ。良く見ればその粒は英数字の羅列のようだ。しかし、それを知っても現状は変わらない。手、足の先と頭からゆっくりと体は粒に変化し風につてどこかへ消えていく。

「なんで、なんでなのよ。お願い。お願いだから助けて。」

鈴花はただ白い空を見ながら叫んだ。そこに居るだろう男に向かつて。

「さあ、帰るんだ。君の居るべき世界に。」

男の声が聞こえたとき、鈴花の両腕は流され両足が流され始めた。彼女は目の前で繰り広げられる現状に恐怖を覚えた。ただただ彼女は痛みを感じず消えていく自分の体を見ながら、何も無い白い世界に向かって叫んだ。何も出来ない自分に、これから起こる何かに向かって。

そして、ついに鈴花は目の部分も流されてしまった。彼女はいよいよ何も見えなくなり忍び寄る恐怖に絶叫する。その声が聞こえなくなったとき、彼女は小さな光の粒となって何処かへ消えてしまった。

第二十九話 破壊者たちの言葉

第二十九話 破壊者たちの言葉

荒谷は大きく深呼吸をして椅子にもたれかかった。

ディスプレイには先程まで荒谷鈴花というアバターが居た真っ白い世界。彼女の仕事は終わった。今度は荒谷たちの仕事が始まる。

「お疲れさま。佐々木に聞いたが、最近あんまり寝てないんだろ。今日は早く帰って休むと良い。」

現れたのは大塚だった。いや、さつきからずっと背後に居たそう

だ。
荒谷たちはウィルスの駆除が終わると破壊が進んだサーバから必要なデータを取り出した。この中で荒谷は鈴花のデータを先にもらってすぐに彼女との会話の準備を始めた。大塚の話では残りのデータは佐々木がウィルスの駆除方法を調べるために持っていったようだ。

荒谷は鈴花との会話を始めると完全に外部の事は認識できなくなっていた。そのため大塚に気が付かなかったらしい。大塚自身も声をかけづらかったようだ。

「いえ、今回の件で今実験サーバが止まっているんです。今日中にアバターデータを書き換えてサーバに戻さないと。」

画面を切り替えて別のウィンドウを見る。そこには先程の荒谷鈴花が3D空間に浮かんでいた。テレビでたまに出てくる培養槽に浮かんでいるような感じだ。

「サーバから取り出す時に取っておいたバックアップデータをそのまま実験サーバに戻しても良いんですが。今回の件について娘の中に何も残らないのは悲しいと思うんです。だから、せめて何かがあったという痕跡だけは残そうかと。」

荒谷は独り言のように言いながらキーボードを操作して鈴花の記

憶を表示した。

「もうちょっと待つてくれないか。佐々木君がもうすぐ来るから。」
大塚はそのままどこかに行ってしまった。荒谷は首をひねる。佐々木は今ウィルスの駆除方法を探しているはずだ。ハルや黒い本のデータについてはあとで返してくれば良いと言ったはずだが。そういうえば、今気がついたが鶴谷が居ない。他のことに目もくれなかつたためか周りが本当に見えていない。

「まあいい。さっさと終わらせて元に戻してやろう。」

荒谷は独り言を言いながらキーボードを操作して鈴花の記憶を順に消していく。

真部宗太に関する記憶も見つけたが他の記憶と複雑に絡まっていた結局消すことにした。

荒谷の記憶では真部宗太のデータは取り出していないはず。敢えて真部宗太の記憶を消さない場合はアバター自身が混乱しかねない予期せぬデータに遭遇したときのアバターの反応というのは予測不可能だ。

荒谷は記憶を消した鈴花のデータを実験サーバに戻そうとした。

その時、勢い良くドアが開いて鶴谷とともに佐々木が入ってきた。

「荒谷さん。すみません、どいてください。」

荒谷は鶴谷に追いやられて何が起きているのかさっぱりだ。

「まだ鈴花さんのデータをサーバに戻して起動してませんよね。」

荒谷は戸惑いながらも返事をした。鶴谷が何か操作している。じつとターミナルを見ると、ファイル名に `souta` の文字が見えた。彼は驚き画面を指さしながら佐々木を見た。佐々木は黙って頷いている。

「まさか真部宗太のデータなのか。いや待て、それよりも何時取り出したんだ。」

「感染していたウィルスを除去したから急いで持ってきたんだ。記憶とかは弄っていないから後はよろしく。俺は解析にもどるよ。」

驚く荒谷をよそに佐々木は言いたいことだけ言って部屋を出て行

った。鶴谷は真部宗太の記憶を操作していた。

「鶴谷。鈴花に関する記憶も全部消してくれ。やり方は分かるよな。」

鶴谷は驚き、操作を中断して荒谷を見た。荒谷は耐え切れず目を背ける。

「なんでですか。二人の記憶だけを残せば……。」

「もう、鈴花の記憶は消しちまったんだよ。残したくない記憶も真部宗太の記憶も。」

荒谷は鈴花のテータ内の真部宗太に関する記憶を消した事を話した。もう少し待ってれば二人の記憶だけ残してサーバに戻すことが出来たのだ。急がなくても良かったんだ。大塚が言っていたのは、この事だったのか。

「娘の記憶を消してしまった。消す必要のない大切な記憶を。」

荒谷は頭を抱えた。父親としてやってはいけない事をした。父親失格かもしれない。本当の鈴花も、今の彼を見たらなんと言うだろう。

荒谷は見上げた。天井の先に見えるだろう空に向かって。

「なあ、鈴花。お前は……。」

『お前は俺を許せるのか。』

口から出てくるはずの言葉は空気に溶けこんで消えてしまった。

荒谷はうなだれた。許されるわけもないんだ。彼は彼女の代わりを創り、こんな結果を招いたのだから。

「なら、せめて真部宗太の中にある鈴花さんとの記憶だけでも残しましょうよ。」

荒谷はゆっくりと顔を上げた。鶴谷は笑顔だ。それは一瞬だが、すべてを許す神や仏の類に見えた。

やってしまったことは仕方ない。もう取り返せないんだ。だけど、挽回は利くはずだ。

「鶴谷。宗太のデータ内の鈴花の記憶だけ残しといてくれ。私は別にやることがある。」

荒谷は急いで佐々木のところに行つてハルの収集データを見せてもらった。そのなかから適当な絵をキャプチャして受け取る。彼はサーバ室に戻つて空いている端末を操作し始めた。

鈴花の記憶は消してしまった。だから現状では彼女と真部宗太の接点はない。だったら作るんだ。

荒谷はあの世界の神なのだから。

最終話 あの時 of 君へ

最終話 あの時 of 君へ

聴こえてくる目覚まし時計の音。鈴花は時計が鳴り始めるとゆっくりと目を開けて止めた。あくびをしながら起き上がる。彼女は半分寝た状態で身支度を済ませた。鞆を持って一階にあるリビングへと移動する。リビングのテーブルには彼女の母親が作ったサンドイッチが載せてある。母親は既に仕事に行ったようだ。彼女は一人サンドイッチをかじった。

ふと鈴花はサンドイッチを口に含みながら時計を見る。すると予鈴十分前だ。急いでサンドイッチを口に放り込み、皿を片付けて家を出た。そのまま早足で学校へ向かう。時間はあるが普通に歩いていたら間に合わない。学校に入ると昇降口にて素早く上履きに履き替える。急いで二階へ続く階段を上った。そこで、彼女は開かずの間と呼ばれる部屋を見る。何時もの通り鍵がかかっているが何も変化は無い。彼女はそのまま教室へ入った。

「京子。おはよう。」

鈴花は先に来ていた京子に挨拶をしながら自分の席に鞆を置いた。椅子に座ると京子のほうに体を向けた。

「ねえ、昨日テレビでやってた映画見た。」

京子は鈴花の言葉に頷く。二人は昨日放送した映画についてやれ主演の男がかっこいいとか、あの展開は無いだのと色々言い合う。気がつけばチャイムが鳴り、ホームルームの時間が始まる。鈴花は未だ鞆から出していない教科書類を速やかに出して机へとしまった。

チャイムが鳴ってしばらくの後、先生が教室に入ってくる。

「ホームルームを始める前に一つ。今日から一緒に勉強する新しいお友達を紹介します。」

先生の発言は突然で、クラス内が騒がしくなる。男子はかわいい女の子だったら良いとか、女子ならかっこいい男の子ならいいなとかである。

先生は彼らを静かにさせると、廊下のほうを見た。先生が教室の外に居るだろう転校生に入るよう促す。ゆっくりと教室内へ入ってくる転校生。男子生徒だったためか、周りの女子がすかさず反応する。

先生は転校生が彼の横に立つと、自己紹介をするように言う。

「真部宗太です。今日からよろしくおねがいします。」

少々緊張気味の真部宗太。クラス全員の視線が集中しているためか無理も無い。

鈴花から見て彼の目が動いていることが分かった。クラス全員を見ているのだろうと思う。

鈴花は一度手元を見た後、再び真部宗太を見ると彼と目が合った。彼は小さく驚きすぐに視線を逸らした。彼女には彼が驚いた理由がわからない。

「それじゃあ、ホームルームを始めるぞ。じゃあ、真部君はあの席に座って。」

先生に言われて真部宗太は自分の席に向かって歩き出す。その時、鈴花の背後から京子の声が聞こえた。

「ねえ、今度来た転校生。鈴花を見て驚いてたね。まさか、知り合いか。」

そこで京子は先生に注意されたために自分の席に引込んだ。

鈴花は再度転校生を見る。転校生、真部宗太。必死に過去に会った人と照合してみるも一致しない。

「それじゃあ、今日も頑張ろうな。」

先生は必要事項を伝え終わると教室を出て行った。

鈴花は一時限目の授業の教科書を取り出そうと机の中に手を入れる。すると、何か薄い紙が教科書の上に載っていた。取り出してみれば写真だ。その写真を見て彼女は驚く。すぐに周りのクラスメイ

トがどうしたのかと聞いてくる。彼女はすぐに写真を教科書類で隠して何でも無いと言った。

写真に写っていたのは夜の公園でブランコに乗っている鈴花と転校生。そう、今日転校してきた真部宗太。

片手で頭を抱える鈴花。写真に写っているのは確かに彼女と今日来た真部宗太なのだ。しかし、何時誰が撮ったのか分からない。第一彼女は今日始めて彼を知ったのだ。

そこで鈴花は軽く首を振る。いや、もしかすると彼女は彼を知っているのかもしれない。ただ、思い出せないだけかもしれない。しかし、彼女はどうやっても真部宗太との記憶を思い出せなかつた。大切なもの、何処かに忘れてきちゃったのかな。

「荒谷さん、だよな。」

見上げれば、今日来た転校生の真部宗太が居た。背後からクラスメイトたちの声が聞こえたが気にしない。鈴花は写真を出して真部宗太に本当の事を聞いてみた。これは何なのって。

「荒谷さん。思い出せないんだね。何時かは分からないけど、確かに僕らは一緒に居たんだよ。この場所に。」

鈴花が再度写真をよく見れば、家の近くにある公園だった。しばらく行っていないから、すぐに気が付かなかつた。

「ごめんなさい。あなたの事は思い出せないわ。どうやっても思い出せないの。」

真部宗太は残念そうな表情で何度か頷く。鈴花自身もなんだか心が痛む。彼はそのまま彼女の席を離れた。彼女は彼を視線で追いかけると、ふとなにかを思い出したらしく急いで彼女の席に戻ってきた。

「じゃあさ。もう一度最初から始めようよ。友達としてさ。」

鈴花はそれなら良いと頷いた。彼と居れば、写真について何か思いつくかもしれない。

「僕は真部宗太。」

真部宗太は握手を求めてきた。鈴花もそれに応えた。

「私は荒谷鈴花よ。よろしくね。」

もう一度始めよう。もう一度。

Black Book for Busters 絶望
と希望の少女 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653q/>

Black Book for Busters 絶望と希望の少女

2011年2月11日23時55分発行